魔法少女リリカルなのは　～神の子孫の騎士の物語～

tasogaremono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～神の子孫の騎士の物語～

【Ｎコード】
Ｎ５９８９Ｏ

【作者名】
ｔａｓｏｇａｒｅｍｏｎｏ

【あらすじ】
静かで暗く絶望した日常は、突如神様の事故という名の終わりを告げる。
少年は、守るために最強の刃を手に入れる。
その先にあるのは、幸か、不幸か、それとも希望か、絶望か
魔法少女リリカルなのは神の子孫の騎士の物語始ります

第一話　早速、終～了！（前書き）

今回のこの投稿が私の処女作品です。
どうか温かく見守っていただければ幸いです。
まだ若輩者の私ですがどうかよろしくお願いします。

第一話　早速、終～了！

ここは、リリカルなのはがアニメの世界の東京のとある交差点。
「ッたくダリーな。買い物なんてよ」
現在の気温は、３０℃近くありかなり暑い。

「しかも、自転車がないってどういうことだよ」
俺は、母親に買い物を頼まれ行こうとした直後、自転車を盗まれたという状況である。

「理不尽だな～この世界も」
俺は、日差しがガンガンの空に目をやる

コンビ二に行こうと信号を渡ろうとしたときいきなりトラックが出てきて俺は、吹っ飛んでしまった。
バッン！
ドカッン！
ドサッ！
バタッ！

「・・・マジかよ」
これまでのことが走馬灯のようにこれまでのことが流れる。
だが、この人生で楽しいと思ったことがない。
なぜなら、人とかなり関わっていないのだから。
いや、関わることを拒まれていたからである

「貴様なんて消えればいい」「死んじゃえ」
「この世から消えろ」「ぶち殺してやる」
そういったことが脳裏をよぎる

昔からそうだった、ただそこにいるだけで、そこにいるだけで、不可解なことが起きていた。
夜中外に歩くだけで、一気に雷が鳴ったり、授業がいやになればその担当の教師が倒れたり、都合の悪い友人がいれば願うだけで消えていた

そんな悪いことの中でも、生存願望は、あった。

「・・・クソッ！あんだけ鍛えてたのに痛すぎだろコンチクショー！つか、頭がボッーとしてきた。まだまだ人生楽しみたいのによー！」

自分の”まだ生きたい”意識に反してだんだん意識が遠のいてる。
しかしこの状況でどうにかならないことは、知っている

そして、俺に意識は、闇に堕ちた。

キャラ設定（前書き）

ネタばれが含みますので見たい方だけ見ていってください

キャラ設定

主人公
名前　神纏（かむい）　黒祐（くろゆき）
身長　１６９ｃｍ
体重　６５ｋｇ
年齢　９（？）歳
髪色　黒
髪型　リボーンの沢田綱吉と一緒
顔　端正な顔立ち（うわさによるとシャナに似ているらしいショタコンには、もってこいの顔）
目の色　通常時　黒
　　戦闘時　オレンジ

性格　基本的には、おとなしい
悩み　カズキと二人で歩くと姉弟と間違えられる。
能力　創造具現化・霊体具現（騎士）召喚・？？？・？？？
魔力保有量　ＥＸ

パートナー
名前　カズキ（なのはの世界では、ユニゾンデバイスになる）
身長　１７９ｃｍ
Ｂ　８３ｃｍ　Ｗ　５２ｃｍ　Ｈ　７９ｃｍ
体重　聞いちゃだめ！という本人の希望
髪色　黒
髪型　腰まであるロングヘアー
顔　Ｇ線上の魔王の宇佐美ハル＋天神乱漫の卯ノ花咲夜姫を足して二でわった感じに非常に似ている。

キャラ設定（後書き）

キャラ設定をやってみました～
能力は、これから本文で反映させていきたいと思っていますので
これからも宜しくお願いします。
ｂｙ　ｔａｓｏｇａｒｅｍｏｎｏ

第二話　アレ？ここは、どこだ？ってまぁ、予想どうりだがな（前書き）

第三話目です。まだ、なのはたちは登場しません。
時間軸としては、はやてが目覚めた頃です

第二話　アレ?ここは、どこだ?ってまぁ、予想どうりだがな

「・・・ここは、どこだ」
ここは、どこかの学校の教室らしい。しかし、見覚えがない

「そうか、俺は、死んだんだな・・・」
少し、ため息をついた。

「よっ!俺の子供よ!」俺の目の前に俺にかなり似ているが俺じゃない人物が突然現れた。

「うわっあんた誰?」俺は、質問した

「お前の祖先で神様とでも言える存在かな?」
おぉ～早速、神様登場だ。つか、祖先ってオイオイ

「で、神様が何のよう?」
神様に悪いことを・・・しまくってたな～絶対怒られるだろうな～
と思いながら待っていると

「あぁ、君に謝罪しに来た」
神様の唐突な発言に俺は驚くしかなかった

「どういうことだ?」
状況が理解できてない俺

「こちらの手違いで君を死なせてしまった」

「・・・どゆこと」

「簡単に言うとこっちの書類ミスかな？」
ふ～ん、神様いわく書類に間違って判子を押してしまったらしい
それにしても、軽いノリだ

「そんなんで俺死んだんだ・・・」

「まぁ、そう暗くなるなって。今回の事例は、こっちが悪いから。
何とかしてやるよ」

「本当か・・？」
ちょっと希望が見えた気がした、

「本当だ。しかし、並行世界に転生してもらう」

「並行世界ねぇ～」大体は、わかっていた。
並行世界とはもう一つの世界ってことだ

「あぁ」

「もとの世界には、いけないのか？」

「あぁ、真理法則を捻じ曲げることは、出来ないからな」

「つか、真理法則ってなんだよ？」

さっきから気になってたことをたずねる

「まぁ、アカシックレコードや因果律みたいなものだ」

「ふぇ～？」

「わからないだろ」

「あぁ」

満面の笑みで答えてみた

「で、どの世界にいくことになるんだ？」

「それは、お・た・の・し・み・だ」

「んっ！準備が整ったみたいだし時間だな」

なにやら、色々なものに一気に目を通す神様

「準備って何だ？」

「それも、おたのしみだ」

「仕事頑張ってくださいね！」俺は、神様に言った

「あぁ、がんばれよ！」

「じゃあな！」俺は、神様と握手した後に意識が闇にとんだ

そして、ここは深夜のとある公園

周りには夜特有の涼しい風が吹いていた

「んっ！ついたみたいだな。にしてもここは、どこの世界だ？」

「オッ！着いたみたいだな」

「この声は、神様？」
天の声が聞こえたので辺りを見渡す

「あぁ、やり忘れたんだがこれから起こることに関しての情報を頭に叩き込むからよろしく！」
唐突に神様にそう言われる

「エッ！どゆこtウワァァァァァ！」
頭の中に色々な光景が入り込んできた。そのとたん激痛に見舞われたが何とか耐えた。

「頭が痛いぜ・・」

「大丈夫か？」

「大丈夫だ」
尋常じゃない痛みが襲って耐えられる脳がもう既に終わってる

「大体は、わかった。つまり、ある程度は、介入していいんだな」

「そうだ」

「後は、任せろ」

「あぁ、人生頑張れよ」

「じゃあな」そういって、神様の声は、消えていった。

それと同時になにやら首元が光りだし、首元には、ペンダントがぶら下がっていた

第三話　早速、到着！って、物理法則どうしたオイ！

「さて、ここはどこかな？」
そして、俺は、何もなかったように立ち上がり状況を知るために歩き出した。

幸い周りに人がいなかった。

歩いてる途中ペンダントが光りだしたと同時にしゃべりだした。

「私は、あなたをなんと呼べばいい？」
（ワォ、ペンダントが光った＋喋りだしたぜ！）
いきなりで俺は、戸惑った。しかしすばやく状況を理解した。

「あぁ、さっきは、ありがとな。それと俺のことは、神纏（かむい）　黒祐（くろゆき）だからくろゆきと呼んでくれ」
なぜ、こんなに早く状況判断が出来るかというとこれもこいつの特性だからである。

「わかったわ」とペンダントから声が聞こえた
「なら、君の名前は、何だ？」俺は、そういった。
「私に名前は、ない。だからあなたが名前は、付けて。」

「んじゃー名前は、・・・カズキでいいか？」
「カズキねぇ～わかったわ！」そういう声が聞こえた。
由来としては、・・・適当だった、まさに何でもよかった論

この会話から３０分後、俺は、町をぶらぶらしていた（深夜なのに）
「そういや家がないな～」俺は、そうきずいた。

「あっ！」
「どうしたカズキ？」
「野宿は、嫌だよ」
少し弄ってみた。どうやらペンダントも落ち着ける環境が欲しいらしい

「もしかしたら今日は、野宿かもな」
「絶対いやだよ！」
（弄るの楽し～）
そうは、心の中で言うものの大切な相棒だ

「あぁ～うるさいな～俺も今考えてるんだよ！」
「どうする？」
「家を作ればいいんじゃないの」
（唐突だな。オイ！）
まさにホラー級なこと言い出した

「そう簡単に作れるものじゃないよ」そう俺は、言う。
「空き地があれば何とかなるよ」
（オイオイ、この世界の物理法則は、どうなってるんだよ・・・）

「本当？」
「そうとなったら早速探す！」
「ラジャー！」おれは、早速空き地を探した
「ここは、どうだ？」
３０分後、ちょうどいい大きさの空き地を見つけた

「大きさは、十分ね」
「いけるか？」
「もちろん！」

カズキは、そこいら辺にあった空き地に3階建ての人が住める立派な庭付きの家をいきなり出現させた。
出現というのだろうか、辺りに粒子が現れそれが勢いよく形になったみたいだ

「・・・まぁ、理由は、後にするとして結構でっかいな。」
俺は、驚いたが同時に家があることに安心もした。
完全にホラーだまさにホラーだった

第四話　生活は、俺が何とかしてやって、って言っても俺だけか・・・

「そういや、黒祐って一人暮らしできるの？私、家事スキル全然ないわよ、人の姿にはなれるけど」
声からして女のひと、つまりお姉さん的な人になるのだろうと予測する
「あぁ～そこは、大丈夫だろ」

「なんで？」

「ほぼ一人暮らしに近い状態をしてたからな」
家族からも嫌われてたからな

「へぇ～」

「料理は出来るの？」
昔、作ってた。自炊アタリマエナンダヨ
「そこそこ出来るつもりだ」

「死人が出ない？」
流石の俺でもそれはない

「今のとこ出てない。むしろ褒められた」

「へぇ～よかった」

「得意じゃないなら、教えてやるぜ」

「是非とも！」

このハイスペックお姉さんには、どうやら家事スキルというものが存在しないらしい

「わかった」

「洗濯できるの？」

「洗濯機があればな」

「掃除は？」

カズキがメモるように聞いてくる

「一般人なみに出来る」

「なんでそんなに出来るの？」

「長くなるぜ」

「別に良いわ」

原作開始までの時間は、結構あるしな

「まぁ、一人暮らしになってきたのは、５歳ぐらいのときかな・・・」

「なんで？」

「その頃から両親がよく家に帰ってこなくなったから自分でやることは、やっていたんだ」

「へぇ～」

家に帰らないというか、海外出張が多かったからな

「けど洗濯機の使い方とかどこで習ったの？」

「簡単さ、説明書を読んだ」

「その頃から読めたの？」

「いいや、大体のボタンは、母親のを見ていたからね」
真似をする要領でやってたのさ

「おぉ～じゃあ、料理は、なんで出来るの」

「簡単に言うと、独学で学んだからな」

「へぇ～」

「種類は？」
和、洋の事聞いてるのだろうか？

「オールマイティだな」

「へぇ～」

「カズキは、どうなんだ？」

「・・・やってない」
ガチで家事スキル持ち合わせてないらしい

「なんで？」

「なんでも自動だったから」

「おぉ～じゃあ、家事は、俺に任せてくれよ」

「うん！」

第四話　生活は、俺が何とかしてやって、って言っても俺だけか・・・（後書き）

感想とかどしどし書いていただけると幸いです。
箇条書きでも結構です。
ほんの些細なことでもいいのでよろしくお願いします。ｂｙ作者

お金って大事だぜ！

お金、それは、非常に大切なものである
故に、ないと非常に困る

「そういや、お金はどうなってるんだ？」

「それなんだけど・・・」
「どうした？」

「これ渡されたんだけど使い方知らないんだ・・・」

とりあえず今コンビニのＡＴＭさんに向かってるところだぜ
「何ていって渡された？」
俺の手元に黒いカード、ブラックカードと呼べるものが現れた

「なんか、パスは、３７５６４でいっぱい入ってるから失くさないでねだって」
つか、パスの数字ヤバイな！
渡したの神様だろそんな数字使って良いのかよ
「カズキ、いますぐ銀行行くぞ！」

「ラジャー！」

ここは、銀行
「どう黒祐？」

俺は、周りの人にきずかれないように念話で話した

「これヤバイぜ」
「なんで？」
「天文学的な額の金が入ってる」

ざっと額にして０が５０個ついてた
「この世界でドンくらいの影響があるの？」

「世界経済動かせるぜ」

「わぉ～」
「生活には、困らないな」
困らないってレベルじゃなかった某Ａ国の５０年間の国家予算並みにあった

「そうだね～」

「大体何年ぐらい？」

「計算できないぜ」

「わぁ～凄すぎるね」
どうやって手に入れたのかが不思議なところだ
「こんだけ金があるってどういうことだよ・・・」

「遊んで暮らせる？」

「問題ないだろ」

「おぉ～」
おぉ～ってレベルでない

「つか、どんだけだよ・・・」

「まぁ、あの人だからね～」

「これは・・・俺が持ってると危ないからカズキ預かっておいてくれ」

「わかったわ」

俺は、銀行から出た。

「そういや、俺とカズキの戸籍ってどうなっているんだ？」

「あぁ、あの人がでっち上げｔ、おっと、用意してくれたよ」
（今でっち上げてくれたって言おうとしただろ）

「へぇ～そんなことも出来たんだ」

「そういや、あの人って誰だ？」

「ヒ・ミ・ツ！」
（絶対神様だろ・・・）

「家族関係は、どうなってる」

「それもヒミツだよ」

「ヒミツばかりじゃないか」

「気にしたら負けだよ」

「何に？」

「人生に」

（人生に負けるって…）

「分かった気にしないことにする」

気にしないことにした

そして、俺は新しく出来たばかりの家に向かった

「しかし、一軒家にしては、大きくないか？」

「気にしないで」

「わかった」

言い忘れてたが、色々あってこの家（俺の家）に入るのは、初めてだ

お金って大事だぜ！（後書き）

感想とかどしどし書いていただけると幸いです。
箇条書きでも結構です。
ほんの些細なことでもいいのでよろしくお願いします。ｂｙ作者

美女お姉さん登場！おっと、鼻から血が出てるぜ。

俺の家の広い廊下

ここで俺の家の説明をしておこうと思う　ｂｙ黒祐

・外から見ると3階建てである

・まず部屋は、・・・数えるのがめんどいので省略

・キッチンは、最新設備（ホテルの厨房と化しています）

・風呂は、かなり広い

・庭がある（自衛隊の軍事訓練が出来ます↑訳のわからない空間操作の影響で）

・地下室があります（とにかく広いざっと東京ドーム３０個分↑これも空間操作の影響）
＝かなり大きい家なのだ。

「黒祐、私を床の上においてもらえる？」
「何故だ？別に良いが」
そういうと俺は、ペンダントのカズキを床の上においた

ピカァァァン！
（また光ったぜ！オイ！）

ペンダントが光だし中から俺より少し年上のめちゃくちゃスタイルがいい美女お姉さんが現れた

「・・・もしかして、カズキさん？」
「そうよ。なにか？」
俺もあらかたそういう事になるんじゃないかと思っていたぜ、それにしても美人すぎる

「何で人になったんですか？」
「楽だから」
単純明快な理由だった。そりゃあんな狭い中にいたら窮屈だろう
「俺に影響は？」
「ないわよ」

「へぇ～便利なんですね」
「そうよ」
（人型になれるんだったらとっととなっとけよ。独り言風会話結構周りからの視線が痛かったんだぜ）
→深夜だからきにしな～い
「まぁ、気にしないで。それとカズキで良いわよ」
「わかった」
「こうみると以外に小さいわね。黒祐って」

「この年齢だと大きい方ですよ」
「へぇ～」カズキから見ると黒祐は、かわいらしい子供に見える
・　・　・
「かわいいわね～抱き枕にしたいわ～」

「へっ？」
戸惑う黒祐

「半分冗談よ」

「フゥー」
胸をなでおろす黒祐
「ぬいぐるみみたいね～」

「よく言われます」
昔、学校の女子に何回かそのことで抱きつかれ、男子に嫉妬の視線がそのたびに突き刺さっていたのだ

そしてカズキの舐めずりまわすような視線の後
「小さいから抱きついちゃえ！」

カズキの脳内
ぬいぐるみが前にいる→かわいい→抱きつきたい→やってしまえ！

何を言ったが最初は、分からなかったがすぐさま理解した
「エッ！カズキ！いきなり、ちょっとそれは」
唐突過ぎて、もう何がなんだか分からない
「やっちゃえ～！」
「ワァ～」

ドサッ！ボフッ！

顔の辺りに柔らかい感触があった。
カズキに抱きつかれた瞬間、俺は、驚きのあまり気絶した
それもその筈、人生初、美女がイキナリ抱きついてきたのであるから

何故か、わからないがご近所さんからは小さいころから住んでいた
ことになってるらしい。何故だ？やっぱりあの人のせいか！

美女お姉さん登場！おっと、鼻から血が出てるぜ。（後書き）

あとがきコーナ～

作者「このヘタレが！」

黒祐「いきなりそれか！」

作者「それだ！」

黒祐「そういや、作者って名前どうかと思うぜ」

作者「確かにそうだな。なら、黄昏でいいか？」

黒祐「いいんじゃないか（オイオイ、厨二的名前使ってやがるよ）」

黄昏「なんかいった？」

黒祐「いや、特に無いけど」

黄昏「喧嘩売ってる気配がしたのだが」

黒祐「気のせいだ」

？？？「ジャジャジャ～ン！私、参上！」

黒祐「その登場の仕方〇王じゃん！」

黄昏「その前に？？？の部分を突っ込めよ」

黒祐「アッ、悪ィ」

黄昏「こんにちわ、カズキさん」

カズキ「こんにちわ、作者さん」

黄昏「エ～このコーナーでは、黒祐君を徹底的に虐めていこうと思っています」

カズキ「おぉ～」

黒祐「カズキ納得してんじゃねぇー！それと、テメェ！喧嘩売ってるのか！？」

黄昏「ヤル？」

黒祐「やったろうじゃねぇか！」

カズキ「アッ、ヤバイ逃げよ～！」（小声）

黄昏「そっちから来いよ」

黒祐「インフェルニティ・デストロイ・ブレイカー！」

黄昏「ウワァァァァァァ！部屋が～と思ったら大間違いだ！」

黒祐「何！」

黄昏「俺ルール！」

パシィ！

黒祐「技が消えただと！何故にイマジンブレイカー！？、」

黄昏「ハッハッハー！」

黒祐「そろそろ終わらせるか」

黄昏「そうだな」

黄昏「後書きは、タマ～にやっていこうかなと思っています。」

黒祐「気分かよ！」

黄昏「なんか悪い！」

黒祐「何も言ってないよ～！」

黄昏・黒祐「「読んでくださってる全ての人に感謝を申し上げます」」

カズキ「それでは、」

「「「また今度～！」」」

黄昏「そういや、まだなのはたち出てないな～」

黒祐「そうだな」

黒祐「黄昏！！！あのデカイ桃色の魔力光線こっちに向かってるぞ

！」

黄昏「ヤバス！ＳＬＢだ！逃げろ！」

ドゴォォォォン

？？？　「出さなかったお返しだよ！」

黒祐・黄昏「「・・・すいませんでしたぁぁぁぁ！」」

買い物にいってみよ～

ここは、商店街である。少年は、色々間違えられてた
今回、バリアジャケットを考える＋私服の調達のために商店街に来ている

「お、お姉さん・・・」少年は、顔面赤くしていた。
「何？黒祐？」

「ねぇ、なんで俺らこんな状況になってるの？」

「しょうがないじゃないの黒祐小さいんだから」
「小さいっていうな！」

「しょうがないわね～戸籍上”姉弟”になってるんだから我慢しなさい」
「チェッ」

黒祐は、親子と間違えられてた。だが、どこからどう見ても誰がどう見ようと姉弟に見えるからである。
そして、これも、とある神様のいたずらである

「そういや、服何がほしい？」

「う～ん、あの店で少しみたいな」
「いいぜ」

カラン、カラン！

「いらっしゃいませ～」

そこそこの店員が話しかけてきた

「「こんにちわ～」」

「黒祐！アレとアレとアレとそれから・・・」

「アレっていわれても分からないよ」

「あの、黒いジャケットと蒼のジーンズと白のＴ－シャツがいい」

「いいぜ」

「試着してみたら」

「わかったわ」

カズキが試着室に入った

それから数分後

「終わったわ」

「おぉ～」

「若干きついところがあるわね～少し苦しいわ」

「どこがだ？」

「その・・・胸辺りが・・・」

胸の辺りがかなりピチピチであるのでかなり破壊力がある。＋少しもじもじしているという特殊効果つき＝すごく似合っているので

（フォォォォォォ！）←黒祐の心の声

黒祐に３０００のダメージ

「ちょっと！どうしたの？」

「クラッと来たぜ」

「何に！」

「気にしないでくれ」

「大丈夫？」

「面白いくらいに大丈夫だ」

「ならいいわ、レジ行くわよ」

「ＯＫ」

値段は、高かったが気にしなかった

あれだけ金があるのに残額を一応気にかけている

そして、俺とカズキはそれらをもってレジのところに行った

「これ下さい」

「お支払いは？」

「カードで一回」

「かしこまりました」

母親が子供に支払わせてるような光景だ。

カードを通した瞬間店員が驚いていた。

そして、買い終わって外にでた

「ありがとね！買い物に付き合ってくれて」

「別に良いさ」

「そういや、黒祐は、何を買ったの？」

「俺も服だ」

「ふ～ん」

「ちなみに紺のジーンズと黒のＴ－シャツ買った」

「へぇ～」

「そういや下着はどうしよっかな～」

とてつもなく嫌な予感がする

「自分で行ったら？」

「ヤダ！」

「理由は、ない」

俺は、首根っこ捕まれ身動きが取れない

「それじゃ、逝ってみよー！」

字が、字が、字が違う待ってくれ！

「ヤ☆ダ！大丈夫姉弟なんだし」

「ノォォォォ！」

そして俺は、カズキの危ない買い物に付き合わされた

買い物にいってみよ～（後書き）

感想とかどしどし書いてくれると幸いです。
ハァ、テストが近いな～

偶然もほどほどにしとけ！

そして、カズキとであって3ヶ月
俺は、庭でカズキに剣術と体術を習っていた。
誰に剣術を習ってるかというともちろんカズキである。
何故習ってるかというとあの買い物の時の会話が原因である

「そういや、黒祐ってなんか習ってた？」

「習ってたが」

「じゃあ、やってみるよね？」

「ナニヲデスカ？カズキサン？」
少し嫌な気配がする

「体術と剣術」

「なんで？」

「世の中が危険だから」

「そんな、車が突然爆発ｓ」

ドゴォォォォォォン！
車が爆発した。

（オイオイ、マジかよ）
「ね！危険でしょ」

「まぁ、危険だな」

「ねっ！」

（つか、タイミングよすぎだろ！良すぎにもほどがあるぜ！つかこの状況じゃ断れないだろ）

「・・・俺少しばかり運動嫌いなんだが？」

「最初は、優しく教えてあげるよ」

「そんな時間あるのか？」

「あるんだな～これが」
あるんだぁ～もう認めざるを得ない状況だ

「どういうことだ？」

「時間操作」

「それって・・・「たくさん時間を増やせるんだよ～」」

「そんなことができるの？」
この人ならやりかねない

「まぁね」

「”ゆりかご”とかどうするの？」

「それは、どういうことだ？」

「ここにいる時点ですでに修正力が働いてるわよ」

でた、定番の修正力

「やっぱりな」

「これから予測不可能なことが起こるわよ」

「そっか」

重い空気になり

「いつ”イレギュラー”に消されるかわからないのよ」

その言葉がカズキからこぼれた

「へぇ～」

「よく平然としていられるわね」

「まぁな」

「その余裕は、どこから生まれるのよ？」

不思議な顔をするカズキ

「有名な人の言葉で”その腐った幻想をブチ壊してやる”ってのが

あるんだよ」

「へぇ～」

「だから、そのイレギュラーとやらをぶち壊してやるよ」

「ずいぶん意気込んでるわね」
これから面白くなるんだよこれが

「面白くしなくてどうするんだよこの人生」

「それもそうだわね」

「そういうわけで、教えて下さい師匠」

「よろしい」

こうして、鍛錬の日々が始まった。といってもある程度は、体に染みついていた

偶然もほどほどにしとけ！（後書き）

感想をどしどしください
コラボもお待ちしています

美人さんからのプレゼントは、いわくつきかも!?

ここは、俺の家のリビング
そして、カズキが何かを隠している。
はっきり言うと挙動不審で不自然だ!

「訓練お疲れ様」

「そりゃどうも」

「ご褒美に黒祐にプレゼントあげるよ」

「おぉ～」

「これだよ」
カズキの手の中には、黒い指輪にチェーンがかかっているペンダントがあった。

「こりゃなんだ?」

「首につけるものだよ」不思議そうな目でカズキは、俺を見つめてる

「そりゃわかる」

「それ以外にどうかしたの?」

「いや、なんでもない」
(気にすると面倒なことになりそうだな)

「着けてあげようか？」

「すまないな」カズキが俺の後ろに回ってプレゼントを付けてもらった

「おわったわよ」

「どうも」

（まともな物みたいだから大丈夫だろ）

「いや～似合ってるわね」

「そりゃどうも」

「絶対なくさないでよ！」

「亡くすもんかよ、カズキから貰ったもんだからな」

「肌身離さず持っていてね」

「わかった」

そして、ここは、庭である

ガキィン！ガキッ！ドゴォ！

剣と剣がぶつかる音がする。

「ハァァァァァァ！」

「マダマダァァァァ！」

ガキィィィン！
「負けるかァァ！」

「こっちこそぉぉぉ！」

ガキィン！ガキッン！
「黒祐いい太刀筋だね！その調子だよ！」片手で剣を立って持ちながらいう

「ハァッ！ハァッ！ハァッ！・・・少し休憩しようぜ」俺は、かなり疲れて庭にひざをついている

「ハァハァ、わかったわ」カズキも、息が荒い

「少し無理すぎだろ？」

「そう？」

「いくら強化がかかってるとはいえこの速さでのバトルは、結構しんどいぜ」
それもそのはず、どこかの侍じゃあるまいしこの速度は、かなりきつい

「そうね。まぁ、人間にしちゃ上出来よ」

「人間にしちゃって、おいおい」

「存在自体が異常なんだからなんともないでしょ」

「そうでもねぇよ」
ほんとそうでもねぇよだ

「あらそう」

「そういうお前こそ疲れてるんじゃないのか？」

「まぁね、それほど黒祐が上達したって事よ」余裕そうな表情でカズキが言う

「そりゃありがたいぜ」
その好意を素直に受けておいた

美人さんからのプレゼントは、いわくつきかも！？（後書き）

感想をどしどしお待ちしています
コラボもお待ちしています
これからも宜しくお願いします

パシリで行ったら・・・

カズキ視点から黒祐をみると黒祐は、ここ数週間でかなりの腕前に上がっていた。
本来1年かけてやるところを1週間で終わらせてる。本当に黒祐の才能には、驚かされる。

そして休憩がてらコンビニに向かってる（いつものパシリ）。

「あぁ～ダリ～」

「大丈夫ですか?」カズキからののペンダントは、会話機能が付いているらしい

「まぁな!」

「アッ、ダンプカーだこんなところ通ってるなんて珍しいな」

「そうですね」

「女の子が勢いよく走ってるな～何を急いでるんだか?!」
途中の交差点で走ってる女の子がこのままノンストップで走るとダンプカーにひかれそうになっていた。無論女の子は、止まる気配がない

「危ない!」
俺は、走ってる女の子に大声で言った。けど気づいてない

俺は、必死に走った。

（チキショー、間に合わない！）

そう思ったとき突然カズキから貰ったペンダント光りだし、機械的な男の声でこういった。

「ライトニング・ムーブ！」

俺には、そう聞こえた。

その瞬間、体が黒い閃光に包まれてダンプカーにぶつかりそうだった茶色い髪の女の子をお姫様抱っこで反対側についていた。

俺は、自分の今の自分の行動に驚いてたが今は、驚くべきではないことを悟って言った。

「大丈夫か？」

「あっ、ハイ大丈夫です。ありがとうございます。」女の子は、そういった。

「君、名前は？」と俺が聞くと女の子は、

「高町なのはです。」といった。

これが俺の未来の魔王との出会いである

俺は少し驚いた。しかし、表情には、出さなかった。

「気をつけろよ」

「あっ、はい」

「じゃあな」

「さようなら～」

そして、物語は、動き出した

パシリで行ったら・・・（後書き）

みるあいさん感想ありがとうございますｂｙ作者

判明！新たなる世界と、美女さんの正体！

その場を立ち去って家に帰った後リビングで俺は、カズキにこう聞いた。

「前から気になっていたのだがここは、どこだ？」そう聞くとカズキは、こういった。

「あぁ、言い忘れてたけど、ここは、リリカルなのはの世界だよ。ちなみにＡ‘ｓのだよ」とカズキは、サラッと言った。

「なんだってぇぇぇぇ！」俺は、かなり驚いた。

そりゃそうだ。ここに来る前に世界のかなりオタクの友人が言ってたのが本当なら魔法の使える世界にいるのだから。

「何故、俺がこの世界にいるんだ？」カズキに唐突に聞いてみる

「なんでっていわれても、まぁ、簡単に言うとあの世の法則って奴ね。」

「なんで、あの世の事知ってるんだよ？」意外な反応に戸惑う俺

「乙女のヒ・ミ・ツ！」

「・・・まさか神様の知り合い？」

「う～んおしい。まぁ、あの世を会社にたとえると総務って所かな」

（あっ、乙女のヒミツ簡単に言っちゃった。）

「それってめちゃくちゃ役職高いじゃん！」意外すぎてかなり驚いてる俺

「まあねぇ～」

「なんであの世の総務さんがここに？」

「調査＋興味本位＋あの人（神様）からの命令でって所かしらね」

「へぇ～」

「どの位いるの？」

「あの人が言うには、ずっと黒祐のそばについていろだってさ」

「ふ～ん」

（こりゃありがたいぜ）

「そういや聞きたいんだけど？」

「なに？」

「俺ってもしかして特殊能力あるの？」最近明らかにおかしいこと（いきなり右手から木刀や日本刀が出てきたりなど）が連発してたので聞いてみた。

その回答は・・・

「あるわよ」
「エェェェェ！」

「魔法使える？」
「そりゃもうわんさか」

「オォォォォ！」

「そこまで驚かなくてもいいんじゃない？」

「すまん。取り乱した。」

「能力の大まかな概要って言える？」

「言えるわよ」

「おぉ～」さすが、偉～い人だと思った

「簡単に言うと想造具現化、裁きの代行、他色々、かな？」
（チートじゃんかなりのチートじゃん）

「大体わかったが結構やばいのがあるんだな・・・」

「まぁ、あなたの家系自体が結構やばいからね・・・」

「どういうことだ？」

「今は、聞かないで」
なにかあるのだろう俺は、そう思った。
「わかった」

判明！新たなる世界と、美女さんの正体！（後書き）

のうとさん感想ありがとうございます

デバイス！GETだぜ！　ｂVポケモンののりで＋初キスだよ

この会話は、黒祐がこの世界に来る前のことである

「そういやさ、なのはの世界には、デバイスっていうもんがあるんだぜ」

「なんだよ、それ？」

「制御装置みたいなもんさ」

友人がそう話しかけてくる

「けど、ようつべとかでとても制御しているとは、思えない奴いたぜ」

「あぁ～魔王さんのことか」

「魔王って誰だよ？」

あの人だよ！あの人！

「ようつべで見て来い」

「ンな時間ねェよ」

「まぁ、そろそろ期末だしな」

はぁ、テストダリ～と思うこのごろ

「自信は？」

「もちでないぜ！」友人は、サムズアップした

「おいおい」

「あっ、塾の時間だから先に行くぜ」

「あぁ、そうだな。じゃあな」

「じゃあな！」
そういと去ってゆく友人

そう過去のことを考えながら、俺は、デバイスのことを思い出した

「そういやさ、ここってなのはの世界だよな」
「あぁ、そうだけど」
「でさ、なのはのレイジングハートやフェイトのバルディッシュ見たいなインテリジェントデバイスって神様から支給というよりか手元にないよな」
ちなみに、訓練の時のデバイスは簡易デバイスで機能も最低限のものしかない
せいぜい、強度のいい刀を出すのが精いっぱいだ
「まぁ、そうね・・・うん？」
なにやら空を見るように考え事するカズキ
カズキが俺の胸にかかってるもう一つの指輪に目をやった

「ねぇ、その某マフィア間抗争で奪い合いになりそうな、その指輪って元々？」
「あぁ、このボンゴレリングか？」
「せっかくフォローしたのに・・・」
カズキが少しがっかりした顔をした。

俺の首にかかっているのは、大空のボンゴレリングの水晶のところが赤水晶であるレプリカがかかっていた

「そういやさ、これから微量なんだけど、魔力が出ているんだよね～」

・
・
・

「マジで？」

衝撃の事実だった

「マジなんだよ」

「もしかして、これがデバイスとか？」

「かもね～」

そう言いながら俺はリングからチェーンをはずし薬指に俺はそのリングをはめると

「・・・っ！」

「黒祐！魔力値が！とんでもないんだけど！？」

カズキがあわてて今起きている事象を伝える

「わかってる！少し離れてろ！」

俺は直感でそう感じた

感覚がかなり研ぎ澄まされる、１０ｋｍ先の人が歩く音や、電話の会話、大気の状態、あらゆるこの世界に関する情報が俺の頭の中に流れ込んでくる。魔力干渉・・・システム構築・・・あぁ、こういう感じなんだ、新しい世界って

そして、現実世界から一旦意識を持ってかれた。

「ここは・・・？」

まわりはなにもない平原、その中に白いワンピースと麦わら帽子姿で立つ女のひと

「やぁ、よく来たね」

唐突にその女の人が話しかけてきた。

「それにしても、君はどういう法則でここにいるのかね？不思議だよ」

意識がはっきりするにつれて、その顔がはっきりしてくる。そんな中でも強引に話を進めてくる女のひと

「君はどうだい、この世界の法則？それにしても、腐ってるよね、前にいた世界は、なにもしてないのに」と話を語りだしてきてた

そして、意識がはっきりしてくると相手が分かると

「ようやく意識がはっきりしてきたみたいだね、もう一人の自分、いや

”僕”

」

俺はあまりの事実に驚愕するしかなかった。

そこにいたのは、自分をまるっきり女体化したらこうなるはずの自分（顔がものすごく似てないものの）、いや俺が女である世界での俺がいたからだ。その姿は、自分でも惚れてしまうくらいだった。

「やぁ、というより、やっと会えたね」

ゆっくりと近づいてくる俺、その姿に恐怖を覚え後ずさりしようとするが、なかなかできない
「恐がらなくていい、君と私は、二人で一人なんだ、こわがることでもないさ」
その女の人は耳元でこう囁く
「私はあなたであってあなたじゃないよってことを覚えといてね」
そういうと俺の時間が止まったように感じる。そして

チュッ・・・

自分で自分の唇が奪われた。
しかも、知らずの間に、俺の口の中に彼女のしたが入り込んでいた

「かわいいわね、もうひとりの私は、私の名前は、神纏鈴、もうひとつの世界のあなた、大丈夫よ、私はここにいるから」
そういうと俺の目の前から粒子のごとく消えていった
そして、この世界での精神が途切れた

「大丈夫?」
現実世界に戻ると、カズキが俺を膝枕してくれてた
「あぁ、大丈夫だと言いたいところだな」
俺は、そういうものの内心、気持ちの整理がついてなかった
「(俺の前世何があったんだ)」
としか自分に言いようがなかった

で、肝心のデバイスは、というと

『Ｄｏ　ｙｏｕ　ｆｅｅｌ　ＯＫ？　Ｍａｓｔｅｒ？(大丈夫ですかマスター?)』
「あぁ、大丈夫だ、それより名前は?」

『ｔｈｅ　ｎａｍｅ　ｓａｙｓ　ｔｈｅ　ｂｌａｃｋ（はい、名前はブラックと言います）」

「そうか、これからよろしくなブラック」

『Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｍａｓｔｅｒ，ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｎｏｗ　ｈａｖｅ　ａ　ｖａｒｉｅｔｙ　ｏｆ（マスターこそ、色々ありますがこれからよろしくお願いします）』

俺は浮遊しているデバイスと拳を合わせた

とりあえず、デバイス関係は一件落着だが心のもやもやは、以前取れなかった

デバイスを起動させるから一転、まさかの精神世界での対話だ。これほど奇想天外なことは、ないだろう

デバイス！GETだぜ！　bVポケモンののりで＋初キスだよ（後書き）

後書きコーナー

黒祐「今回短くなかったか」

黄昏「まぁ、テストが近かいからな」

黒祐「お前も大変なんだな」

黄昏「同情するなら金をくれ」

黒祐「なんで？」

黄昏「モンハン」

黒祐「あぁ～」

黄昏「というわけで金をくれ」

黒祐「ヤダ！」

黄昏「キサマァァァァ！」

黒祐「社長だ！社長がいるぞ！」

黄昏「貴様を地獄まで連れて行ってやる！それも！」

黒祐「なんだ！」

黄昏「全速前進ＤＡ！」

黒祐「ヤメテェェェ！」

カズキ「生きて帰ってきなよ～」

黒祐「ｏｒｚ」

魔王様と接触　ｐａｒｔ１

「ねぇ～甘いもの食べたい～」

「エ～なんで俺にくっつきながら言うんだよ」

「だって、こう頼んだら、ゆうこと聞いてくれるかな～って思って」

「だからってさ、この状態は、ないだろ」

今の状態：後ろ抱きつかれている状況　そして、色々当たってる
そして色々な訓練があった後なので疲れてる

「買ってきてくれるまでこの状態だよ」カズキがのしかかっている

「あぁ～わかった」

「本当！」カズキが明るくなった

「買って来るけどいつもの店でいいよね？」

「え～なんなら、翠屋行ってきてよ」

「あんまり行きたくないんだけど」

「変装すればいいじゃん」ソファアに座りながら言ってる

「え～気が引けるんだけど」

「じゃあ、貸してあげるよ」カズキがぽっけの中に手を突っ込んで何かを探してる

「何を？」

「変装アイテム」カズキがポケットから黒いふちのメガネを出した

「・・・なんですかそれ？」

「これをつければ誰でも違った姿になれます！」カズキが自慢げに言う
そしてメガネをかけてみる

「おぉ～」カズキが黒祐の変わりっぷりに驚いていた

「どうだ？」

「まさに別人ね」

「ふぅ～ん」

「というわけで翠屋に行って来てね～」

「了解」
つか、能力使えば問題なくね？

歩くこと３０分

「ここか～あんまり顔知られたくないけどな～まぁ、ばれたらばれたときでいっか」

ここまで来ていきなりなのはとエンカウントは、避けたい
そして、翠屋に入る

「いらっしゃいませ～」

「こんちわ～」

「何か御用？」大人の女性が出てきた

「甘いもの買いに来ました」

「随分と大雑把なこというわね」

「ここのオススメはなんですか？」

「シュークリームですよ」
やっぱりだった

「じゃあそれ５つ」

「できるまで、うちの娘とちょっとお話していかない？」

「何をですか？」

「まぁ、世間話ってところかね～」女の人は、なにかを確かめるようにいった

「じゃあ時間もあることだしそうさせてもらいましょうかな」俺は、自分の時計を見ながらそういう
この時、何かを見抜かれた気がした・・・

「じゃあ、今呼ぶわね。なのは～」

「は～い」

あの時の女の子が奥から出てきた

「ちょっとあの子とお話してて」

「は～い」

俺となのはは、席の一角に座った

「こんにちわ」

「こんにちわではなくお久しぶりじゃないか？」

「エッ？どういうことですか？」

俺は、変装アイテムをはずした

本人もあまりの変装ぶりにに驚いてる

「久しぶりだね高町なのはさん」

「まさか、あのときの人？」

「そうだな」

「そういや、名乗ってなかったな俺の名前は、神纏黒祐だ」

「よろしく黒祐君」

「あぁ、よろしくなのはさん」

「さんづけでよばなくてもいいよ」

「そうか、ならよろしくなのは」

「うん」なのはがにっこり笑った　あの笑顔は、万国共通！

そしてたわいもない話が続く。そして、話は一変した

魔王との接触　Ｐａｒｔ２（前書き）

黒裕「なにやってたのかな～」

黄昏「テスト終わったからモンハンやって今日は、トレフェス行ってきた」

黒裕「それで更新が遅れたと」

黄昏「なにか？」

黒裕が黄昏の頭に刀を突き付ける

黒裕「真面目にやろうな」

黄昏「へぇ？」

黒裕「ぶっ飛べぇぇぇぇエ」

黄昏「なんでぇ～！」

さぁ、本編開始

魔王との接触　ｐａｒｔ２

前回のあらすじ！

カズキが甘いものを食べたいとねだる

←

普通のケーキ屋で済まそうとする

←

カズキが翠屋がいいと駄々をこねる

←

しょうがないから翠屋に行く

←

魔王様とお話（世間話）になった。

そしてたわいもない話が続く。そして、話は一変した

「そういや、ここまでやってるのに気づかないの？」俺は、にっこり笑ってそう言った

「ふぇ？なにが？」

「はぁ～」

（まぁ、そりゃそうだな、未熟なんだし）

「そこのフェレットは、気づいてるみたいだな」

「何が？」

なのはとユーノの念話

（なのは、そいつの魔力なのはの１０００倍以上あるよ）

（ホントにユーノ君？）

（ホントだよ。けど見る限り敵意はないよ）

（なら大丈夫だよ）

（ならいいけど）

念話終了

「気づいたみたいだな」

「まさか、黒祐君、魔導師？」

「そうかもしれないな」そっと笑った

「そういや、首からかかっているのは、レイジングハートだな」

「何で知ってるの？」

「じきにわかるさ」

（おっと口が滑ったな、ヤバイヤバイ今日は、ここいら辺でおいとまさせてもら
おうかな）エンカウントは、避けたいものだ

「シュークリームできたわよ〜」さっきの女の人が言った

（タイミングがいいな）

「あっ、は〜い」

「じゃあね、なのは」

「じゃあね」そして、俺は翠屋をあとにした

俺の家の玄関

「ただいま〜」

「おっかえり〜」

「これでいいのか？」

買ってきた袋をカズキに渡した

「これってオススメのシュークリームじゃん！」

「そんなに嬉しいのか？」

「これ珍しいんだよ？」

シュークリームが珍しい？ここは、昭和なのか？

「何で？」

「売り切れ必死なんだよ」

「へぇ～」

「うんま～い」カズキが翠屋のシュークリームを両手に持って食べている

「一個食べていいか？」

「いいわよ」

「うまいな」
甘ったるくなく程よい甘さで美味い

「でしょ、」

「いない間に何かあったか？」

「特になかったわよ。それより黒祐は？」

「未来の魔王様とお話してきた」

「へぇ～」

「まぁ、そんなに話してないぜ。しいていうなら敵じゃないことぐらいは、アピールしてきた」

「ふ～ん」

「とにかくお疲れ様」

カズキが笑顔で言った。その笑顔は、天使のようだった

オッ、はやてじゃんｐａｒｔ１（前書き）

そこは、ご都合主義で、ｂｙ作者

オッ、はやてじゃんｐａｒｔ１

「なぁ、カズキ～」
俺は現在訓練も終わりソファーでなかば自分の理性（ライフポイント）を気にしながらごろごろとしている。
なぜかって?そりゃ訓練の後で二人とも疲れているから、ソファーで横になっている。
そして、カズキが後ろにいてよっかかってるから、そう・・・色々な意味で全く休めていないむしろ肉体訓練の後の精神訓練である
ちなみに、作者権限でカズキの心の中を見てみると

「（はぁ～襲わないかな～?襲おっかな～?）」
とりあえず逃げろとしかいえなかった

「なんか、逃げろって言われた気がする」
と横たわりながらも自分の理性と格闘中
「う～ん、聞こえなかったよ」
「なら、いっか」
そういいながらも、クッションを抱きながら横になる
カズキから見るとさながら猫のように気が抜けた顔の黒祐

「あっ、そうだ、夕飯買いに行かなきゃ」
「あぁ～もうこんな時間～」
時計を見るともう夕方の４時だった

「んじゃあ、言ってくる」
「いってらっしゃ～い」

俺は灰色文字入りTシャツに、青いジーンズに、黒いパーカーを羽織った姿でスーパーに向かった

あるいて数分後スーパーについた

「今日は、カレーだな」

なぜカレーなのか？まぁ、それはカズキが気分でチョイスしたのだ

「とりあえず、にんじん、たまねぎ、肉に、ジャガイモに、あぁ、カレールーは家にあったかな？」

そういいながらも、今日の献立を考えながら歩いていると

「う～ん、あとすこしなんやけどな～」

目の前に車椅子の女の子が商品を取ろうとしているが手が届いてない

「（危なっかしくてあの女の子見てらんないな～）」偽善使い（フォックスワード）じゃないがやはり困っている人を見たければ助けたくなる、それはこの世界に来ても変わらないことだった

俺は、ゆっくりと車椅子の女の子のところに行きその商品を取ってあげた

「これかい？」

「そうや、ありがとな」

女の子はにっこりと笑う

「そりゃどうも、まだ買うものあるのか？」

「うん」

「わかった手伝ってやるよ」

「ほな、ありがとうな。けど君の買い物は？」

「あぁ、そりゃ大丈夫だ」もう俺の買い物は、既に済ませてあるのである、ちなみに、かごを二つ持つくらい鍛えた俺にとっては造作

もないことだ

「ほんまに？」
「本当だ」
「そんなら頼んでもええか？」
「いいぜ」俺は、あのキャラをを手伝うことになった

そして、俺は、車椅子を押してあげて野菜売り場に向かっている

「そういや、君の名前なんていうん？」
女の子が唐突に聞いてきた
「あぁ、俺の名前は、神纏黒祐だ」
「へぇ～いい名前やな」
「そりゃどうも」
若干照れる俺
「それより君の名前は？」

・　・　・

「八神はやてや」
俺はまさかなところで今後物語の鍵となる少女にであった

「へぇ～」
俺は慌てているのを見透かされないようにポーカーフェイスを作る
「見る限り一人暮らしだろ？」
「なんでわかったん？」
「理由は、簡単。車椅子の女の子が一人で買い物なんて有りえないからな」
もちろん、原作知識知ってるのでとは、とてもいえない

「そういわれるとそうやね」
「そういや、君の家行って今日、ご飯でも作ってあげようか？」
そういうと、はやては、顔を赤くしている

「ほんまに？」
「本当だよ」俺は、にっこり笑う

はやての心の中
「（えっ、ほんまにか手伝ってもらったのに食事まで作ってくれる
なんてほんまにこの子ええ子やし、かっこいいな～、お婿さん確定
やな）」

「お～いはやて～」

「・・・」はやては、顔面赤面状態である

「はやて～」
「ハッ！？」
「どうかしたか？」
「な、なんでもないで」
あからさまに何かあったような顔
「ならいいけど」

「あっ、それとってな」はやてが、トマトをさした

「これか？」

「そや」

「あっ、それも」少し行ったところのにんじんを指差した

「了解」
そういうとはやては自分のかごを確認しおわり
「ほなレジいくで」
「ラジャー」
そういうと、一緒にレジに向かった
レジで会計を済ました後で一緒に荷物を詰めているとき
「そういや、黒祐君ってもしかして、一人暮らし？」はやてが聞いてきた
「まぁ、そうなるな」
実質デバイスのカズキは、まぁ最近家事を覚えたばかりだから、戦力として入れないとすると実質一人
「料理の腕どれくらいなん？」
抽象的な質問をされた
「わからないな」
「やったことあるん？」
「毎日やってました」
「おぉ～」
そういう会話が続きながら詰め込み終わった後、ここは、スーパーの外
「そういや、黒祐君って学校行ってるん？」
とりあえず、戸籍がないので学校には行けてない、そもそも知識レベルとしては大学生レベルはある

「行ってないが？」
「なんでや？」
はやてが聞いてくると
「わけありでな」
「（まぁ、実質この世界に来たばかりだからな）」
戸籍がありませんなんてとてもじゃないけどいえたもんじゃない

「そういや、帰りに俺の家よって良いか？」
「別に良いで」
そして、俺は自分の家に向かった

オッ、はやてじゃんｐａｒｔ２

今までのあらすじ

はやてがスーパーにいた

←

とりあえず家に行くことになった

Ｔｈｅこれだけ！

スーパーから出てとりあえず今は俺の家の玄関

「カズキ～いるか～？」

俺が家に入って呼ぶと

「何？黒祐？」

転がりながらカズキが出てきた

床を転がりながら出てくるのはさながらシュールな光景だ

「はやて見つけた」簡潔に理由を言う俺

「おぉ～」

「（さすがカズキさん話が早い）」

知ってるだけあって話が早かった

「色々約束しちまったからな。今日開けて良いか？」

「別に良いよ、その代わり」

「わかってるよ、翠屋のアレだろ？」

「わかってるじゃな～い」

カズキがねっころがりながら言う

「恩にきる」

「色々な意味でごゆっくり～」
壮大な問題発言
「どういうことだ？」笑顔でカズキに迫る俺そして、カズキは一目散に逃げ出そうとしている
「ほらほら、彼女を待たせてるわよ」
そういいながらもゆっくりと立ち上がり何処からあらわしたのかわからないがフィアンマ御用達の第3の腕で俺の肩を押す

「わかった。たぶん朝くらいにかえると思う」
「わかったわ」
「じゃあ」
「ごゆっくり～」
そういいながら俺は外にいるはやてのところに向かった

そして、俺ははやてのところに向かうと
「すまないな、はやて」
「別に良いで」
はやてが待ってた
「さぁ、いくか」
「そやね」
こうして、俺ははやての家に向かった

はやてのいえ玄関前

「ただいま～」はやてが中に入っていく
「失礼しま～す」

「おぉ～広いな」
入ってみるとリビングが広かった
「そやろ」

ドヤァな顔をするはやて

「そういや、夕飯何時くらいにする？」

「そうやね、７時くらいってどうか？」

打ち合わせをする二人

「そうだね、じゃあ少し寝かせてもらうよ」

訓練の疲れもそんなに取れてなくちょうど眠気が襲ってきたので

「ほなおやすみ」

俺は、ソファーに横になった

はやてｓｉｄｅ

「（黒祐君の寝顔かわいいな。少し一緒に寝ても問題ないやろ。）」

「おやすみ～」小声で言いながらもはやても黒祐の隣で横になった

３０分後

「ふぁ～よく寝たって！はやて！？」隣には、たいそう寝顔がかわいい女の子

そして、まさかの理性（ライフポイント）が一気に削られる

「んなんや？」はやてが目をこすりながら言ってる

どうやら起してしまったらしい

「何で隣で寝てるの？」

俺は聞いてみると

「いや、ついかわいくてな」いつの間にかぬいぐるみ扱いされていた

「（俺は、女じゃねー！）」

「かわいいからって」

俺は少しためらいながら言うと
「いややった？」
今にも涙目になりそうなはやて、さすがに話題を変えるべきだと思い
「いや、べつに？それより作るか！」
俺は夕飯を作り始めた
「そやね」

「少し待ってな」

「わかった」
俺は手身近にあったエプロンを着て台所に入った

～料理中～
モ○ハンの定番の猫が料理をしているあの音楽が流れていることをご想像ください。　ｂｙ作者
（作者省略しやがった！ｂｙ黒祐）
黄昏（作者）「サーセン」

料理開始から４０分後

「できたぜ」
俺は、完成したものを机に並べる

「いいにおいやな～」
「それはどうも」
転生前は学校で１位２位を争う料理の腕前で、たびたび料理本でも掲載されたことがあった

「「いただきます」」二人で声を合わせて言う

パクパク、モグモグ

「どうだ」

「あかん、負けた」

はやてが肩を落とす

「何が！？」突然の言葉に戸惑う俺

「このカレー美味い」

なにやら、勝負していたらしい

「そりゃどうも」

「黒祐君！」唐突にはやてが俺の両手をつかんだ

「今度料理教えて！」

突然の約束に戸惑いながらも

「あぁ、わかった」

「約束やで」

「あぁ、約束だ」

約束することになった

オッ、はやてじゃんｐａｒｔ２（後書き）

後書きなんだな～

黒祐「そういやさぁ～」

黄昏「なんだ？」

黒祐「初めてで家にＧＯってどういうことよ」

黄昏「別にいいじゃん」

黒祐「よくない」

黄昏「それしかおもいつかなかった」

黒祐「滝に打たれて来い」

黄昏「何故に滝？」

黒祐「精神集中のためにだ」

黄昏「俺の脳内書庫壊すきか！」

黒祐「しらん！」

黄昏「コ～ス～プ～レ～は、どうしようかな～？」

黒祐「（ガクガクブルブル）」

カズキ「やりすぎだよ」

黄昏「すまん」

黒祐・黄昏「すべての読んでいただいている人にこの上ない感謝を申し上げます」

カズキ「と言うわけで」

黒祐・黄昏・カズキ「バイバ～イ」

はやての家で

猿でもわかる前回までの素晴らしい位完結的でどこか飛ばしてる気がするあらすじ

スーパーではやてを見つけた
←
まぁ、心配だったからついて行った
←
案の定ハプニング発生
←
現在

にぎやかな夕飯が終わり＋皿洗いもしていると
俺は、今台所で皿洗いをしている

「そ、そういや、もう暗いし、泊まっていったらどうや？」はやてが、顔を赤くしながら言った
「別に良いが、服は、どうするんだ？」
そのつもりだった、とはいえないが大方こうなりそうだったという事は予想していた
「そやね～」はやてがなにやら考えていると

バサッ！庭に何か落ちた

「なんか落ちた見たいやね」
「見に行くか」

「そやね」
さすがに敵じゃないだろうと思いながらも見に行くと
「こりゃなんだ？」目の前には、一つの小包

「なんやろか？」二人とも困る

「あけていいか？」
とりあえず危険物じゃないことを確認したので
「いいで」
そこに入ってたのは、俺のパジャマだった

「これって、男物やよね」
「そうだな」
目の前にはパジャマと変えの下着一着
「いったい誰が？」庭に出たとたん猫が塀から逃げ出していた

「まぁ、そうきにせんでも神様のプレゼントでも思っておけばいいやないか」
はやてのプラス思考が炸裂する
「そうだな」
「（まぁ、どうせ別の部屋で寝ることになるだろうし）」

しかし、この世界は、都合よく行くわけがなかった！ｂｙ黒祐

「で、俺は、どこで寝ればいい？」
とりあえず聞いてみると、まぁ、どっちにしろ回答的には和室かリビングかになるだろう

「うちの部屋や！」はやてが満面の笑みでためらいもなく言った

・　・　・

「エッ！」

「そうと決まったらいくで！」ものすごい速さで首根っこをつかまれひきづられてる俺

「エ、俺、男ですよ～」絶賛引きずられ中

「気にせんといくで（黒祐君は、ぬいぐるみたいや！）」

「（女の子なら気にするところだ～！）」

「わぁ～空が黒いな～」

困ったときの現実逃避！

「夜やからね」

「ノォォォォォォ」

鳴海の空に悲鳴がとどろいた

はやての家で　ｐａｒｔ２

しばらくたって
「・・・どうすりゃいいんだ?」
隣には、パジャマ姿のはやてが寝ている
そして、色々当たってる
もう、ぬいぐるみ状態である
「カズキ・・・」俺は、念話でわずかな希望を頼ってみる

そして、数秒後カズキの声で
「この念話回線は、現在使われておりません。何回つなげても結果が変わらないことは、お察し下さい」
望みは、はかなく散った

「オイオイ、俺はどうすりゃいいんだ」
そして俺は、隣にかなり暖かいものを感じながら目を閉じた
その直後
ドスッ!

「キュゥゥウ・・・」俺は、深い眠り?についた

窓から日が差し込んでいる
どうやら朝のようだ
ここは、はやての家のリビング
「おはよ〜」

「おはよ〜よく寝れた?」キッチンには、はやてがいて料理をしていた

「あぁ、ぐっすり寝れた」今の俺の姿は、黒いＴ－シャツにジーンズである

「そんならよかった」

（あぁ～首元が痛いのは、気のせいか？）

「なんか手伝うことあるか？」

「特にないで」

「じゃあ、ここで待ってるよ」

「わかった。出来たら呼ぶね」

「すまない」

「別にええよ」はやては、顔を赤くした

朝食の準備が出来て

「「いただきます」」

パクパク、モグモグ

「うまいな」

「そういってもらえると嬉しいわ～」

「和食だったらもしかしたらはやてのほうが上かもな」

「ほんまに？」

「今まで和食っていったらさばの味噌にくらいしかつくったことないからな」

（実は、それしか作ったことがないんだ）

「へぇ～」

「今度教えてもらっていいか？」

（多分いい勉強になるだろ）

「いいで」

「そりゃありがたい」

そして、

「おっとはやて、俺もそろそろ帰んないとな」

「わかったで」

「じゃあな」

「ほなさいなら」

はやてｓｉｄｅ

（あの顔といいカッコイイ人やったな～また、会いたいわ～まっ、いつか会えるやろ）

後ろを向くはやて

（夜の一撃は、きつかったかな？まぁ、あの後、面白かったやし）

はやての手には、数枚の黒祐の寝顔写真？があった

はやての家で　ｐａｒｔ２（後書き）

後書きコーナーｂｙ新年一発目

黒祐、カズキ、黄昏「「「みなさま新年明けましておめでとうございます」」」

カズキ「今年も魔法少女リリカルなのは～神の子孫の騎士の物語～を」

黒祐、カズキ、黄昏「「「よろしくお願いします」」」

黒祐「さ～て、挨拶も終わったことだしどういう事か教えてもらおうか！」

黄昏「まぁ、そんな怒らないで」

黒祐「読んでくださっている人の事考えんのか貴様は！」

黄昏「わかってますよ」

黒裕「何やってたか全部吐け」

黄昏「え～と、モンハンとかファンシスとか、年賀状とか（ｒｙ」

黒裕「どこまで行った？」

黄昏「新しい章作ってるナウ」

黒裕「あぁ～あれか」

黄昏「時間軸的にA'ｓとＳｔｓの間だよ」

黒裕「ふぅ～ん」

黒祐「まぁ、今度から気をつけろよ」

黄昏「へぇ～い」

カズキ「それじゃ、新年一発目の企画でもいってみよ～！」

黒祐「はぁ、そんなこといつ決まったんだよ」

黄昏「俺の脳内でつい最近さ」

黒祐「・・・あんたの脳内カオスだな」

黄昏「よくいわれます」

カズキ「一発目の企画は、なんと”おみくじ”です」

黄昏「いよ、待ってましたー！」

黒祐「自分で考えたことだろ」

カズキ「というわけでこの中から1枚引いて」

黒祐「あぁ」

カズキ「引いたら開いて」

黒祐「あぁ」

黒祐「・・・」

カズキ「どした？」

黒祐「俺がひいたの見てみろ」

カズキ「フムフム、わかりやすいく言うと災難ばかりですねと書かれているわ」

黒祐「俺の寿命何年だ？」

カズキ「さぁね」

カズキ「さ～て、私は、なんて書かれているのかな？」

カズキ「・・・もしかしたら空気になるかもね」

カズキ「ウワァァァン。黒祐ぅぅぅぅ（泣）」

黒祐「よしよし」

黄昏「二人ともカオスだな・・・」

黄昏「おれは、というと」

黄昏「特に変わったことは、ないでしょう」

黄昏「まぁまぁだな」
（作者権限～）

カズキ「うわぁぁぁぁん（泣）」
黄昏「カズキの泣き顔可愛いな」
黒裕　チャキッ！
黒裕「死にたい？」
黄昏「すいません。壮大に前言撤回します」

カズキ「ウワァァァン（泣）」
黒裕「よしよし」
黄昏「ウラヤマすぃ～な～」

黄昏「二人ともカオスなようなのでそれでは、これにてバイバ～イ！」

黄昏「後書が多くなってしまった（＾＾；）」

その真実は、とんでもないもんだった

鳴海市の真ん中にたたずむそこそこ大きい家
しかし、ひとたび中に入るとそこの大きさは、カオス級であった
ｂｙその家に住んでる住人より

ここは、俺の家のリビング。隣には、肌を合わせるようにカズキが座ってる

「そういや、黒祐、存在比って知ってる?」カズキが唐突に話しかけてきた

「なんだそれは?」

「エッ、知らないの?」カズキがあわてながら言った

「まったくもって知らないし、その言葉も初めてだな」

「あらまぁ～じゃあ、説明してあげるわ」目上ののようにカズキが言った
(なんかその言葉むかつくな・・・ｂｙ黒裕)

「よろしく」
そういうとカズキは、眼鏡をかけた

「それは、説明するのに必要なのか?」

「なにごとにも形からよ」

「ふぅ～ん」妙に納得する俺

「出でよ！空間のペン！」カズキの手に一本の魔法使いが使いそうな筆が出てきた

「なんだそりゃ？」

「見てればわかるわよ」
そういうと何もないところに何かの図形を書いていく。そして書き終わり

「え～と、存在比について説明するわね」

「あぁ」

「存在比っていうのは、その空間に与えられた存在できるランクのことよ」

「？？？」突然のことで俺は、目を丸くしている

「この世界って言うのは、天使とか神様が来たら壊れるようなもろい食器みたいな物なの」

「じゃあ、この世界を食器に例えるならどれくらいの重さまで耐えれるんだ？」

「９くらいかな？ちなみに、例とすれば、人間を１だとすると神様は、２０だね」

「それって神様来たら一発終了じゃん」

「そだよ」

「うん？この世界の人間は、億の人数がいるから既に壊れてないか？」

「それは、アルカトラの法則使ってるから壊れないんだよ」

（あれ～どこかの某カードゲームで出てきたような言葉だな）

「その、アルカトラの法則って何だ？」

「簡単に言うと、１がいくら集まろうが１と言う法則なんだよ」

「ふ～ん」

「けど、たまに世界の進行のためで、存在比が他の人間とは、違う人がいるんだよ」

「へぇ～一体誰なんだ？」

「この時間軸だと、フェイト・テスタロッサ、八神はやて、高町なのはだよ」

（やっぱり原作キャラは、重要視されてるんだな・・・）

「あの３人か」

「そだよ」

「だけどさ、それが俺に何の関係があるんだ？」

「あなたの存在比が既に神様と同じ領域にあるからだよ」

「いまなんていった？」
自分がいかにヤバイかについて驚いてる俺

「だから、あなたの存在は、既に神様とおんなじくらいなんだよ」

「じゃあ、何で俺がこの世界にいてもこの世界は、壊れないんだ？」

「リミッターかけてるから」

「どういうことだ？詳しく説明してくれ」

「あなたは、存在比をランクで現すと１９なんだよ。で、神様のランクは、２０、さっき言った３人は、７で、この世界が壊れずに支えられるのは、９までだったから、あなたの存在比にリミッターをかけて力を制限してるの。ちなみに私は、８よ」

「それじゃあ、この世界にいる限り俺は、全力で戦えないのか？」

「そういうことになるけど、実質本気を出して戦う方法は、あるんだよ」

「どうすればいいんだ？」

「空間を湾曲させて、空間を作るんだよ」

（この世界の法則は、どうなってんだこんにゃロー！）
「そんなんでいいのか？」

「それがいいんだな～これが」

「この世界は、どうなってるんだよ・・・」

かなり世界の仕組みにがっかりする俺

「きにしないきにしない」

「わかってるけどね・・・」
（少し絶望したぜ・・・）
「まぁ、その練習も入れていくわよ」

「あぁ～」

そういいながらも時間は、過ぎていった

暇だし、ボコるか・・・・

契約完了が完了したり、はやて、なのはとの遭遇からしばらくして・・・

「いくぜ、ブルーブレイブ！」ブラックから蒼い炎が出る

「まだまだよ、レスゴルサ！」蒼い炎が全部石になった

「やられるか！ブラストレイン！」ブラックを黒い炎が包む

グォォォォン！

周囲が爆発した

「今日は、ここまでよ」カズキが刀を下ろした

「どうかしたか？いつもより早い時間だぜ」

「単に私が疲れたのよ」

（めずらしいな・・・）

「へぇ～」

「というわけで」

「？？？」

「何か買ってきて頂戴？」

「またですか？」

「またです」

「はぁ～」

「夜、襲いますよ？」カズキがニヤリと笑って言った
（カズキ、自重してくれ・・・）
「それだけは、絶対勘弁してくれ」

「ならすぐ買ってきて頂戴」

「はぁ～い」

魔術訓練もカズキから教わっている。カズキは、黒祐の飲み込みの速さにかなり驚いていた。普通なら1年かかるところを1週間で終わらせてしまっている。
まったく驚かされるものだ
そして、訓練終了後の暇な時間（パシリで使われている）
俺は、カズキに頼まれ近くのスーパーに向かってる

そして、突然！

キュルルル！

目の前に明らかにあやしい黒い車が明らかに違法スピードで走っていた。
「危なっ！」

案の定、中に青紫の髪とオレンジ色の髪の女の子が二人捕まっていた。

「中に入ってたのって人だしこれって誘拐だよな」

「ですね」ブラックが答えた

「暇だし、助けに行くか！」

「ＯＫマスター！」

「反応は？」

「港付近の倉庫です」

「さて、身体強化！雷化！」

黒祐の体が雷みたいに光る

そして、キュィィィィン！という音と共に空を飛んだ。

港付近の倉庫

「さて、ここだな」

「どうしますマスター？」

「”アレ”使うか」

「”アレ”ですか？」

「いくぞ！武器練成！デュアルライオット！」

手に魔方陣が現れその中から武器にXと書いてあるいかつい二丁の
拳銃が出現した

そして、拳銃から高圧の炎が出てくる
キュィィィン！少し魔力を弾丸に込める
「威力は、抑えて、ライオットバーナー！」
技名を叫ぶと同時に放たれた弾丸は、
ドォォォン！倉庫の扉をこれでもかというくらい吹っ飛ばした

「大丈夫か～？」

素っ頓狂な声で捕まってる二人の声をかける

捕まってる二人からの視点でみると扉からの光で顔は、よく見えな
かったが両手に炎が出てる拳銃を持った不思議な奴だとわかった

「テメェ誰だ！」誘拐犯の一人が機関銃持って近寄ってきた

「通りすがりの人間だ」挑発におもいっきり乗る俺
絶対違うだろと言う目線でさらわれてる二人女の子が見てきた
「アレ？・・・なんだか目線が痛いな～」小声で言う俺

「そりゃそうですよ」ブラックがつっこむ

「その二人を返してほしいんだけど」誘拐犯と交渉に入る俺

「なんだと、コラァ！」

「やるか？」

「上等だ！」

直後、誘拐犯の一人が容赦なく俺に向けて機関銃を撃ってきたが

「いきなりかよ、こんな俺に向けて撃つなんて」黒裕の外見は、一応子供だ

「んなこと知るかぁ！」誘拐犯は、容赦なく撃ってくる

「だが、遅い！」炎圧で加速して男の後ろに回りこみ男を気絶させた

「コイツラがどうなっても良いのか！」もう一人のやつがナイフを女の子の喉に当ててる

「二人とも目を閉じてろ」俺は、そう言った。

女の子二人は、言うとうり目を閉じた

「テメェ、何するきだ！」

「今からわかるさ・・」

瞳が少し赤に光った

「・・・闇に落ちろ」聞こえるか聞こえないかの声でそう言った。

直後、誘拐犯が

「グァァァッ！ヤメロォ！ヤメテクレェ！」

そういうと泡吹いて倒れた

「目を開いても良いですよ。それにしてもお二人さん大丈夫？」

「あっ、大丈夫です」青紫色の子がいった

「大丈夫よ！」オレンジ色の髪の子がいった

「それは、よかった」

「あいつらになにかしたの？」オレンジの子がいった

「それは、企業秘密だ」

（実を言うと相手に死より恐ろしい幻覚を見せて気絶させたんだよ～）

「ふ～ん」

「二人で帰れるか？」

「帰れるわよ！」オレンジの子がいった

「大丈夫です」青紫の子がいった

「では、俺は、これで」
俺はその場を立ち去った

その後

「名前聞けなかったね」青紫の子がいった

「いつか会えるでしょ」オレンジの子がいった

「そうだね」

見えないところでは・・・かなりシリアスだった

ここは、天界と呼ばれるところ

コン、コン

「いいぞ」

「○○様、報告にあがりました」

「これが資料です」

「どうもいつもすまないな」

「いえいえ、お手伝いできるだけで光栄です」

パチッ！男の人が指を鳴らした
そういうと辺りが黒い空間に包まれた

「お察しが良いことですね」落ち着いた表情で女の人が言った。

「執務中に来るってことは、相当な事態になってるんだろ」

「ハイ、その通りです」

「で、用件は？」

「二階級神議委員会の後、こちら側の人間が何人か殺されました」

「ほぉ、リストはあるか？」

「こちらです」

女性が一枚の紙を渡した

「幹部が一人に補佐官2人か」

「あいつらは？」

「ハイ、特一級神議委員会は、二級神議委員会の行動にかなり頭を悩ませています」

「やっぱりな」

「近々、特一級神議委員会だけでの総会を開こうとしています」

「わかった」

「こっちからで生きている勢力は？」

「まだ余裕があります」

「なんとしてでも、あっちの世界に侵攻させるは訳にはいかないな」

「そうですね」

「それだけか？」

「もう一つ、保管庫から”目をつけていたアレ”が盗まれました」

「逃走経路は？」

「目下全力調査中です」

「奴らの可能性は？」

「手口的にありえます」

「その他には？」

「二級神の一角、ゼウス管轄下の混沌神カオスが動き始めたようです」

「目立った行動は？」

「特にありませんが、騎士が少し動いているという状況が確認できました」

「あっちの世界に行ったときの手段は？」

「彼のリミットをはずすしか方法は、ないと思われます」

「アイツに使わせたくないんだよな」

「同感します」

「わかった。下がっていいぞ」

「失礼しました」

何も知らないところで事態は、動いていた。

介入する黒き魔導師は、相手に対して手加減する（前書き）

カズキ「皆様お待たせしました！やっときました。Ａ，ｓ　本編突入です！」
黄昏「キター（。∀。）ーーーーーーーーーー！」
黒裕「落ち着けぇぇぇぇぇぇい！」
黄昏「ｙｏｕもな」
黒裕「はい・・・」

介入する黒き魔導師は、相手に対して手加減する

夜の訓練を終えて少し休憩してるとデバイスのブラックがこういった。

「魔力反応ありこちらに接近中。どうしますか？」そうブラックが言い終えると俺は、立ち上がり黒のジャケットを羽織ってこう言った

「行くに決まってるんだろ」

そういいながら庭に向かう

「わかりました」

「黒祐～」カズキが声をかける

「あぁ、敵さんみたいだ」

「殺っちゃう？」

「おいおい、物騒な事言うな」俺は、準備をしながらカズキにツッコム

「えぇ～」

「この時間だと”あいつら”だから手加減してやってくれ。くれぐれも殺すなよ」

「修正力が働いてたら？」

（まぁ、今の俺でも世界の修正には、勝てないからな）

「死なない程度にやっていいぞ」

「了解！」

「挨拶がてら出向くぞ」
「いっちょ行きますか～」
カズキが背伸びをした

「初の実戦だな。」
そして魔力の反応するほうに向かった。

そこには、ハンマーを持った赤い帽子の女の子と刀を持ったピンクのポニーテールの女の人が、事故の時に助けた高町なのはが金髪の女の子と一緒に戦ってた。

黒祐ｓｉｄｅ

「ブラック！セットアップ！」

ペンダントが光だし、黒い球体に包まれ俺は、漆黒のスーツに身を包んだ姿になった（リ〇ーンのツナが着てるスーツと同じ）。

「こい！滅殺（メサイヤ）威夜！」

俺は、そう叫んだ。俺の手に日本刀が出てきた。何故か俺の武器は、俺が思った通りの奴に形状が防具や杖に変化するらしい。ちなみに威力設定も思った通りになるみたいだ。魔術も、勝手に作れるらしい。

「マジでこの能力チートだな。俺は・・・」俺は、そう思った。
俺は、赤い帽子の奴に突っ込んで行った。

「ラケーテンハンマー！！」
「させるか！龍覇・一閃！」
刀から出た衝撃波が、龍の形となって敵に当たった
ガキッィン！
鈍い音と爆音がした
間一髪の所で赤い帽子の奴の攻撃をはじき返した。
「あなたは、黒祐君？」なのはは、驚きながらそういった
赤い奴も突然の増援に驚いている
「そうだ。しかし今は、眼の前戦いに集中してくれ」
「わかった」彼女は、そういった。
「俺は、俺のやり方でやる！後ろからサポートよろしく」俺は、なのはにそういった。
「しかし、ガキがガキを一方的にやってるってどういうことだよ」
俺は赤い奴にむけて言う
「うっせぇな。黙ってろ！」赤い奴が言った
「これが黙って見過ごせないのが俺なんだよね～」
「調子こいてるとグラーフアイゼンの頑固な汚れにするぞ」
「出来るもんならやってみろよガキが！」

そういった瞬間攻撃が飛んできた。

「ヤッテヤラァァ！アイゼン！ギガントハンマー！」

（イキナリ、マジかよ！）

俺は、そう思った。

「カードリッジロード！」

赤い帽子の奴は、そういった。

危険だと感じた俺は、すかさずこう言った

「ブラック！」

俺の手についていたブラックが瞬時に杖に形状変化し、俺の周りに黒いの球体が９０個ぐらい出現した。

「射殺する神槍（フェンリル・ボルグ）！」

黒い球体もがのすごいスピードで一斉に赤い帽子の奴に向かっていった。

ゴォォォォォン！

そして爆音とともに赤い帽子の奴に当たった。

それに赤い帽子の奴が気を取られてる間に高町なのはが集束砲の準備をしていた。それにきずいた俺は、強化魔法をなのはにかけた。

「我は、このものに光の力を与えるものなり！強化魔法！シャイニングバーストアップ！」

なのはの体が光に包まれる。そして、俺は、赤い髪の奴にバインドをかける。

そして動きが止まった瞬間！

ピンク色の光がレイジングハートの先端に集まる
「ディバインバスター！」
しかし赤い奴には、当たっていなかった。というより当たる直前で逃げられた。
バタッ！
「キャァッ！」
なのはの悲鳴が聞こえる
なのはがで倒れた。遠くで蒐集が完了したという声が聞こえた。
「この場合、引いたほうが良いな」
「ですね」
とりあえずなのはを休ませるために少し戦場から離れた場所に行った。
実を言うと威力設定を１００分の１にとどめておいた。なぜなら本気を出すと色々と被害が出るからだ。

カズキｓｉｄｅ
私は、「ピンクの奴のほうにゆけ！威力は、かなり抑えろ」と黒祐にいわれたのでそっちに向かった。
黒祐は、なぜ神様に近い人に命令してるかという事については、気にしないでくれ。

この一撃が決まれば確実に黄色い奴がアウトな状況になっている

「紫電・一閃！」ピンクのやつが黄色いやつに攻撃する

カズキが上空でいったん停止して攻撃体勢にはいる

「ヤバイ！雷鳴逆巻け！エレクトリック・スラッシュ！」

ガシュ！バリバリ！ドガァァァン！

紫電一閃が相殺された

突然来た攻撃によって紫電一閃が相殺されたことにピンクの奴は、驚いてる

「あなたは、誰ですか？敵なら容赦しませんよ」金髪の子がそういう。デバイスをカズキに向けてる

「私は、カズキよ。一応あなたの敵じゃないわ。」

「そうですか。私は、管理局嘱託魔導師フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。」

フェイトがバルディッシュをもどした

「わかったわ！フェイトちゃん、速攻でかたをつけるわよ！」

「了解！」

「増援か、２人になろうが我がレヴァンティンの錆びにしてくれる」

ピンクの奴が言った

「その威勢の良さどこまで続くか試させてもらうわよ」

「そのセリフそっくりそのまま返してやる」

ピンクの奴が剣に手をかける

「輝け！約束（エクス）された勝利の剣（カリバー）！」
私の手に金色の剣が装備された。そして、もとの威力の１０００分の１に抑えてある

「ハァァァ！」
ガキィン！ガキィン！ガキィン！
そして私は、ピンクの奴に斬りかかる。
そう簡単には、終わらせてくれなさそうだ。

「当たって！」
後ろからフェイトが切りかかるがこれも防がれた。

「今度は、こちらからだ！飛龍・一閃！」レヴァンティンに炎がともる

「まだまだぁ！エクスカリバぁぁぁ！」
エクスカリバーがカズキの魔力を変換して光になる。

そして振り下ろした瞬間！

ドガァァァァァン！

爆発があたりを巻き込んだ。

喰らっていたらしいがまだ立っていた。
そしてピンクの奴が

「貴様ら名前は、何だ？」と聞いてきた。

「私は、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン」

「私は、カズキよ」と私は、そういった。

「貴様らいい太刀筋だ。」とピンクの奴が言う。

そして

「また会おう。テスタロッサ、カズキ」といって撤退していった。

介入する黒き魔導師は、相手に対して手加減する（後書き）

感想とかどしどし書いていただけると幸いです。
何気ない事でも箇条書きでも結構です。
ほんの些細なことでもいいのでよろしくお願いします。ｂｙ作者

未来の魔王様撃墜ねぇ～まぁいい薬だな

イキナリの襲撃でなのはが倒れちまった
そしてその後・・・
俺は、なのはをアースラまで連れて行った。
ここは、アースラ医務室でなのはが横たわるベット

「クロノさん少しいいですか？」一応初対面なので丁寧語になる俺

「これよりなのはに回復魔法を施したんだがいいか？」

「別に構わんが。何故質問する」

「なんとなくさ」

「まぁいいさ、了解」

「全てを癒せ！イシュトリルトンの杖発動！」
なのはを緑色の光が包み込む。

「んっ！ここは、どこ？」なのはが目を覚ました

「アースラの中だ。」

「あっ！黒祐君！さっきは、ありがとう」

「あぁ、気にするな。」

「フェイトたち呼んでくるからじゃあな！また後で。」

俺は、廊下でフェイトを探してるちょうど角のところでフェイトがいた
「フェイト～」
「誰!?」フェイトは、すかさずバルディッシュを構える
「・・・なんでバルディッシュを構えてるんですか?」
敵対視され激しく戸惑う俺
「黒祐～」遠くからカズキの声が聞こえた
「なんだよ、カズキ?」
「その子まだあなたのこと知らないよ」
「・・・先言えよ」
「サーセン」やっちまったぜみたいな顔でカズキが言った
「あっ、カズキさん」
「あっ、フェイトちゃん」
「ちゃんずけは、ちょっと」フェイトが下を向きながらモジモジと言う
「あぁ～ごめんなさいね。そういや、怪我とかない?」
「あぁ、ちょっと腕とかをやられたくらいで」

「あらま～黒祐！」カズキの声のトーンが面白いくらいに変わった
「ハイ！すぐやります！全てを癒せ！イシュトリルトンの杖発動！」
フェイトの体を緑色の光が包む
「どうフェイト？」
「かなりよくなりました」
「それは、よかった」
「そういや、そこにいる術をかけてくれた方は？」
さっきまで、俺は空気になってた
「あぁ、紹介が遅れたな俺の名前は、神纏黒祐だ。よろしく！後、
一応カズキのマスターだ」
「よろしく」フェイトが左手を出してきた俺は、右手で握手した
「そういや、なのは目がさめたらしいぜ」
「ホント？」
「あぁ、いってやれ」
「はい、なら、あなたも一緒に？」
「いや、俺は、少しここいら辺ぶらぶらしてる」

「わかりました。なのはにそう伝えときます」
「すまない。後、丁寧語じゃなくていいぞ」
「わかった。じゃあね黒祐」
「じゃあな」
そういうとフェイトは、なのはの病室のほうに走っていった。
アースラ廊下
「お～いそこの君～」緑色の髪の女の人が俺のところに来た
「なんですか？」
「ちょっと立ち話もなんだしそこでお話しない？」
「別にいいですが」
そういうと、一つの部屋につれてかれた
「紹介が遅れたわね私の名前は、リンディ・ハラオウンです。よろしくね」
「俺の名前は、神纏黒祐です。こちらこそよろしく」
「じゃあ、本題に入るわね。あなたの素姓ついて色々聞いてもいい

かしら？」

「答えられる範囲でしたら別にいいですが」

「それは、どういうこと？」

「あんまり、こっちにも知られて欲しくないことがあるんですよ」

「わかったわ。答えられる範囲でいいわ」

「なら質問どうぞ」

「出身地は？」

「家があるから鳴海かな」

「年齢は？」

「9歳です」

「両親とかいる？」

「いませんが戸籍上は、母親に当たる人がいますね」

「へぇ～誰？」

「ユニゾンデバイスのカズキです」

「エッ！？あの人がユニゾンデバイス？」

「それがどうかしました？」リンディさんは、カズキを人間だと思ったらしい

「いえ、なんでもないわ」

「ならいいですが」

「じゃあ、魔法と関わるきっかけになったのは、何？」

「お答えできません」

（そりゃそうだ、転生者なのでとも言えるわけないからな）

「そこが重要なのに～」

「すいませんね、こちらも色々秘密があるもので」

「わかったわ、もういいわよ」

「では、失礼します」

俺は、部屋を出た。

模擬戦いいえ死亡フラグです　しかし「その幻想をブチ壊す！」

そして1週間後・・・

「行くよ黒祐君！」

「来い！」

目の前にはセットアップしたなのはとフェイトがいる
ここは、アースラの訓練室である。何故ここにいるかというと少し前に遡る。

・・・数時間前

「すごい！すごすぎる！見てくださいこの計測結果！つか、ありえないです。」
エイミィさんが驚きながら言う。

神纏黒祐（カムイクロユキ）（ユニゾン無し）

空戦適性：S
総魔力量：SS
魔力放出量：SS
魔力運用効率：SS

総合魔導師ランクSS

「まさかこの年でSSよね・・・」

「そうなんですよ」

「っていうか、勝手に調べて良いんですか？」

さっき、少し内容をぼかして黒祐君に色々なことを受けてもらったことは極秘である

「大丈夫！なんとしてでもこの子を無理矢理引き入れるから」

「・・・」

「どうかした？」いろいろやる人だな～この時、エイミィさんは色々なことを知ったらしい

「いえ、なんでも・・」

「にしても、こんな子が地球にいるなんて思ってもいなかったわ。」

リンディは手元の紙を見ながらなにやら思惑を巡らせていた

俺ｓｉｄｅ

「ちぇっ・・せっかく家でゆっくりしてようかなと思ったんだけどな～」

俺は、あの時に管理局に運んだことで名前を覚えられたせいか、それもともばれているのかどうかわからないが、今現在、アースラにいる。俗に言うお呼び出しだ

「ねぇ～黒祐～」

どこからどうみても故意だとしか言えないほどいちゃついてくるカズキを相手しながら廊下を進んでいると

「お～い、黒祐君～」
「おぉ、なのは、どうかしたか？」
「ふぇ、黒祐君も呼ばれたんじゃないの？」
「まぁな」
「なんだろうね～」
「まったくだ」
そういいながら部屋に入っていくと
「どうも～」
元凶がそこにいた

そして、俺は事の次第を聞いた
「で、俺の魔力値やらその他もろもろを調べましたってか？」
「まぁね～」
「ふぅ～ん、でリミッターつけてたの知ってた？」
・
・
・
「「エッ？」」
その場にいた二人はかなり驚いていた
それもそうだ、リミッター付きでＳＳだなんて聞いたことのない人材だからだ

「それで、俺に用があるんですよね？提督？」
「エェ・・実力を見たいからなのはちゃんと模擬戦をしてほしいんだけど？」
「あぁ、いいっすよ、場所は訓練室ですよね？」
「うん、まぁね、頼むわ、私たちは訓練室の上から見てるから」
そういうとその場を立ち去るリンディ提督、リンディ提督が去った後俺となのはは訓練室に向かった
ちなみに、カズキはさっきからずっとステルス状態だ

訓練室に向かっているその途中
「よぉ、フェイト～」
「あっなのは、黒祐」
廊下の先にフェイトがいた。
「もしかして、フェイトちゃんも？」
「うん、お母さんに頼まれて」
「そうか～」
だべりながら俺達は、訓練室に向かった

「さぁ、黒祐君準備はいい？」
「えぇ、大丈夫です」
俺は、準備が完了したと訓練室の上の観戦室にいるリンディ提督に告げる

「じゃあ、始めて頂戴～」
リンディさんから始まりの合図をもらった

『Ｐｒｅｐａｒｅ　ｍａｓｔｅｒ　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？（マスターいきますよ）』
そういうとブラックから魔粒子が放出され黒いバリアジャケットが装着された。その姿は黒い赤原礼装っを纏ったアーチャーに似ていた

「レイジングハート！」
「バルディッシュ！」
「「セットアップ！」」
『『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！Ｓｅｔ　ｕｐ！』』
シュィィン！なのはたちもセットアップした姿になった

「黒祐君でも、全力全開で相手になるよ！」

「私も、手加減しない」
二人ともお互いのデバイスの矛先を俺に向けていった

「そうか・・・なら貴様らを倒してしまっても、構わんのだな？」
ゾクゾクッ！なのはとフェイトの背中に悪寒が走る、絶対的な相手に対して武者ぶるいしているからだ
そう感じながらも、俺は二本の剣を取り出した
その剣は、干将・莫耶、陰陽1対の夫婦剣で、宝具としてのランクはC－とかなり低いのだが、投影に要する魔力の低さや手間がかからないことから幾ら破壊しても瞬時に次を用意できる
「あまり常識にとらわれるなよ」

そういうと二人とも一斉に駆け出す

「ハァァ！サンダーレイジ！」
ズガガガ！フェイトからの先制攻撃
「甘い！ウラァッ！」
そういうと干将・莫耶から一瞬にして斬撃が放たれ全てを斬り伏せた

「なら、ディバインバスター！」
なのはの光線が迫るものの
「動きが単調だ！出直して来い！我が骨子は捻れ狂う…『射殺する神槍（フェンリル・ボルク）』！」
なのはの光線を容赦なくそれで相殺した

「っ！アークセイバー！」
満身創痍のフェイトから魔力斬撃用の光刃が放たれるものの
「捉えた！召喚！刺し穿つ死神の槍（デスターザ・ボルク）！貫け！」
ザシュィン！ザシュィン！ザシュィン！
瞬時に召喚された槍によってフェイトのアークセイバーは完全に貫

かれ破壊された

容赦なく続く攻防
「っ！なら近接戦で！」
フェイトがつっこんでくる

「白兵戦なら勝機があると？」
そういいながらも、瞬間的に干将・莫耶をとりだし

ガキッン！ガキッン！フェイトとの近接戦が始まった

「ほぉ、そう動くか、面白いな～」
ちょっくらフェイトをバカにする俺
「小手調べだ！いくぞ！」
そういうとフェイトに干将・莫耶を投げつける

「っ！」
ガキッン！フェイトがバルディッシュでそれをはじくものの

「後ろだよ！癖が悪くてね、来い干将・莫耶！」
シュルルルル！俺は干将・莫耶を引き戻した
それに気づかないフェイト
「アクセルシュート！」
間一髪なのはのアクセルシュートがそれらを破壊した

「フェイトちゃん！ダブルブレイカー！」
「うん」
そういいながらも上空から俺にむけて必殺技を打ち込もうとする二人

「全力全開！スターライトー！」

「疾風迅雷！プラズマザンバー！」
キュィィィン！魔力をため始める、だが、余裕を醸し出す俺
魔力がため終わり
「「ブレイカー！」」
二人の渾身の攻撃が俺に襲い掛かる
「甘いな・・・極限七天環（セラフィム・アブゾーバ）！この神盾突破できるかな？」
そういいながらも余裕で防ぎきる
砂煙が舞い上がる

「そんな、私たちの必殺技が」
唖然とするなのはと
「どうして」
唖然とするフェイト

そして俺は二人にこう言いはなつ
「力任せだな。肝を冷やしたぞ、それにしても、二人はもう少し、おしとやかにな・・・」
そういうと俺は、左手を何かを制するように横にだす
そういうとなにもなかったところに赤い裂け目ができその中から無数のエネルギー弾が現れるその数は、万単位だ
「さぁ、もう暫く楽しませよ！」
ズガガガガガ！
そういうとなのはとフェイトに一斉に発射された

「かわせと言ったんだなのはフェイト！」
そういうとこれは序章だったかのように俺の反撃が始まった
ギュィィィン！魔力が一気にたまりこむ

「まぁ、詠唱ありだとどうなるか、おれにもわからんからな、手加減するとするか」
そういうと
「Ｍｙ　ｗｈｏｌｅ　ｌｉｆｅ　ｗａｓ　”Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂａｔｔｌｅ　ｗｏｒｋｓ”（この体は、無限の戦いで出来ていた。）」
そういうと周りの意識が一変する

「ここは、戦の極地、そして、一気に行かせてもらう！」
そういうとさっきの割れ目から一本の剣が現れる
それは、うなりをあげて一気に魔力を増幅変換させる

「セーブモードで行かせてもらう！天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）」
ズゴォォォォン！超極大光線がなのはとフェイトに襲い掛かると同時に
「フルバレル！全武器発射！」
そういうと突如現れた無数の武器が惜しげもなくなのはに発射された

「「きゃぁぁぁぁぁぁ」」
ふたりとも悲鳴を上げて撃墜された

スタッ！
「最初の言葉、そのまま返させてもらったぞ、それとまっとうな一騎打ちじゃあるまいし。剣には剣で、弓には弓で戦うとでも？しかも、実に単純な攻め手だった。予想が外れたな。もう少し手こずるかと思ったのだが。いやぁ、なかなかに楽しめたぞ」
悪役っぽいセリフを残して俺はその場を去って行った

模擬戦いいえ死亡フラグです　しかし「その幻想をブチ壊す！」（後書き）

いつもご愛読ありがとうございます
感想とか書いていただけると非常にありがたいのでぜひお願いいたします

ｂｙ作者

さぁ、武器収集だ！って、おいおい

「はぁ、武器がほしい」そうため息をつきながら言う俺
ドゴォア！
直後、無表情のカズキにこれでもかというぐらいの渾身のパンチで殴られた
「いってぇ、何するんだよ！」

「そんだけの力（チートパワー）があって何いってるのよ」
うん？今副音声で禁句入らなかったか？

「そういわれりゃそうだな」

「武器の整備とかしてみたら？」

「それは、問題ない」

「なんで？」

「ブラックに任せてる」

「少しは、自分でやりなさーい！」

暫くたち
周りには、沢山のラノベやゲーム、それに、遠くのほうには、綺麗な海も見える
ここは、天界
なぜ俺がここにいるかというと

数時間前

俺は、今ゆったりしたソファーで寝ている
「お～い黒祐いるか～」目の前にディスプレイが現れた。中から聞きなれた声がした

「この声は、兄貴だな、どうかしたか？」

「お前に渡したいものがあるから天界まで来てくれや」

「まぁ、わかったけどどうやっていけばいいんだ？」

「空の上になんかあるの見えるか？」
俺は、そう言われて外の出てみる。案の定、空には一本の道があった

「まぁ、その道通ってきて来れば俺のところに来れるから」

「わかった」俺は、そういうと通信を切ってその道のところに来た

「さ～ていきますか、カズキ、留守番頼む」

「わかったわ～」
その道を歩いて１０分後

ピカァァ！あたりが光に包まれた
その次に俺は、どっかの部屋にいた

「よっ、黒祐！」

「ヨッ、兄貴！そういや、渡したいものってなんだ」

「あぁ～これだ」

神様の後ろには、ラノベやマンガなどが山のようにある

「・・・まさかこれ？」あまりの多さに驚く

「そうだけどどうかした？」

「読んでる暇がないんだけど」

「それは、大丈夫だ」

「なんで？」

「ここで読んでいけばいいんじゃん」

「まさかぁ・・・」

「地上の時間は、キミがここにきてから全く動いてないよ」

「やりたいほうだな」

「それがここなんです」

「・・・もしかして、その漫画やラノベの武器って俺の能力（チートパワー）でもしかして復元できるの？」

「多少の誤差はでるが、ある程度はな」

「へぇ～」

「専用の空間作っといてあげるからそこで読んでいなよ」

「わかった」

俺は、神様に言われた部屋に行く
そこには、ゆったりした椅子にちょうどいい高さの机
そして、ドリンクバーもある。つまり、一般人にとっては、至れり尽くせりの部屋である

「すごい心地がいいんだけど」
そして、読み続けて9時間

「お～いどうだい？」

「この本とかめちゃくちゃ楽しいし」

「そりゃありがたい」

「ベットもあるからそこで寝たりするといい」

「ホントありがとな」

「きにするな」

「そういや、これだけの量どうやって集めたんだ？」

「・・・あんまり言いたくない（＾＾；）」

「まさかの趣味・・・・？」

「そです」
（神様・・・わからないでもないな）
「これとか大切なんだろ・・・」

「まぁ、今日査察官来るからね」
（同情します・・・）

「あぁ～」

「まぁ、しばらくくつろいでろ」

「あぁそうさせてもらう」
そして、時間は過ぎて行った

ある時は、
「おぉ、この技とか使えそうじゃね」

そしてある時も
「この武器とか・・・やばいぜ」

「どうだった？」

「わりあいたのしかったぜ」

「そりゃよかった。じゃあな」

「じゃあ」
パシッ！俺は、神様とハイタッチして光の道を戻った
俺の家の玄関
「ただいま～」
「おかえり～」
カズキが笑顔で出迎えてくれた
「どうだった？」
「めちゃくちゃ楽しかったぜ？」
「なにしてたの？」
「本読んでた」
「へぇ～たのしかったならいいわ」
後ろで何かが動いてるとは、この時知る由もなかった

訓練だよ～キャラさんおぉ～

訓練する為に俺は、家の下に巨大な空間を作った。

「さて、地獄の鍛練でもやりますか！」

最近、反応速度が少しばかり落ちてきた。

いくらサポートがあるといえガチでやったら負ける気がしてきた

そのために自分への強化トレーニングとして鍛錬でもやろうと決めた

「カズキサポートよろしく！」

「わかったわ」

「霊体具現召喚！キング、ジャック、ブレイバー、ランス、フォルス、村雨、バース、ライナ！」

８個魔方陣からその名にふさわしい戦士が出てきた。

金色のよろいを纏った手に真紅の禍々しい剣を持った男　キング

指揮官みたいな服を着て銃と剣が合体した武器を持っている男　ジャック。

蒼色の服を着て手に透明な剣を持っている女性　ブレイバー

銀色の鎧と赤い槍を持った男　ランス

狐の耳と尻尾で和服を来たかわいらしいピンク色の髪の女性　フォルス

蒼と白の和服で４本の刀と一本の笛を持っている男性　村雨

頭に赤いバンダナと斧を持った　バース
足まである長い金髪で、服の色が紫色で鎌を持った女性　ライナ

「全員まとめてかかってこいやー！」俺は、そう叫んだ
ガキンッ！ガキガキッ！バチバチバチ！

はじめのほうは、こっちが押してたのが連携技によって押されてきた。
「さすがにこの人数は、少しきついか、しょうがない。すこし開放するか！」
相手が天使と同等の力を持ってるだけあってかなり俺単体だときついしかも初っ端からこれだと流石に死ぬ可能性も出るし、まだ使ってない能力もあるからである
「リミッター3段解除！」

「カズキ！ユニゾン・イン！」

「OK黒祐！」

「「黒翼開放！」」
背中から翼が生える

「うむ！この黒い気配は、かなり危険だ。こちらも本気で行かねばならないな。」村雨がそう言う。

「こちらからいかせてもらうぜ！まとめて喰らえ！ゼロバーナー！」
ゴッォォォォォォン！当たったみたいだが

「燕返し！」村雨が攻撃を入れてきた
「見切った！抜刀術参ノ型　氷花・一門！」
カキィィン！
そして、ブレイバーとキングが
「次は、俺と「私だ！」」
「唸れ！約束（エクス）された勝利の剣（カリバー）ァァァァァァ！」
ブレイバーから黄金の光が時はなたれそれが衝撃波となり俺に迫る
と同時に
「轟来せよ！王（キング）の斬撃（カリバー）！」
キュィィィィィィン！キングの斬撃が俺に迫る
「こっちもだ！行くぜ！紅蓮鳳凰斬！」
ゴオォッォォォォォォ！メサイヤが炎をまとい一気に地面に振りおろす事で辺り一面に炎の衝撃波が走る
そんな戦いが１２時間以上続いた
リンディｓｉｄｅ
ゴォォォォッォ！アースラに振動が響き渡る
「この次元震は、何！」
「発信源は、海鳴市です。」
「ということは、あの子が修行をしているのね・・・にしてもやり

すぎだわ」

その後毎日に何回かは、小規模次元震がアースラを襲ったそうだ・・・

そこは、まぁお気になさらずにｂｙキャラクターイメージ　８騎士

キャラクターイメージ！やっちゃいませんか？ｂｙ後書きコーナー

黒祐「突然だなオイ！何故に疑問系！」
黄昏「気にすんな気にすんな」
カズキ「そうだよ、色々気にしすぎると人生に負けるよ」
黒祐「なにその、意外な重さ！」
黄昏「というわけで」
カズキ「いってみよー！」
キャラクターイメージｖｅｒ８騎士！

キング＝Ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　のギルガメッシュに似てます

ジャック＝ＧＯＤ　ＥＡＴ○Ｒの雨宮リンドウさんを思い浮かべてください

ブレイバー＝Ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのセイバーの髪下ろしたのに似ています

ランス＝Ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　ランサーさんです

マジッカー＝Ｆａｔｅ　／Ｅｘｔｒａのキャス狐に似ています

村雨＝リ○ーンの朝利雨月に似ています

バース＝Ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのバーサーカーさんです

ライナ＝とある○術の禁書目録のローラ・スチュワートさんに非常に似てます
　年齢は、こっち（↑ここ重要）では２０歳前後です

黒祐「Ｆａｔｅ多くないか」

黄昏「まぁね～色々参考にさせてもらっているから」

黒祐「一言、言わせて貰っていいか？ライナについて」

黄昏「別にいいが」

黒祐「”ピー”無茶しやがって」

黄昏「オイ！そこ言っちゃだめだろ」

黒祐「だって”ピー”の年齢”ピー”だろ」

黄昏「だからって、そりゃまずいだろ」

黒祐「だって”ピー”って生きている年齢詐欺師だろ」

黄昏「そこまで言ったら・・・」

カズキ「黒祐！女の人の年齢言っちゃだめだよ」

黒祐「だってさ、原作じゃ”ピー”歳なんだろ」

ガスッ！

カズキ「少し黙ろうか」

黒祐「ハイ・・・・」

黄昏（。д。；）））））

黒祐「そういやさ、黄昏」

黄昏「なんだ？」

黒祐「もしかして、やんちゃ坊主の危なっかしい技とか出すの？」

黄昏「”とある”の？」

黒祐「あぁ」

黄昏「出すつもりだよ」

黒祐「何せあの場所を一晩でボーンさせちゃったからね」

黄昏「しまいには、よくわからない要塞がね」

黒祐「出現しちゃったわけよ」

黄昏「これ以上だのネタバレになるので」

黒祐「以下略」

カズキ「そろそろ時間よ～」

黒祐・黄昏「はーい」

黒祐「これからも」

黄昏「魔法少女リリカルなのは神の子孫の騎士の物語を」

カズキ「どうかよろしくお願いします」

カズキ「次回のキーワードは、ずばり」

黒祐「はぁ、フコーダー」

黄昏「で～す」

そこは、まぁお気になさらずにｂｙキャラクターイメージ　８騎士（後書き）

感想とかどしどし書いていただけると幸いです。
何気ない事でも箇条書きでも結構です。
ほんの些細なことでもいいのでよろしくお願いします。ｂｙ作者

主人公に告ぐ！　爆発せよ！

「・・・不幸だ」
隣には、綺麗な女性がパジャマ姿で抱きついてきてる
布団の中でそう呟くのは、今作の主人公こと神纏黒祐である
なぜ、こういう風に呟いてるいきさつを話すと、実に簡単である

1時間前
「風呂にでも入るか」
俺は、今日一日の最後の訓練を終わらせ風呂に入ろうとしているところである。
そして、何気なく風呂に入ろうとしている

「風呂場から水の音なし！確認完了」一応カズキがはいってるかもしれないので確認する
ガラガラガラ～
そして、ドアを開ける
そして中を見るすると風呂の中には？！
「黒祐ィィィ！」
俺は、風呂の中でカズキが風呂で寝ていることは、知らなかった！
ゆえに、覗いてしまった

「ハィィィィ！」
そして、俺は、そこに土下座して

「すいませんでしたぁぁぁぁぁ！」黒祐のスーパー土下座発動！
そして、俺は、風呂場のドアを思いっきり閉めそこから立ち去ろうとしていた

「なにやってんのよ」閉める前に、カズキの声がした

「ハイ？」

「今回は、わたしが悪かったわ。すぐ開けるからそこにいなさい」
（ツンデレなのか！？）

「アッ、はい」
いきなりのことで俺は、驚いた。

数分後・・・
カズキが風呂場から出てきた。はっきり言うと、目のやり場に困る
それもその筈、タオル一枚巻いているだけなのだから、色々なとこ
ろの凹凸が目立つ

「ｏｒｚ！」

黒祐の脳内

「さすがにこれは、反則だ―！」
鼻から血が飛び出す黒裕
そして、床に倒れる

現実
「どうしたの黒祐？」

「いや、なんでもない」
（脳内じゃ、大惨事で～す）
「ならいいけど？」

「そういや、さっきの怒ってる？」

「ううん、怒ってないわよ。目の保養になったんじゃないの？」カズキが体を拭きながら言う

「どういうことだ？」タオルを巻きながら俺は言った

「ほらほら風邪ひいちゃうわよ」カズキが俺の背中を押しながら言う

「あぁ、風呂入ってくる」

「ごゆっくり～」

そして、俺は、風呂場のドアを閉めた

ここは、俺の部屋。部屋といっても大きいベットと色々なものが入る便利な机（ハイスペックパソコンつき）ぐらいしかない。まぁ、しいて言えば毎晩きれいな星空が見えるということぐらいだ。

そんなこんなで風呂から出て、寝ようとしていた

「黒祐いい～？」ドア越しにカズキの声が聞こえた

「カズキなんだ？入っていいぞ」

「失礼しま～す」

カズキがパジャマ姿＋枕持っているのである。そして大体、想像がつくだろう

しかし、黒祐は、気にしなかった

「なんか用か？」平然と話す黒祐

「う～ん、一緒に寝て良い？」カズキがもじもじしながら言う

「今、何て言いました？」

唐突過ぎて、俺は驚いた

「だから、一緒に寝て良い？」

「お、お、俺は、男ですよ！襲っちゃったりしますよ！」

「黒祐は、そんなことしないもん！」

「そんな、確証なんて「ダ☆メ？」」

カズキが、上目遣い＋涙目である。

センセ～このおねいちゃん反則で～す！と言いたい所だった

俺がそれに勝てるわけもなく

「わ、わかったよ。けど、こっからは、入ってこないでくださいよ」

ベットに境界線を定める俺

そして、なぜか、丁寧語になる俺

「わかったよ～」

カズキの言葉に悪意を感じたのは、俺だけか？

そして、カズキが寝静まった頃

ガシィッ！

背中にやわらかい感覚、カズキの足が俺の足に絡みついてくる

完全なる抱き枕状態である。

「柔らかいのニャ～食べたいニャ～」カズキの寝言

明らかなる爆弾発言にあわてる俺

「エッ、カズキさ～ん」

だが、カズキは起きない

「煩悩退散煩悩退散×１００、変なこと考えるな！変なこと考えるな！×１００」

だが、俺は、落ち着けるはずもない

「・・・寝れねぇ～」

脈拍、心拍においても以上な回数になってる

そして、朝日が差し込んだ

さぁ、ショーの時間だよ

あのなんともうらやましいハプニングから3日後の夜のことである
ここは、八神はやての家の近くで周りは、当然夜である。

「ブラック」周囲の異様な気配に気づいて俺は、声を押し殺して言う
「はい、この反応なにかありますね」
「探索かけれるか」
「ＯＫです」
「すまない」
ブラックが探索かけるその瞬間！

「オイ貴様！」
青髪の仮面をかぶった奴が俺の前に現れた
（当たったぜビンゴだな）

「テメェこそなんだよ」

「貴様、管理局のものか？」蒼い仮面の奴が威圧感たっぷりで俺に聞いてくる

「管理局？ンなもんしらねェな」

「そのデバイスは、なんだ？」

「さぁな」

「白を切るつもりか」

「だったらどうする」

もう一人の青髪の仮面が俺を後ろから手刀で気絶させようとしていた。だが、

ガシィ！俺は、それを見ることもなく手刀をとめた

「見ずに手刀を止めただと！」

「どうした、俺を襲おうとしたんじゃないか？」

「キサマァァァ！」

2人やつのうち一人が俺に魔法でバインドをした

「動けなければ攻撃も出来まい」

青髪の奴が勝ち誇ったように言う。そして、手に魔力を溜めてる

だが俺は、にやりと笑う

「動けなければナァァァ！」

その瞬間、俺はバインドを抜け出し2人の後ろにいた

「さぁ、イッツフルボッコタ～イム！の始まりだよ～」

にこやかに俺が言った瞬間、仮面の2人は、背筋が凍った

「じゃあやりますか！コイツらには、これで十分かな」

黒祐の手の炎がともる。そして、

グハァ！仮面の奴の片割れが飛んだ

「まだまだぁ～」
グハァ！もう一人の奴も飛んだ
ガスッ！仮面の奴にアッパーキックを食らわす
ドガッ！回し蹴りを食らわす

こっからは効果音でお楽しみ下さい

ドガッ！ドガァ！
ベキッ！
ガスッ！ドガッドガッ！
ドゴォッ！ドゴォッ！バスッ、バスッ！
ベキッ！ゴキッ！
グハァ！
ガスッ、ガスッ、ガスッ！
ダダダダッダダダダダ！
ベキベキベキベキベキ！
ガスガスガスガスガスッ！
ボキボキボキボキ！
ヒギィィィィィ！
ドガッ！ドガァ！
ベキッ！
ドゴォッ！ドゴォッ！バスッ、バスッ！
ガスッ！ドガッドガッ！
ベキッ！ゴキッ！
ダダダダッダダダダダ！
ベキベキベキベキベキ！
ガスッ、ガスッ、ガスッ！
ガスガスガスガスガスッ！
ボキボキボキボキ！

チ～ン！

目の前には、青い仮面の２人組みが雑巾のようにぼろぼろになって倒れてる

「もぉ、ここいら辺でいいかな。徹底的にやったし」
黒祐の拳は、魔力でかなり強化されてた。こんぐらい喰らったらほぼ確実に死ぬが、まだ生きてた。

「殺したら後々めんどいからな」

「お、覚えてろ・・・」

「まだ話せるのかよ」
ガスッ！黒祐は、脇腹に蹴りを入れた
グハッ！

青い仮面の２人組みは、気絶した

さぁ、ショーの時間だよ（後書き）

後書きコーナー

黄昏「一方通行だな・・・やりすぎだろ、一応2人とも女だぜ」

黒祐「あっちの世界じゃ、女ばかり虐殺しまくってたぜ」

黄昏「言動がそっくりしすぎて、色々イメージ壊れたぜ」

黒祐「大変な問題だな」

黄昏「ｓｔｒｉｋｅｒ' ｓでこんな悲劇起こすなよ」

黒祐「もっと酷くなるかもな」

黄昏「何故に？」

黒祐「物語の鍵の”幼女”いるじゃん」

黄昏「あいつの趣味忘れてた～」

黒祐「ｏｒｚ！つか、オレロリコン？」

黄昏「かもな」

カズキ「ここのコーナーの本質忘れてない？」

黄昏「おっと、本質忘れてたぜ！」

黒祐「・・・？」

黄昏「やるか！」

カズキ「やりますか！」

黒祐「ナニヲデスカオフタリトモ？」←嫌な予感が的中して怯える主人公

黄昏・カズキ「あっ！」

黒祐「ふぅ～」

黄昏「黒祐って、髪の毛黒だしシャナに似てるよな」

カズキ「確かに～」

黒祐「そうか？」

黄昏「女ものの服でも似合いそうじゃないか？」

カズキ「確かにスカートはかせて不自然じゃないわね」

黄昏「決まったぜ！」

カズキ「コスプレでもさせる？」

黄昏「だな！」

黒祐「激しく待てエエエエエエエイ！」

黄昏「なんか言った？」

黒祐「拒否権を発動する！」

黄昏「そうわさせるか罠カード拒否権（ブレイカー）破壊！」

カズキ「よくやったわ」

黒祐「ノォォォォォォォォン！」

黒祐・黄昏「「読んでくださってる全ての人に感謝を申し上げます」」

カズキ「それでは」

黒祐・黄昏・カズキ「バ～イバ～イ！」

一方的な実験と伏線的な何か！

ここは、砂漠。
目の前には、龍が沢山いる
その中で、一人の少年が上からそれを見下ろしている

「そういや、ここいら辺、龍がいっぱいいるな～」ワクワクしながら少年は、言う
少年の名は、神纏黒祐

「そうだね～」
黒い髪が特徴の女性は、カズキと呼ばれている

「たくさん暴れられるな」

「確かに」

「しかし見るだけで気持ち悪いわね」

「そうだな～」目の前には、気持ち悪い龍がたくさんいる

「実戦だな」

「そうだね」

「さて、制限時間は、３０分くらいね」

「半分でいい」

「えぇ～15分」

「あぁ」

「じゃあ、殲滅スタート！」

超高速で龍のところに向かう

「ブラック、サポートよろしく！」

「OKマスター」

「輝け！夜天の双剣！クライス、アルハ！」

キュィィィン！

黒祐の手に金色と黒の十字がかかれた双剣が出てきた

「ハァァァ！夜天・超速宙靭翔！」

ザクッザクッ！ザクッ！

黒祐が高速で空中旋回した瞬間、龍の4分の一が吹き飛んだ

「まだまだぁぁ！天神翔！」

黒祐が龍に向かってダイブした！

キュィィィィン！

サクッサクッサクッ！

ゴォォォォン！龍が唸り声をあげる

「これで最後だ！夜天・星連撃！」

ピカァァァン！夜天の双剣がまばゆいぐらいに光り

ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！
黒祐の通ったところが星型に光った！

ゴォォォォォン！爆発と同時に龍がばらばらになった！

「おぉ～タイムとしては、上出来ね」
計測機には、１０秒と書かれていた
「そりゃどうも」

「それより、それ使ってよかったの？」

「見られてなかっただろ」

「そうだけどさ、まだ完成してないんでしょ」

「まぁな、けど大丈夫だろ」

「制御できてるの？」

「大体はな」

「”アレ”が手に入れば完成なんだけどな」

「”アレら”の武器大丈夫なの？」

「一回、あいつらの本体と繋げないと無理かもな」

「え～それ少し難しいんじゃないの？」

「なんとかなるだろ」

「そういや、名前決まったの？」

「大体な」

「教えて」

「いいぜ」

「レイジングハート・スターエクセリオンと
バルディッシュ・インフィニティアサルトだ。」

「へぇ～」

「試験稼動は、いつやるの？」

「その内にな」

シグナムｓｉｄｅ

ピンクの女性が砂漠で龍の残骸を見下ろしている
「シャマル聞こえるか？」

「どうしたのシグナム？」

「何者かが我々より前に殲滅していたようだ」

「なんですって！？」

「この状況のデータを送るから解析してくれ」

「わかったわ」

そして数分後

「シグナムわかったわ」

「どうだ？」

「ほんの数分前に行われたみたいだわ」

「なんだって！？こんな短時間でこの数の龍種を殲滅しただと！」

「しかも、リミッターをつけてる痕跡までもあるわ」

「しかし、クラールヴィントの解析能力も侮れんな」

「まぁね～」

「生き残った奴を狩っていく」

「わかったわ」

（しかし、リミッター付でこの短時間でやる奴か、一度手合わせしたいものだ）

ピンク色の剣士は、不敵に笑った

一方的な実験と伏線的な何か！（後書き）

黄昏「こんなことやってるけど、実は、期末テスト一週間前なんだぜｏｒｚ」

黒裕・カズキ「勉強しろよ（なさい）！」

カズキ「わからないところは？」

黄昏「全部！」

黒裕「少し、そこに直れぇぇエ！今からその腐ってる考えをぶち壊してやる！」

黄昏　ダッァー！（全力疾走）

カズキ・黒裕「待て―！」

時間も忘れて訓練だー！（前書き）

黒祐「なぜ遅れた」
黄昏「色々あったんだよ色々」
黒祐「謝罪しろ」
黄昏「読者の皆様本当に遅れて申し訳ありませんでした」
黒祐「よろしい」
カズキ「テストどうだった」
黄昏「聞かないでくれ・・・」
カズキ・黄昏「ｏｒｚ」

時間も忘れて訓練だー！

周りには、岩場があり小高い山々が連なってる

ここは訓練場

訓練場でも時間が少しおかしくなってる

なぜなら、カズキが、訓練場＋リゾート付き別荘（カズキが勝手に作った）＋時間の概念をかなりむちゃくちゃにいじったせいで訓練場＋リゾートの1日が外界の1時間だということになった。

「全くなんちゅうことしてるんだが・・・」ｂｙ黒祐

さすがに見分けがつかないとまずいということで訓練場を縮小して、すべて遠き理想郷の中にある。

そんないわくつきの訓練場

「さて、今日は私の訓練ですわよ」金髪の女性ライナがおしとやかに言う

「あぁ、よろしく頼む」

「では、参りますかな。言っときますけど私の訓練は、少々きついですわよ」

「百も承知だ」

「では、参りますことよ！テレマズ展開！」周りが何かに満たされたことは、俺にもわかった

ライナは、主に禁書目録の魔法や魔術は、全部使えるらしい

「まずは序章！世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ（ＭＴＷＯＴＦＦＴＯＩＩＧＯＩＩＯＦ）それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光な（ＩＩＢＯＬＡＩＩＡＯＥ）それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（ＩＩＭＨＡＩＩＢＯＤ）その名は炎、その役は剣（ＩＩＮＦＩＩＭＳ）顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（ＩＣＲＭＭＢＧＰ）イノケンティウス！」

ゴォォォン！そういう音とともにかの有名なイノケンティウスが現れた

「しょっぱなからですか！？」

「そうですことよ、ゆけ！イノケンティウス！」

テレマズで強化されたイノケンティウスが黒祐に迫る

「ならこれだ！Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ．（我が骨子は捻じれ狂う。）――偽・螺旋剣（カラドボルク）！」

シュゥゥゥン！カラド・ボルグがイノケンティウスに突き刺さりイノケンティウスが消える

「全く、一筋縄では、行きませんね・・・ならこれならどうですか！二重発動、神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ・エリ・レマ・サバタクニ）！、竜王の殺息（ドラゴンブレス）！」

ゴォォォォン！黒祐に赤黒い光線と青白い光線が混ざった攻撃が黒祐が襲う！

「マジかよ！威力やばいだろ！熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）！」

「ったく全く容赦ないな」

「訓練ですから。後、まだまだテレマズありますよ」にこっとした顔で言う

「ニコニコ顔で恐ろしいこと言うな、まぁいいや、こちらから行かせてもらう！二重魔法、壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）＋カラドボルグ？！」

黒祐周りから無数のカラドボルグが発射される！

「あまいですわ！硫黄の雨は大地を焼く！」

黒祐のカラドボルグの上空に無数の灼熱の矢がふりそそぐ

何発かの矢が黒祐に降り注ぐ

「まずい、約束された勝利の剣（エクスカリバー）」

ゴォォォン！黒祐めがけてきた矢がすべて焼失した！

「ならこうさせてもらいますわ！世界書庫にアクセス、創造の書、起動！改変内容、天使に自我を、空間に海を！魔術発動、きなさい！神の力（ガブリエル）！」

そういうと、ライナから透き通った水の翼が展開された

「ゆけ！水翼！」水晶のような無数のやりが降り注ぐ

（むちゃくちゃだー！ｂｙ黒祐）

「詠昌破棄！射殺す百頭（ナインライブス）！」

ズガガガガガガガガガ！二つの攻撃が互いにぶつかる！

「なら近接戦ですわ！カーテナ・オリジナルと我が鎌、神の如き鎌（エンジェルイーター）を結合！創造の書よ、我が前に世界の真理を灯せ、結合武器カーテナ・エンジェル！」

ライナの手に十字が書かれた鎌が現れた

「まだ終わりませんよ！パターン魔術発動！射程距離・切断威力・武具重量・耐久硬度・的確精度・専門用途・移動速度！」

（つまり、全部！）

「いきます！」

怒涛の攻撃が黒祐に当たる

ガキッガキッ！ガキッン！

「さすが、最大主教（アークビショップ）だけあるな」

「あら、禁書目録も使ってますわよ」

「マジか？」

「マジなことよ」

ガキッガキッガキッン！

「ハァァァァ！」

「ヤァァァァァ！」

ザシュゥゥゥン！

空気を切り裂く音がする

それは、刹那のことだった

「ひきわけですか」

止まったときには、互いの喉に互いの武器があった

「さすが、数々の者が育てたものですね」

「そりゃどうも」

「楽しかったですことよ」

「こっちもだ」

こうして、もう何が何だか分からないライナの訓練が終わった

黙るのは、やめておこうぜ！

「次は、拙者だな」

「あぁ～村雨か」

「その通り、しかし私は、あえて見守るだけにしておこう」

「？？？どういうことだ？」

「この者たちが相手したほうが楽しいだろう」

そういうと、２つの魔法陣からＦａｔｅのアサシンと草壁美鈴が現れた

「村雨は？」

「そこいら辺から拝見させてもらおうかな」

「まぁいいが、そういや、制限とかあるのか？」

「あぁ、言い忘れた、今回は、これだけで頑張ってもらうぞ」

そういうと、日本刀が一本出てきた

「今回の鍛錬は、日本刀一本で二人を倒すことだ、よろしいかな？」

「わかった」

「じゃあ、始め！」
そういうと、草壁美鈴とアサシンが一斉に向ってきた
ちなみに、美鈴は、五刀を使わずいたって普通の日本刀を使っている

ダンッ！
地面を一気に駆けだす俺

ザシュン！左脇腹を狙って美鈴が一気に刀を振り下ろす
ガキッン！それを防ぐ俺交わるごとに火花が散る

後ろから、小次郎一気に飛んでくる

ガキィン！刃と刃が交わる

「「「ハァァッァァァァ！」」」
３人の動きが一斉に光となった

ガキッガキッガキッガキッ！

もはや、人間が見れるスピードでは、ない
光の速度の戦いが４時間も続き

「燕返し！」
アサシンの必殺技の多重次元屈折現象を使った技が黒祐に迫る
「グハァぁ！」黒祐の腹に直撃する

「まだまだ！」

「燕返し！」

「！見切ッタァァ！」
その技とともに戦いが終わった
アサシンが燕返しを出した瞬間黒祐が発動してるすきに小次郎ののど元に刃をあててていたからである
無論、これは、チーム戦だったので二人の負けになった

「まったく、私の燕返しをあのコンマ単位で見切って懐に入るとは、なかなかやるな」
「そりゃどうも小次郎」
「その名で呼ぶな」
「なんでだ？」
「少しはずかしからだ」
「ふ～ん」
「どうやら、終わったようですね」村雨が来た
「あぁ、決着はこちらが勝った」
「おぉ～さすが」
「そういや、村雨」アサシン（小次郎）が言った

「なんですか？」

「今まで何をしていた」

「・・・」急に黙り込む村雨

「その間は、なんだ？」

「・・・」

「貴様黙ってるつもりか」

ダッー！一目散に走りだす村雨

「アッ、逃げるな！コラ！待てー！」小次郎も村雨を追う

「・・・私は、どうすればいいんだ？」

一人つぶやく美鈴であった

パトロールいいえ荷物持ちです（前書き）

黄昏「ネタがおもいつかん」
黒祐・カズキ「「ｏｒｚ」」

パトロールいいえ荷物持ちです

黒祐が訓練している間キング（元々ギルガメッシュ）は、ライダースーツ姿で町をうろついていた
わかりやすく言うと今のギルは髪を下ろしている、つまり映画ギルである

そこそこ見ると結構かっこいい、
「ふ～む、なかなかこの服といい受肉といい結構いいな」

最近キングは、他人と調和したり、人の事を考えるようになってきた。これもすべて黒祐（クロユキ）のチート能力のおかげだ

黒祐（クロユキ）から見ても非常にうれしいことだ。

「さて、昼飯は村雨が作ってくれるみたいだしそろそろ帰るかな」

最近は、黒祐の頼まれごとで町をパトロールしている。これはシグナム達原作騎士たちが原作以外の行動を起こしていないかなどの調査でもある

この時間での調査の大体は、終わったので帰ろうとしていた

「ちょっと離してよ！おじちゃん」
中学生くらいの女の子が４０～５０の中年男性がどこのだれが見ても無理やり連れて行こうとしている

「（まったくゲスのやることだ）」
キングがその男性に近づいて肩に手をあてる

「おい、何するんだよ！」いきなりその男性がキレた
「嫌がってるぞ、離してやれ」俺は静かに気迫で押しつけるように言う
「こいつは、俺の娘だ！」その男性の必死の言い訳にあきれるキング
「じゃあ、その嫌がりようは、なんなのかな」
「クッ！」男がナイフを出してきた
「この子がどうなっても知らんぞ！」瞬時に女の子の喉元にナイフをあてる
そして思いっきり嫌がってる人質の女の子
「だからどうした」そういうと男性に歩み寄る
「少しは、自分の行いを悔い改めよ」
そういうと、人質を取っている男性の背中に何かがあったらしく男性は気絶した
キングは、もともと見つけた瞬間にゲートオブバビロンを男性の見えないところに展開しておき、男性が射程距離内に入ったら発射されるように仕組んだのだ
「まったく、ライナの言うテレズマも侮れんな」
ライナの魔術技術にしんそこ驚かされるキングであった
そういうと、人質に取られてた女の子に歩み寄り
「大丈夫か？」

キングは無事かを確かめる

「えっ、あっ、はい」
なにやら無事のようだ

「ならいい」

「あの、お名前は？」
遠慮しがちに聞いてくるその女性

「あ～キングだ」名前を名乗るキング

「キングさんですか」

「あぁ」

「お礼も兼ねてこのあとご一緒しません？」

「ならこのカスを警察に引き渡してからだ」

そういうと、ゲートオブバビロン即席カスタムを開く

「さて、よっこらしょ」

そういうと、その中に男性を投げ入れる
そして、それを閉じる

「・・・どうかしたか？」
キングは、唖然とした表情の彼女を見る

「あの、今何したんですか？」

「カスを閉じ込めただけなんだが」

沈黙する二人

「じゃあ、どこか行きましょうか」彼女が言いだして

「だな」

そういうと歩き出す二人

二人が歩いた後ろに一枚のチラシが落ちていた

そこには、彼女の顔が書いてありこう書かれたいた

”今話題の大人気アイドル　天井真央”と

そんなこんなで町の商店街

「あっ、あそこおいしいんですよ」

その店は以前、料理本でなるもので見たものだった

「じゃあ、そこで何か食べるか」

俺はおもむろに王の財産から財布を取り出す

そういうと、店に入るキング

「いらっしゃいませ二名様ですか？」ウェイトレスが出てきた

なにやら目線でなにかに間違えられた

「あぁ、禁煙席で頼む」

俺はそうオーダーする

「かしこまりました」

そういうと、奥の角席に案内される

「何か用がありましたらこのボタンでお願いします」
そういうと、立ち去るウェイトレス

「あの、さっきは、ありがとうございました」
さっきのお礼を言ってきた彼女
「別にいい、自分として当然のことをしたまでだ」

「そういや、私の事について知ってますか」

「なんのことだ?君とは、初対面のはずじゃないのか」
この時のキングの顔は、曇りひとつない顔だった
この時、彼女は自分の事をなんも知らない彼に興味を持った

「さて、何しようかな?」

そういうと、メニューに目を通すキング

「そういや、ここのおすすめとかってわかるか?」

さすがのキングもメニューが多くてどれを食べるか迷っていた。
ゆえに判断がつけづらく彼女に頼ることとした

「あぁ、これがおいしいですよ」

そういうと、彼女がデミグラスハンバーグを指す

「ならこれにしようかな、君は、決まったのかい？」

「えぇ、決まりましたよ。このチーズハンバーグで」

「なら注文するか」

そうするとボタンを押す

「ご注文は？」

「このデミグラスハンバーグとチーズハンバーグを頼む」

「かしこまりました」

そういうと、厨房に戻るウェイトレス

キングは彼女の瞳から全てを悟った。これも前の戦争のときで手に入れた能力だった

「そういや、貴様悩んでるな」

「えっ！？」

彼女は、この時見透かされたのかと驚いた

「顔色とか見れば誰でもわかるものだ」

「そうなんですか？」

「そういうもんだ、まぁ、しかし私が言えることは、唯一つ　後悔

するなそして、振り返るな」

キングが手元にあった水を飲んだとき彼女の中のうやむやが取り払われた

そんなこんなで話が続き

「お待たせしましたーチーズハンバーグとデミグラスハンバーグです」

焼きたてのハンバーグが出てきた

「うわぁ～うまそー」

彼女は、待ちくたびれたかのように言った

「じゃあたべるか、」

「そうですね」

「「いただきます」」

ハンバーグを一口、口の中に入れると肉汁があふれだす

まさに極上

「ふむふむ、確かにおいしいな」

「そうだな、中から肉汁があふれ出す技術は、すごいぞ

そう驚きながら呟くキング

窓に、怪しい人影がいたので念のためマークしておいた

食事が終わりキャッシャーの前

「合計６０００円です」

「じゃあ私が「いや、おれが払おう」」

おもむろに危ないカードを取り出すキング

「えっ、そんないいですよ」

遠慮する彼女

「こういうときは、男が払うものだって、言ってたからな」

「へぇ～」

「というわけで」

そういいうと、カードをレジ店員に出す

会計が終わり

「おいしかったですね」

「だな」

「そういや、これから予定ってあります？」

「あぁ、おれは特にないが」

「そうなんだー」

「ショッピングでも行きませんか？」

「・・・？まぁいいが」

そんなことで海鳴市の近くにある巨大ショッピングセンター

「ちょ、待ってくれー！」

荷物で前が見なくあやふやしてるキングと

「待ちませんよー」

思いっきり楽しんでる彼女

この時キングは、思い出した

「あぁ、主が言ってたとおりの結果になったな」

黒祐いわく”荷物が山になったら前を注意しろ”だとさ

「まだ行きますよー！」

「そんなー」

人間らしいキングの買い物だった

その後、彼女は大物になったのは、言うまでもないことだ

翠屋でへ～んしん！（前書き）

生活って大変だな～

翠屋でへ～んしん！

「ねぇ、なんで、俺はこんな姿なんだ？」
「口を動かす前に手を動かすなの」ツインテールの女の子に叱られてる少年

「はい・・・」
黙る少年そして、黙々と手を動かす

ここは、翠屋

しかし、いつもは静かなはずの翠屋だが、違った。なぜなら、いつもより人が多いのである

「苺パフェひとつー」

「はーい」フェイトが言う

「こっちもひとつ」

「はーい」なのはが言う
店の中は、非常に目まぐるしい

「大変だねフェイトちゃん」

「そうだね、なのは」
ガヤガヤ、ガヤガヤ
いつもより多く賑わっております

そんな中

「あの娘誰かな？」

「やべぇ、嫁にしてぇ」

「あぁ～かわいいな～」

かなり注目されている女の子？が一人いた

「なぁ、カズキ～」

「なに？」

カズキは、テーブルを拭きながら言う

「そんなに似合ってるのか？」

「似合ってるも何も、もう何か越えてるわよ」

「なんか大事なもの失った気がする」

「まぁ、ファイト、今日1日だけだし」

「それが唯一の救いだ」

そんな風に言うのは、今作の主人公（フラグ王）の黒祐である

なんでこんなことになったのかというと数時間前に遡る

数時間前

「ねぇ、黒祐君？」

「なんだなのは？」

「翠屋よって行かない？もちろんフェイトちゃんも」

「うん？あぁいいぜ、ちょうど腹も減ってたしな」

「なら行くなの」

「「おぉー」」

そして数分後翠屋

「なんか混んでるね～」

「確かに」

奥からなのはの母親の桃子さんが忙しそうに出てきた。

「あぁ、なのは今忙しいから手伝って！」

「あぁ、良いところに来たわね、フェイトちゃんも黒祐君も」

「あぁ、こんにちわ」

「こんにちわ」

二人とも挨拶をする

若干１名事態を理解している人がいた

「黒祐、逃げていい？」

「なんで?」俺は、フェイトに聞く

「いや、逃げたいから」

「??」

そういうと、フェイトが走り出す
だが!
ガシッ!
桃子さんに子猫のように捕まった

「逃げちゃだめだよフェイトちゃん」
この時のフェイトの表情は、真っ青だった

「なぁ、カズキこの展開って」

「そのまさかだと思うよ」

「わかった!逃げる!」

そういって、俺は出口に走りこむが
ガシッ!
同じくフェイトのように捕まった

そして、桃子さんが冷酷にもこう言い放つ

「さぁ、奥に行こうね~」

俺は、直感で思った”勝てねぇ~”そして、”おぉ、神は、私を見捨てたのか”と

フェイトと一緒に着替えさせられた、この時、フェイトが若干おかしくなってたのは、言うまでもないことだ

「「・・・・」」
二人とも黙ったまんま桃子さんの前にいる

二人の格好
黒祐↓いたって普通のメイド服でけいおんのと酷似しているということだ
フェイト↓赤いチャイナ服

「黒祐君もフェイトちゃんも似合ってるわね～、黒祐君に至っては・・・」言葉を区切る桃子さん
（”・・・”のところ言ってくれー！）
遠くでカズキがサムズアップしていたことと、なのはとフェイトが非常によだれを垂らしていたのは、言うまでもないくとだ。
わかりにくい人に言うと、今の黒祐の姿は、”お察しください”なのである

「やべぇ、二人とも不気味だ・・・・」
そう、ため息をつく黒祐だった

なぜならこの時
「バルディッシュ」
「レイジングハート」

「「頼むね（なの）」」
と、デバイスに堂々と盗撮命令をしていたからである

「じゃあ、お手伝いよろしくね」桃子さんの一声とともに

「「はぁーい」」
翠屋でのバイトが始まり

お客さんのピークは、過ぎて
テーブルを拭いてる時カズキから、
「大変でしょ、はい飴あげる」

「あぁ、ありがとう」
そういって飴を食べる

「美味いなぁ～・・・！？」
ようやく気付いた黒祐
なぜなら、この時声が変わっていたからである

「カズキ、何食べさせた！」

「これだよ～ん」
カズキが広げた飴玉の袋には、こう書かれていた
声変わりＧＸ！ｂｙ男の娘に推奨
と書かれていた。今の黒祐の声は、そらのおとしもののニンフと同じ声である

「じゃあ、頑張って～」カズキの無情な声が店内に響いた
幸い店の中には、人はいなかった
「わぁ、ぴったりだよ黒祐君！」

「そんなぁ～」
と嘆く黒祐であった
そして、第２ピークの時間が始まり物語は、冒頭に戻る

そんなこんなで翠屋での非常に大切ななにかしらの尊厳が失われたであろうバイトが終わり

「やっと終わったー」

翠屋のいすに腰掛けながら言う黒祐

「お疲れ様～」

その苦労をねぎらうようにいう桃子さん

翠屋の窓から夕日が差し込んでいた

「時間だね」

「あぁ」

「またねーなの」

「じゃあね」

「じゃあ」

そういって、俺は、翠屋を後にした

決戦ｖｓ闇の書（前書き）

ついにここまできたぜ！ｂｙ作者

決戦ｖｓ闇の書

そして時間軸がかなり進み１０月２７日である。

一対一のバトルで俺は、キングと戦っていた。
ちなみに俺はに魔法変換をブレイバーとジャックに、槍の使い方をランスに、剣術は村雨に習っていた。
ちなみにキングからは、魔力コントロールと武器をすべていっせいに操る方法を習っていた。
ガキィン！ガキィッン！

「オラァァァァ！武器の貯蔵は、出来てるのかキング！」

「笑わせるな小童がぁぁ！クラェェェ！」

ドガァァァァァァン！
爆音が響き渡る

「『王の財産（ゲートオブバビロン）』！」
「『神の財産（ゲートオブヘブン）』！」

ゴォォォン！
互いの無数の剣がぶつかり合いそうぜつな爆発を引き起こしている

「マスター！」

「どうした？ブラック」

「海鳴市上空でこれまでとは違う魔力反応あります！どうしますか？」

そのとき突然

「黒祐君いる？」突然モニターが現れた

「リンディさんそんなに慌ててどうしましたか？」

「前言ってた、闇の書が目覚めたの！君もすぐに向かって！」

「了解しました。すぐに向かいます」

（ついに、ここまできたか・・・）

俺は、そう感じた。

「キング今までありがとな！またよろしく」

「あぁ！」そうキングは言った。

そして俺は、今闇の書の管制人格に向かっている。

「ＯＫ黒祐！」カズキが叫ぶ

「ユニゾン・イン！」

黒祐の体が黒い球体に包まれる。

そして、背中から黒い翼がでてきたと同時に額にオレンジ色の炎がともる。

まさにリボーンのパクリのようにだ

「コイ！ゼログローブ！」

俺の手にリボーンのイクスグローブの青いところが赤いバージョンが出てきた。

ちなみに、手の甲のところの石には、魔術回路がはめられている

「ＯＫマスター！」

「神纏　黒祐、出撃する！」

そういうと手から魔力で変換した超高圧の炎が出て、駆け上がるようにそらにむかった

その後、３０秒もかからずに闇の書のところについた。

ここは、病院上空

「あぁ、また悲しみは繰り返されるのか」気を取り直して闇の書の管制人格（リインフォース）は、言う。

「繰り返させねぇよ！こんな悲劇二度となァ！」俺は、そう叫んだ。

「刃に以って血に染めよ。穿て。ブラッディダガー」冷徹にリインフォースは、いった。

「全員よけろ！『射殺する神槍（フェンリル・ボルグ）』！」俺は、そう叫んだ。

ズガガガッガガ！

ダガーとランサーが互いにぶつかり見事に相殺された。

「まさか、黒祐君？」なのはが念話でそういう。

「久しぶりだな！なのは！フェイト！」

「久しぶりだね黒祐君！」なのはがそういう

「久しぶりだね黒祐」フェイトも言った。

「早速だが！フェイトフォトンランサーいけるか？」俺は、念話をつなげる

「うん！いける！」

「バルディッシュ！フォトンランサー！」

「これこそ本当の雷だ！『射殺する神槍（フェンリル・ボルグ）』！ｖｅｒイカズチ」

緑色の雷と黄色の雷が交わりランサーが一つになりその雷の雨が闇の書の意思に降りかかる。この間わずか３０秒

そして爆音がなる

ゴォォォォォン！

「相殺ってところだな。いくらか当たったみたいだな。」

「なのは、ディバインバスターだ！」そして、呪文を詠唱した

「我かの者に光の力を与えるものなり！強化魔法シャイニングバーストアップカスタムｖｅｒ！」

なのはのレイジングハートにかなり大きな白い翼が生える

「全力全壊！シャイニング・ディバイン・バスター！」

まっ白い光線がリインフォースに向う

ゴッォォォォォォ！

黒い煙の中に人影が見えた。

「当たったよな・・・？」

「いや、障壁で防がれたか！」

どんだけだよ！いくらなんでも高すぎだろ防御力！若干、リインフォースの障壁にうんざりする

「闇の染まれ・・・」

直感で感じ取って一気に回避行動に移る

「チィ！来たか！全員離れろ！」

「デアボリック・エミッション！」

俺は、安全距離まで瞬時に離れた。

直後！

バリバリバリ！空間が丸ごと吹っ飛んだ

「目障りだ」

そういうと、リインフォースの周りにピンク色の魔法陣が展開される

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫け！閃光！　スターライト・ブレイカー！」

（あの極悪砲撃魔法か！）

「チッ！極限七天環（セラフィックブゾーバ）！」

ギュィィィィン！ゴォォォォン！なんとか防ぎきる
闇の書の意思の砲撃から2人を守る俺
念話が二人からいっせいに来た。
「今までどこにいたの？」
「今まで何してたの？」
そういう質問が出てきたしかし、
「今は、それどころじゃねぇ！戦いに集中しろ！」
そう俺がいうと質問が止まった。
そして、その会話が終わった後フェイトが一人で闇の書に意思に突っ込んで飲み込まれた
「マジかよ！フェイトが飲み込まれただと・・・」
「フェイトちゃんが・・・」なのはは、今にも崩れそうだ
「フェイトちゃんは、大丈夫よ！」エイミィさんの声が聞こえ
「だそうだ」と俺は、なのはに言った。
（イメージするのは、エネルギーを吸取る刀）

「来い！雪片弐型魔術無効形態！」
チートパワーで武器を即席で作り出した。もはや、この世界だったら何でもありみたいだ
「ＯＫマスター！」
手に雪片が握られる
ちなみに、武器だけなので使用制限が無い
「ハァァァァ！」
俺が闇の書の意思に突っ込む。
ギャッィィィィン！
闇の書の意思は、障壁を貼ったが、すぐに砕けた。それもその筈、魔力を無効化する効果を持たせているからである。
ドガァァァァン！
「今度は、当たったみたいだな」
闇の書の意思吹っ飛ぶ、その時
「マスター！」
「どうかしたかブラック？」
「結界内に民間人あり！」
「場所は？」

「補足してあります」

「なら向かうぞ！」

「瞬足移動！」

移動した先には、オレンジ色の髪の女の子と青紫色の髪の女の子がいた。

「そこの二人！」

「あんたは、あんときの！」オレンジ色の子がいう

「俺の名前は、神纏　黒祐だ。ここは、とてつもなく危険だからお前らを安全区域まで連れてくから俺につかまれ！」

「「わかったわ！」」案外、状況の飲み込み早いな～こいつら

「行くぞブラック！瞬速移動！」

かなり速いスピードで俺は、彼女達を安全区域まで空を飛んで連れてった。」

「この中でおとなしくしててくれ！」

俺は、そういうとかなり固いバリアを二人の周りに貼った。

「どこ行くのよ！？」オレンジ色の髪の毛の女の子がいた

「少し友人の手伝いをしてくるだけだ」

「もしかしてあそこ？」戦闘区域をさして青紫色の髪の毛の女の子が言った

「かもな。すぐ戻ってくる。そこで待ってろ」

「いくぞ！カズキ！」

「わかったわ！」

「雷速移動！」

俺は、雷の速さでリインフォースのところに向かった。

そこでは、既になのはとリインフォースが一対一で戦っていた。

戦況は、なのはが押されていた

「出でよ。『血塗られし神槍（ブラッディ・ボルグ）』！」

俺の手魔方陣が現れその中から一本のに真紅の槍が出てきた。

「『血が断つ無限の槍撃（ブラッド・ローズ・ショット）』！」

シュゥン！

俺の手からブラッディ・ボルグが発射されリインフォースに当たっ

た。

そしてリインフォースの動きが止まった。

（あの！外にいる管理局の魔導師さん！）

「この声……はやてちゃん！？」

（なのはちゃん！？あの！！今から防衛プログラムを切り離すから！目の前にいるその子にダメージを負わせて！！）

（あなたは、誰や？）

「俺は、通りすがりの民間協力者さ！」

「それより、お前は、大丈夫なのか！？」

（……うん！大丈夫！とにかく、ダメージを負わせて！そしたら管理者権限で防衛プログラムを切り離す！せやからっ！）

「了解した！」

そして、リインフォースが止まってる間にフェイトが戻ってきた

「フェイトも戻ってきたことだし、なのは！フェイト！俺が先陣を切る！」

「「了解！」」

「カズキ、ブラック、デカイ奴いくぞ！」

「「ＯＫ！我がマスター（黒祐）！」」

「なのは、フェイト！少し下がってろ！」

そのとたん黒裕の指からとてつもない量の魔法陣が組みあがり

「いくぜ！二重魔法！『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』＋『神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ・エリ・レマ・サバクタニ）』！＝『天地乖離す聖なる神の星（エヌマ・エリ・レバ・サバクタニシュ）』」

青白い光線と赤黒い光線が一斉にリインフォースに向けて発射された

ドガァァァァァッァァ！

今までにない威力の攻撃がリインフォースに襲う！

障壁にかなりひびが入った。だが

「チッ！修復されち「私が行きます！」」

「エクセリオン！？でもそれはまだ……」

「大丈夫！私と、レイジングハートなら！！」

「イエス、マイマスター」

賭けるしかないな！俺は、直感でそう思った。

「我は、この者に更なる力を与えるものなり！強化魔法・エンゲージブレイク！」

「ありがとう！黒祐君！」

キュィィィィィン！ゴォォォォン！

「ディバインバスター！」

桃色の光線が闇の書に一直線で向かった

ドガァァァン！

かなり大きい爆発があった。

吹っ飛ばされるなのはをキャッチした。

そして、海のほうを見ると、黒いデカイ塊と、白い光球が現れていた。

そして、その白い光球の四方には赤い帽子の奴とピンクのポニーテール奴とそのほか二人がいた。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

それぞれが騎士としての誓いの口上を上げた。

するとその中心の光球が割れ、女の子が出てきた。

「夜天の光よ。我が手に集え。祝福の風、リィンフォース。セット、アップ！！」

杖の先端から溢れる黒と白の光。

白い騎士服。

黒いスカート。

白い帽子。

そして、三対の黒い羽の女の子が出てきた

「ここからが本戦だな！」俺は、そう呟いた。

決戦！フィナーレの準備は、いいか！？（前書き）

黒祐「A-sもここまで来たな」
黄昏「あぁ」
黒祐「さて、決戦だな。ありったけをぶつけるぜぇぇ！」
黄昏「頑張れよ」
黒祐「頑張るぜ」
黄昏「あぁ」

決戦！フィナーレの準備は、いいか！？

「ここからが本戦だな！」俺は、そう呟いた。

そして、自己紹介も兼ねての闇の書破壊作戦。

「そちらの5人方」俺は、そう言う。

「おぉ、テメェはあの時の奴！」赤い奴がそういった。

「一応名乗っておくが俺の名前は、神纏　黒祐だ。よろしく！」

「俺は、鉄槌の騎士ヴィータだ。」赤い髪の奴がそういった

「烈火の将シグナムだ。」ピンクのポニーテールの奴がそういった。

「私は、湖の騎士シャマルよ」緑色の人がそういった。

「鋼の騎士ザフィーラだ」犬耳の奴がそういった

「4人ともよろしく頼む！」

「「「「よろしく」」」」

「ひさしぶりだなはやて」俺は、はやてにそう言う

「この声黒祐君？」

「あぁ、今まですまなかったな大切な時にいてやれなくて、ほんとうにすまん」

俺は、精一杯はやてに謝る

「そんな頭もさげんでもええよ。ここでもう一回会えたんやから」

「許してくれるのか？」

「許すも何も黒祐君は、もともとうちのものや」はやての満面の笑み

「・・・はやて、後ろの３人が怖いんだが」（ガクガクブルブル）

後ろには、いかにも今からあなたを殺しますという勢いでこちらを睨んでる３人がいた。

「黒祐～！」あからさまにわかるような怒っている声だ。そして、カズキの綺麗な黒い髪の毛が生物のようにわさわさ動いてる。

「黒祐く～んどういうことかな～」なのはに至っては、レイジングハートが数百本に見えてきた。

「我が名は、金色の死神、かの者を冥土にいざなうものなり」フェイトは、バルディッシュを構えてこんなことを言っており、すでにおかしかった

（カオス、カオス、テラカオス！）

「どうだ？なんか考えが浮かんだか？」ＫＹなクロノが全員に行った。

（クロノありがとうｂｙ黒祐）

「一応浮かんだ。成功確率が５０%位だがこの方法なら多分誰も欠けずにすむ。」俺は、そう言った。

「クロノここで交渉だ！」

「なんだ？」

「方法を教えてやる。そのかわりこの５人全員無罪放免＋デメリットなしにしろ。」

「どうす「いいだろう」」

「交渉成立だ！」

そういって俺は、その方法（脳内ビジョンのこと）を全員に話した。

「まさに賭けだな。しかしこの方法しか今はないな」クロノがそう言った。

「各自配置につくんだ」クロノが人呼吸置いて言った。

「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」

闇の書の闇が現れた。その瞬間俺は、強烈なめまいが襲ったが気にしなかった。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

まずはユーノとアルフ。バインドにより。周りのバリケードを潰し

ていく。

「縛れ！鋼の軛！でぇぇぇぇやぁぁぁっ！！」
とりあえず。これでバリケードの駆除は完了。
こっからが正面場だ！

「ヴィータ＆高町なのは！」

「おう！」

「うん！」

まずは一層目と二層目の破壊。
先ほどブラッディキャンセングアイズで見たところ。第一層目は魔力無効化バリア。第二層目は物理無効化バリア。第三層目は粒子対流バリア。最後が熱エネギーによるバリアだった。
なので。一、二層目はこの二人に組ませたほうが効率的だった。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵・グラーフアイゼン！」

「Ｇｉｇａｎｔ　Ｆｏｒｍ」
カートリッジを一発ロード。

「轟天、爆砕」
そのままヴィータはアイゼンを振り上げた。

「ギガント・シュラーク！！」
そして、そのまま振り下ろした。例えるなら、隕石が落ちたときのような感じだ。
そんな一撃を喰らって、一層目のバリアは難なく壊れた。

「高町なのはと、レイジングハートエクセリオン！行きます！！」

「ロード・カードリッジ」
カートリッジを四発ロード。レイジングハートから出ている光の翼が少し大きくなった。

「エクセリオン、バスター！！」
レイジングハートの先端に魔力が集中する。
しかし、それを察知したのかなのはに向かって触手のようなものが伸びてきた。

「バリアショット！」
レイジングハートがそれをさえぎった。
そして、四本の桜色の奔流がバリアにぶち当たり、やがて一本となる。

「ブレイク、シュート！！」
こうして第二層のバリアも破られた。

「シグナム＆フェイト！」

「ああ！」

「はい！」
遠く離れたところでシグナムがレヴァンティンを構え、静かにたたずんでいた。

「剣の騎士。シグナムが魂。炎の魔剣レヴァンティン。刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

カートリッジを一発ロード。剣と鞘を合わせると、弓になった。

「Ｂｏｇｅｎ　Ｆｏｒｍ」

弓の間に弦が張られ、カートリッジをさらに二発ロード。それにより矢が生成された。

ものすごい勢いで魔力が集束されている。

「翔けよ、隼！」

「Ｓｔｕｒｍ　ｆａｌｋｅｎ」

ヒュン、という音と共に、矢が放たれた。矢はしばらくバリアと拮抗していたがやがて、バリアを粉々に粉砕した。

「フェイト・テスタロッサ。バルデッシュ・ザンバー。行きますッ！！」

「ロード・カードロッジ」

カートリッジを三発ロード。その光の大剣から衝撃波が放たれ、迎撃をしようとしていたバリケードを一蹴した。

「撃ち抜け！雷神！！」

「ジェット・ザンバー！」

その刀身がバリアへと伸び、そのまま闇の書の闇ごと切り裂いた。

すると。今まで攻撃らしい攻撃をしなかった本体が砲撃を撃とうとしていた。

狙いは……はやてだった。

「ザフィーラ！！」

「応！楯の守護獣ザフィーラ！砲撃なんぞ撃たせん！！」

ベルカ式の白い魔方陣を浮かべ、砲撃の魔力を集めていた砲塔に鋼の軛を突き刺し、エネルギーを霧散させた。

「はやて」

「うん。大丈夫」

「俺も一緒に撃つよ」

「うん。ありがとうな」

はやては夜天の書を開き、俺は右手を前に突き出し、呪文の詠唱。

「彼方より来れ。ヤドリギの枝。銀月の槍となりて。撃ち貫け！」

「神界より出でよ！メデュースアーチャー！」

はやての周りには白い光球がいくつもでてきた。

「石化の槍！ミストルティン！！」

「石化の矢！メデューサランサー！！」

二つの石化魔法。それを喰らい、闇の書の闇は完全な石に変わった。

が、それも一瞬のこと。すぐに下から、脱皮のように新しいものが出てきた。

「クロノ！」

「ああ！」

クロノはデュランダルを構えた。

「悠久なる凍土。凍てつく棺の内にて。永遠の眠りを与えよ」
海面ごと凍らせていくデュランダル。闇の書の闇までも凍っていく。

「凍てつけ！！」
「Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ！」
完全に凍った。が、すぐにまた再生しだした。
が、すぐさまこちらも迎撃に入る。

「行くぞ！！四人同時に攻撃だ！」

「「「うん！！！」」」
俺、なのは、フェイト、はやてがそれぞれ囲むように位置についた。

「全力全開！スター・ライトォォォ！！」

「雷光一閃！プラズマ・ザンバァァァァ！！」

「響け終焉の笛！ラグナロク！！」

俺はこいつらのように集束系の魔法を持ち合わせていない。
が、それに匹敵する力を持ったものならある！

「ブラック、カズキ、超速詠唱開始！」

「「ＯＫマスター」」
「我は、知るものなり、この世の理を知るものなり、炎は大地を焼き、水は全てを飲み込み、雷は裁きを下し、風は全てを飛ばし、大地は、無に帰す場所なり（Ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｔｏ　ｋｎｏｗ　ｔｈｅ　ｒｅａｓｏｎ　ｎｏｗ　ｍｅ，　ａｎｄ　ｔｏ　ｋｎｏｗ　ｔｈｅ　ｆｌａｍｅ　ｂｕｒ　ｆｏｒ　ｔｈｉｓ　ｗｏｒｌｄ，　ｔｈｅ

ns the earth, water swallows everything, the thunder gives the judgment, the wind flies everything, and the earth is a place returned to nothing)」
それは唸りを上げて魔力を高めていき、やがて世界を切り裂く剣となる。

俺には、あいにく集束魔法は、持ち合わせてなかったがチートパワーによって魔法を多少作りだすことができるようになっていた。既に頭の中にその構想は、浮かんでいたのである

「赤き閃光よ唸れ！インフェルニティー・ジェノサイドォォォォ」
三人のチャージと俺のチャージが終わった瞬間、四つの技が放たれた。

「「「「ブレイカァァァァ！！！」」」」
四つの攻撃がぶつかり、巨大な爆発を起こした。

「シャマル！」
「はい！リンカーコア、抽出……捕まえ、た！！」
シャマルが捕まえようとしたとき俺は、目の前が一瞬暗くなった。

「グラァァァァァァァ！」
俺の獣のような声が全員に聞こえた。

「どうした？」シグナムが聞いてきた

「全員下が・れ・・・！」
俺の背後に目の前にいる闇の書の二倍位ある黒い渦を巻いた空間が出現した。

全員がかなり危険だと悟り一旦かなりのところまで引いた。

「グォォォォォン！」黒い渦の中から龍の声が聞こえた。
そして黒い渦の中から

「さぁ、食事の時間だ！」そういう声が渦の中から聞こえた。
そして、俺の背後に翼に紫色のラインと真紅、深緑、蒼、黄色の結晶が入っていて真ん中に黒い結晶を

持った黒いかなり大きい龍が出てきた。なのは達は、いきなり起こったことなのでかなり驚いている
「我が名は、神裁龍なり。神を裁く者なり！」

そして、俺の右腕からかなり光っている真紅の綱が出てきた。

それが神裁龍の首もとを一周して俺の元に戻ってきた。
「喰らえ！神裁！」俺は、無意識のうちにそう叫んだ。

「グォォォォォォォォン！」龍の声がそう聞こえた。

そして、神裁龍は、闇の書の闇を喰らって黒い空間に戻っていった。

俺は、かなり疲れていたはずだが全然疲れてなかった。

突然、モニターが出てきた。

「今の何？モニターが全部やられてわからなかったんだけど？しかも、次元震がすごいし、アルカンシェル打っていないのに闇の書の闇の反応が消えたんだけど？」とリンディさんが慌てて通信してきた。

「大丈夫ですよ。闇の書の闇は、こっちで処理しました。」と俺は、言った。

「あら、そう。ならいいわ。」

「早く戻ってきてね！」

「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」

そして、場所が変わってアースラ内部
ヴォルケンリッターや、なのはたちがいる

「・・・あれは、なんだったんや？」はやてが言った

「どういうことなんだ！」クロノが言った

「貴様、どういうことだ！」シグナムもレヴァンティン向けながら

言った
全員から説明を求める声が聞こえる
「あぁー全員聞け！今からそれについてカズキに説明してもらう。」
「どうも黒祐のデバイスのカズキです」
「「「「「「どうも」」」」」」ヴォルケンリッター達がそう言った。
なぜか、こういうときでも礼儀は正しいんだな～俺は、そう思った
「今回の魔方陣なしの龍召喚なのですが、あれは私にも黒祐にもわかりません。次元震は、あいつが通ってきたところが次元空間だったからだとおもいます。以上説明終わり！」
「「「「「「「・・・短っ！」」」」」」」
全員が息ぴったりに言ったことの驚いた
納得のいかないまま各自のところに行った
「そういや、なのは？」
「なに～？」
「あの二人ってお前の知り合いか？」
「なんのこと？」
「さっき俺が助けた二人だよ」

「えっ！誰？」

「誰って、言われてもあんたの知り合いだろ？」

「特徴って覚えてる？」

「う～ん、片方は、青紫色の髪で、片方は、オレンジ色の髪だったな」

「もしかして、アリサちゃん、すずかちゃんかな？」

「う～名前知らないから分からないな。なんなら、俺とフェイトとの三人で今あってみるか？」

「うん！」

そうして、二人の待つところに行った。

「アッ！黒祐！」

つか、もう名前覚えたのかよ！しかも呼び捨てかよ！

まぁ、それはスルーして

「よっ！」

「アッ！なのはちゃん、フェイトちゃん！」青紫色の子がいった

「すずかちゃん！アリサちゃん！」

へぇ～オレンジ色の髪の子がアリサで青紫色の子がすずかって言うんだ～。

「んじゃ、俺、飲み物買ってくるよ。何がいい？」

「「「「オレンジジュース」」」」

「了解！」

そういって、俺はオレンジジュース４人分取りにいった

「ただいま～」

「あっ、ありがとう」フェイトが言った。

「それでどうだった？」俺は、なのはに念話をつないだ

「何が？」同じくなのはも念話で答えた

「魔法のこと話したかっていうことだよ」

「あぁ、私もフェイトちゃんも話したよ」

「俺は、はなしたからな」

「ふ～ん」

たわいもない談話が暫く続いた

「カズキ、ちょっといいか？」俺は、秘匿回線をカズキにつないだ
「あの後、何故だがわからないが俺の腕に何かついてるんだが？」
「見せて！」
「わかった」
「ブラックセットアップ！」
黒いスーツに身に纏った俺の右腕には、黒色のオレンジ色の線が入っていて真紅、蒼、深緑、黄色の宝
石が埋め込まれた腕輪がはめられていた。
「・・・これって明らかにあの龍のだよね」
「みたいだね」
「ほおっておくか」
「だね」

運命を変える黒い翼

会話の後に俺は、はやての家に向かった
そして今、はやての家にいる。

俺は、アースラでリインフォースの今後について直感（盗み聞き）で悟った（知った）。

「リインフォース！ちょっと来い！」

「どうかしましたか？黒祐さん？」

「今から、貴様のシステムに少し干渉する。いいな！」

「？」

「まぁ、おとなしくしてりゃわかる！」

「わかりました」そうリインフォースは答えた。

「目つぶってろ。」
あんまりやったことがないが今は、これに頼ることにした。

「ブラック、こいつの把握を頼む！」

「ＯＫ！マスター！」
（やっぱり、基本のところがいじられてるな）

「・・・フムフムこんな感じか！さて、ブラック！カズキ！ラクテ

ィレス・イン！」

「「ＯＫマスター！」」

俺は、リインフォースの体の中に入った。

少しして、ここは魔力システム中枢である。

・・・黒い塊がたくさんある。

「しょうがない、あんまりしたくはないが、いくぜ、闇の吸収！（ダークスキューバ）」

俺の手から黒い渦が出てきてそれが黒い塊を全て飲み込んだ。

そういうと

「ブラック、カズキ、ラクティレス・アウト！」

そういうと俺は、リインフォースの目の前に立っていた。

「リインフォース目あけていいぞ。」

「どうでした？」

「まっ！作業完了だ。」

（流石の俺も疲れたぜ）

「ちょっとついて来い」

「どこに行くのですか？」

「アースラの訓練室だ！」

「？」

終始？マークのリインだった

運命を変える黒い翼（後書き）

後書き的な何か

黄昏「さて～久々の後書きコーナーやるよ～」

カズキ・黒祐「おぉ～」

黒祐「やっとここまで来たね～」

黄昏「だね～」

カズキ「このあとってＥＮＤ　ＩＦ編なんでしょ」

黄昏「あぁ」

カズキ・黒祐「面白くなってきたぁぁぁぁ！」

黄昏「なんとあのキャラ登場するよ」

カズキ「あのキャラって？」

黒祐「なんだそりゃ？」

黄昏「それは、お楽しみ～」

カズキ「教えてよ～」

黒祐「教えろ」

黄昏「ネタばれ良くない」

黒祐・カズキ「チッ・・・」

黄昏（壮大なる舌打ち）

黄昏「そういやさ、アニメ見てたんだけどさ」

カズキ「なんのアニメ？」

黄昏「星空へ架かる橋」

黒祐「あぁ～あのニヤニヤが止まらないアニメ」

カズキ「へぇ～」

黒祐「で、どうしたんだ？」

黄昏「酒井先輩＝烈火の将に似すぎてワロタ」

黒祐「確かにワロタ」

黄昏「登場させようかな・・・？」

黒祐「ヤメロ、マジで見分けつかなくなる」

黄昏「・・・そう言われるとそうだな」

黒祐「そろそろ時間だな」

黄昏「そだな」

黒祐「ほなここいらで」

カズキ・黄昏・黒祐「バイバ～イ！」

はやて大地に立つ（前書き）

テストのせいで更新遅くなってすいませんｍ（＿＿）ｍ　ｂｙ作者

はやて大地に立つ

そしてここは、アースラ
廊下には、ちょうど良くはやてたちがいた

「シグナム、ザフィーラ、ヴィータ、シャマル、はやて、今から面白いことやるからついて来い！」

「「「「「？」」」」」
そしてここは、アースラ訓練室である。

「さて、リインフォース調子は、どうだ？」

「問題ありません！」

「ならよろしい。はやて、ちょっと俺の近くに来い。」

「なんや？」
はやてを近づけさせる

「今からはやての体を普通に歩けるようにする？」

「えっ？そんなこと出来るの？」

「まぁな！」
（俺を誰だと思ってる？）

「ならはやくやれよ！」ヴィータが突っ込んだ。

「現出せよ。我は、このものを助けるものなり。イシュトリルトンの杖！」
はやての体を黄色の風と光が包む
「シャマルさん！サポートを頼みます」
「わかりました」
「立てると思うから立ってみ。」
「わかった」
そして・・・
ゆっくりとだがはやてが立った。
「はやてが立ってる」ヴィータが驚いてる
「主・・・」
「はやてちゃん」
「「「よかった！」」」
はやてたちは、涙ぐんでる　そして俺は、切り出した
「早速だがはやてたち、甲冑を纏え」
「「「「「？？？わかった」」」」」

全員セットアップしたあと俺は、こう言った。

「リインフォース、はやてとユニゾンしろ！」

「おい、テェメーはやては、大丈夫なのかよ！」ヴィータがそういった。

「大丈夫だ！俺が保障する！」

「いくよ！リイン！ユニゾン・イン！」

「了解　主」

俺の前に現れたのは、髪がかわらずの白色になり騎士甲冑の黒と白が逆転し目の色も赤になってた、そしてシュベルトクロイツェルを持ったはやてだった。

「どうだ、調子は？」

「絶好調やで！」はやては、笑顔でいった。

「ならよろしい」

「はやて、その姿は？」ヴィータが言った。

「新しい姿見たいやな！」

「ありがとうな。黒祐君」はやてが笑顔でそう言った。

「私からもお礼を言います。ありがとうございます」ユニゾン越しでリインフォースも笑顔で言った

「別にいいさ」

「言い忘れたけどリインフォースは、消えなくてすむよ。」

「・・・それは、真か？」シグナムは言った。

「マジさ！俺が保障する！」

俺は、後ろを向いて訓練室のドアに向った

「ちょっと待ってください」リインフォースがはやてとのユニゾンを解除して俺を止めた

「どうした？」

「本当にありがとうございます」リインフォースが片膝をついていった。

そして、ヴォルケンリッターも片膝をついて言った。俺は、それに戸惑ってる。

「顔をあげてくれそんなに畏まらなくてもいいじゃないか。俺は、とうぜんのことをしたまでだし」

「そうですが、今までの行いは、どんなにお礼しても足りるものでは、ございません」

「そうか？俺は、少し奇跡を作っただけだぜ」

「とにかく、あなたに主はやてと同じ権限を与えます。」
リインフォースが少し顔を赤らめた気がした
「そんなお礼を貰うようなことはしてないぜ」
「今は、これを受け取ってください」
「わかった。これからも頼むぜ。わが友よ」俺は、プレゼントをありがたく受け取った。
「「「「「ハイわが主！」」」」」
「んじゃ、俺は、しばらくそこいら辺うろついてるから！」
「バイバ～イ！」俺は、そういって少し外に出ていた。
その後、はやてたちは、はやて（ユニゾン状態）ＶＳ守護騎士全員で模擬戦やってたとさ
結果　はやてが勝った
その後、訓練場でボロボロのシグナムたちを見て正直血の気が引いたが
はやていわく
「テヘッ、正直やりすぎてもうた」と笑顔で言ってた
はやて、恐ろしい子っ！

悪の制裁は、いい事だ、しかしやりすぎるなぁぁぁ！

ここは、アースラ内部

「お～いクロノ～」
「どうした？神纏」
「はやての処遇は、どうなった？」
気になるのは、それだ

「あぁ～それなんだが彼女自身で罪を償うことらしい」
（はやては、責任感が強いからな～）

「オイ、取引は、どうした？」
すっかりさっぱり忘れてたぜ

「こっちとしてもこれがありがたいんだよ、他の部署とかも色々あるし」
シャキィィィン！
「交渉決裂だ。今すぐそいつらのリストをよこせ、俺がじきじきに出向いて、その腐った人間どもを・・・」
（そういうことを考えるのは、腐った人間が考えることだからな）

クロノにメサイヤを向けながら殺すようにいった。

「滅する」
ヒュゥウゥン！メサイヤが大気を切り裂く音がした

「や、やめてくれ。これも彼女の意思なんだから」

「本当か？」

「本当だ。しかも相手は、司法取引まですると言ってきたんだぞ」
クロノがそういった

「どういう取引だ？」

「八神はやてたちを無罪放免にする代わりに君が管理局に入れということらしい」
シュィィィィン！

「さっきも言ったと思うが交渉決裂だ。今すぐその書類出せ」

「わ、わかった」
流石にやりすぎたのかクロノもようやく理解したらしくその書類を出した
その取引書類を作ったのは、ローレンス・ニデア准将だそうだ

「カズキ」

「ハイハーイ」
そういうとカズキが近くにあったアースラのコンソールをめちゃくちゃ速い速度で叩く

「どうだ？」

「人体実験とかやってるみたいだよ＋プロジェクトFの幹部だって

さ。真っ黒い人物ね」

「そうか、なら問題ないな」

「みたいだわね」

少しの間の沈黙

「場所は？」

「特定できてるわよ」

「ならすぐ向かうぞ」

「了解～」

「何をする気だ！？」

クロノが言った瞬間

「ウッ！」カズキの手刀によってクロノは、気絶した

「さて、うるさい奴も消えたことだしとっととやりますか」

「じゃあ、下準備よろしく」

「はいは～い」

そういって、カズキがコンソールを叩き始めると1分もかからずにローレンスの事務所にハッキングをかけて成功したらしい。そのためレーダーとか全て破壊したとさまったく、とんでもないやつだぜ

「じゃあ、悪者の制裁にでもいきますか！」

そういうと、空間突破で事務所に向った

ローレンスの事務所というより城塞だ
今、目の前には、瓦礫しかない

「おい、俺がいない間に何やった？」

「・・・」

「なぜ黙る」
ダッー！一目散に走り出すカズキ

「アッ！待てーコラァァァァ！」
カズキと黒祐のエクストリーム追いかけっこ

なぜこうなったかというと
俺が事務所の地下にある研究所から子供たちを保護しているほんの数秒の間に外で大きな爆発がして、驚いて外に出たら跡形もなく城塞がなくなっていてカズキがその瓦礫の山の一番上でやり切った顔をしながら立っていたのである。カズキいわくＳＬＢ並みかそれより上の極悪光線を打ちまくってたらこうなったとさ

「書類ｏｒｚ」にっこり顔で言うカズキ

「テメェに言われたくないわ！カズキ」
そういいながら走りだす

その後、管理局の現場検証ならぬ救助活動が行われた

幸い死人は、いなかったとさ

「やりすぎには、注意してくださいね」
「「はい」」
必死に頭を下げる黒祐とカズキだった

「さすがに、この子たちを保護しないわけには、いかないからな」

「どうする？」

「フェイトに頼むか」

「？？？」
若干はてな顔のカズキ

「あぁ、確かにわかりにくかったな。カズキ、未来に人を飛ばすことってできる？」

「神様の許可が下りれば「ＯＫだよ」」

「「はやっ！」」
まるで盗聴されてたのかというぐらいの速さ

俺の服を引っ張ってる子供がいた

「ねぇねぇお兄ちゃん」

「なんだい？」優しく接する俺

「僕たち一緒にいたいよ」

「わかってるよ」

「お兄ちゃんから離れたくないよ」
こういうのは、ありがたいことだ
「大丈夫、お兄ちゃんが守ってあげるよ」

「ホント？」

「あぁ、けど、僕の未来の人だ」

「「「？？？？？？？？？？？？？」」」
（壮大なるはてなマークありがとうございます）

「転送準備完了したわよ」

「あぁ」
そういうと、子供たちのところに振り返り

「じゃあ、少しの辛抱だ」

「「「うん」」」

「いい返事だ、転送」
子供たちの視界が３６０度変わった

そして未来

「たしか、ここに転送されるんだよな」

「そだよ」
ギュィィイィィ！
周りが光り

「「「ここは、どこ？」」」

「おっ着いたみたいだな」

「あっ、お兄ちゃん！」前服をひぱった女の子が言った

「あぁ、覚えててくれたのか？」

「覚えてるも何も身長とかかわってないわよ」

「うるせぇ！」

マジ切れしかけた黒祐だった

悪の制裁は、いい事だ、しかしやりすぎるなぁぁぁ！（後書き）

後書コーナーがまさかの・・・（伏線的な何か）（キリッ

後書コーナー拡大版なんだよ！（インデックス風に（前書き）

とりあえず変わらないと思いますけどやってみました
それでは、どうぞ！

後書コーナー拡大版なんだよ！（インデックス風に

後書きコーナー！ｉｎその幻想をぶち壊す！

黒祐「ぶち壊さんでいい」

黄昏「ノリでやってみた」

黒祐・カズキ「ノリでかい！」

黄昏「壮大なツッコミありがとうございます」

黒祐「とっととはじめろやぁぁぁ！」

黄昏　ドゲシャァァァ！

～しばしお待ちくだされ～

黒祐「なぁ、黄昏」

黄昏「なんだ？」（何もなかったようにはなしてきやがった）

黒祐「そういや、ここんと頃色々あったみたいだな」

黄昏「まぁな、模試もあったりテストもあったり、散々だったぜ」

黒祐「まぁ、お疲れといっておくか」

黒祐「そういや、なんか書いてるときやけにニヤリとしてたよな」

黄昏「ＳＴＳで面白い場面かいてるんだよ～」

黒祐「へぇ～どんなのだ？」

黄昏「教えてやろうか？」

黒祐「ネタバレになれない程度でどぞ！」

黄昏「了解！」

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒ'ｓ
～神の子孫の騎士の物語～

燃え盛る炎、周りは、火の海

「あぁ、俺の名前か、通りすがりの魔導師　神纏黒祐だ。」

そこにたたずむのは、ただ一人の最強と呼ばれし青年

「しかし、いくら転生者だとはいえ、あの能力があったなんて、聞いてないぞ」元

「私もだ」Ｏ

「あの能力は、いずれにせよ注意が必要だな」C

「〇〇〇も未完成だとはいえ、禁忌魔法を使ったらしいな」P

「あぁ」C

「それに反応したのか元々なのか彼もまた禁忌魔法を使った。しかも完成形だった」Z

暗躍する謎の組織

果たしてどう立ち向かっていくのか！乞うご期待！

黒祐「ネタバレし過ぎィィィ！」

黄昏「これのほうがなんかいいじゃん」

カズキ「限度ってものがあるのよ・・・」

黄昏「カズキに言われるとわ・・・」

黒祐「まぁ、そう気を落とすなって」

黄昏「気を落とすこと言ったのあんただろ！」

黒祐「つか、こんな感じで続いて行くのか？」

黄昏「かもな」

カズキ「私空気になるの・・・？」

黄昏「しっかり出番作っといた」

黒祐「そういやさ、この後ってＳｔｒｉｋｅｒ' ｓとＡ' ｓの間だろ、新しく作るのか？」

黄昏「今のところ帰る予定は、ない」

カズキ「Ｓｔｒｉｋｅｒ' ｓのストックは、あるの？」

黄昏「いまんところはな」

カズキ「今後の展開が気になるわね～」

黄昏「期待しててくれや」

黒祐「そろそろお開きの時間だな」

黄昏「それでは、みなさん」

黒祐・黄昏・カズキ「バイバ～イ！」

学校です　そう学校です

学校とは、勉強を学ぶところである。

今、なのは、はやて、フェイトが揃って俺の家に来てお茶を飲んでいる

「そういや、黒祐君ってどこの学校に通ってるんや?」はやてが話しかけてきた

「あっ、そうそうどこの学校に通ってるの?」なのはがいった

「・・・」　俺は、唐突過ぎてかなり驚いてる

「どういうことかな黒祐?」何かを察したフェイトがなんか怒ってる

「実は、学校行ってない」あきらめて俺が言った

「なんで?」

「わけありだ」

「わけ話せないの?」なのはが今にもお話（事情聴取）でもしようかとしてる

「そうやなんでや?」

「・・・」

「お話は、聞かせてもらったよ～」突然画面が現れた

「「「「リンディさん！」」」」

「いろいろ調べさせてもらったけど学校行ってないみたいだね。」
（つか、勝手に調べられてたぁぁ！）

「あっ、はい」

「どうする？」

「一応大学ぐらいの知「ダメだよ！学校行かなくちゃ！」」なのは
の壮大なる割り込みがあり

「なんで？」

「楽しいところだからだよ」

「・・・そういわれてもな～」
チラッ、ノォォォ！

なのはたち3人が上目遣いの涙目で見てきた。破壊力ヤバス
（そりゃ、涙目だったらなぁ、ことわれねぇよ）

「・・・しょうがないな」

「本当？」フェイトが聞いてきた

「本当だ」

「「やったー！」」」なのはたちは、喜んでた。
そんなこんなで、俺は、2回目の学生生活を送ることになった

そしてここは、私立聖祥大付属学校
「今日から新しいお友達がきま～す」先生が言った
「エッ、だれかな？」
「誰だろうね～？」
なのはやフェイトたちが騒いでる
カツッ　カツッ　カツッ　廊下に足音が響き渡る
足音が聞こえるにつれクラスが静かになる。それも恐ろしいほど
それは、こちらに接近してることが分かる
「なのは・・・この気配って」なのはがフェイトに念話をつなぐ
「そうだね。もしかしてかもね」
「昨日だよね。学校行くの決まったの」
「早すぎだよね」

「そうだね」

一方、アリサ達は

「なんかみんなおかしいね」すずかがアリサに話しかけた

「確かにね。にしてもどういうことかしら。静まり方が尋常じゃないわ」

「この感覚どこかで体験した気がするんだけど・・・」

「同じね。私もよ」

「「・・・・」」二人とも黙ってしまった

そして、

クラスのテンションガン下がりの中、先生は、告げる

「紹介します。転校してきた神纏黒祐(かむいくろゆき)君です」

「神纏だ。よろしく」

「みなさん、仲良くするんですよ～」

「「「「「「「「「「「「「「「ハーイ！」」」」」」」」」」」」」」」

「君の席は、高町さんとフェイトさんの隣ね」

「わかりました」

俺は、その席に向かった

「よっ！」

俺は、なのはとフェイトとアリサとすずかに声をかけた

そして、授業が始まる。しかし、分かりきってることなのではっきしいってダルイ。そのほかのなんでもなかった。

ちょっくらカオスにしてくる（前書き）

黒裕「更新遅い！」
カズキ「そうだよ！」

黄昏「こっちゃテスト連ちゃんだったんだよ！勉強すっぽかしてるんだ！」
カズキ・黒裕「勉強しろよ・・・（。Д。；；；；）」

ちょっくらカオスにしてくる

体育の時間
嬉しいことにこの日は、サッカーだった。
「オイ！神纏！」クラスの男子が話しかけてきた
「なんだ？」
「足を引っ張るなよ！」
「善処する」
「それと、お前トップな」
「了解」
「まぁ、俺のほうが出番多いけど」
「かもな」
挑発する相手に冷静（内心かなりどす黒い）に対処する俺

ピー！
そして、試合開始のホイッスルがなる

「このコート小さいな～やりがいがあるぜ。幸いなことにキーパーがいないな」
俺は、小言で言った
「新入りがドンだけ出来るか見させてもらうぜ！」さっきの男子が言ってきた（挑発）

シュゥン！ありえないぐらいの速度でボールがゴールに入った。

「「「「「「「「「・・・」」」」」」」」」
男子達は、唖然としてる

ピー！再び試合開始のホイッスルがなる

「ま、マグレだ！」相手のチームの大将が言ってる。
「マグレだと良いな」俺は、小言でそういい
サクッ！あっけなくボールをとって
シュゥン！ゴール！
また入った。
ピー！
シュゥン！ゴール！
ピー！
シュゥン！ゴール！
これの繰り返しである。なのはたちは、喜んでる
結果５０対０という大差で勝った
「チキショー！なんでなんだよ！」相手の大将が膝を突いて悔しがってる
「出番なしかよ！せっかく高町さんたちにいいとこ見せようとしたのによ！」
こちらの大将も同じく悔しがってる

ザマァー！俺は、心の中で膝を突いてる二人に言った。そして、２人に向かってにやりと笑ってやった。
「あんな距離から決めるなんて黒祐君すごいね」なのはが話してきた
「そりゃどうも」
「だけど・・・」
「なんだ？」
「やりすぎだよ」
「なぜだ？」
「結果５０対０（点数は、全部黒祐が決めてる）なんてひどいよ」
「いや、アレぐらいで十分だ」
「なんで？」
「あの膝ついてる二人に挑発されてな、それに乗ってやって徹底的にやってやった」

「・・・」
「一つ聞いていい？」フェイトが話しかけてきた
「なに？」
「シュートの威力ってドンくらい？」
「う～ん、もとの威力の２５分の一だからアレでも人に当たったら３時間ぐらいは、気絶するぞ」
「魔法使った？」
「使うわけないだろ」
「・・・」なのはたちは、黙り込む
「あんまりやりすぎないでね・・・」
「善処する」

～昼休み～

転校初日とあるだけで予想どうりの質問タイムー
「どこから来たの」
「好きな動物は？」
「さっきのシュート何？」
「好きな食べ物は？」
などなどの色々な質問が来る
俺は、全てにフェイク（好きな食べ物とかは、ちゃんと答えたぜ）をかけて答える

「ちょっとあんたきなさいよ！」アリサが声をかけてきた。
「わかった」としか言いようがなく
そして屋上には、なのは、フェイト、すずか、がいた。
「ご飯一緒に食べよ」すずかがいった
「別に良いが」
俺は、そういって自分で作った弁当を開く
「うわぁ～おいしそう」なのはが食べたそうに弁当を見る

「そりゃどうも」
「「「少し頂戴！」」」
「どうぞ」
そして、無事に昼飯を食い終わって楽しく談笑してたとき

「オイ！神纏！」サッカーのときのこっちの大将がいった
クラスの男子全員が屋上にきて一列並んで俺を見てる
「なんなのよ！アンタ達！」アリサが怒気をこめて言う
俺は、アリサを左手で静止させる
「さっきの恨み晴らさせてもらう！」クラスの男子が言う
「貴様らにそれが出来るとでも。笑わせるな」俺は、静かにそういう
「んだとコラァ！」
「なのは、フェイト、アリサ、すずか、少し目を瞑っていろ」
「今だ！やれ！」リーダーと思われるやつが合図を出し
男子達が襲ってきた
「ガキは、寝てろ」そして、
「グワァァッァ！ヤメロ！ヤメテクレェェ！」
「ウワァァ！クルナァ！クルナァ！」
「助けてくれぇぇ！」
などなどの悲鳴が木霊した後
「目を開けていいぞ」
なのはたち目の前には、男子達が全員倒れてた
「こりゃ最高だな」

「何したの黒祐？」
「あいつらの目を見ただけさ」
「・・・」
「どうしたお前ら黙り込んで？」
「死んでないよね・・・」
「あぁ、死んではいないんじゃないのか。多分かなり悪い夢でも見

ているんじゃないのか？」
その後、５，６時間目の授業に俺以外の男子全員がいなかったのは言うまでもないことだ。

次の日

１時間目　算数
「この問題とける人～？」
誰も反応しない
「じゃあ黒祐君」

「何で俺が？つかその問題簡単すぎね？やるんだったらこうしてくださいよ」
黒板に、大学並みの式を書き上げていく
「その問題わかったわ！」アリサが言った
「この問題を解けるとわな。なかなかやるな」
「当然よ！」
「次は、この問題だ」
「かかってこい！」

「せんせ～黒板が記号ばかりでわかりませ～ん」
「負けたわ」
「「「

ガスッバスッ！
フェイトとドッジボールという名の戦をしている
男子たちは、昨日の惨劇によって沈んでる
「せんせ～あの近くに行ってボールとっていいですか？」
「行っちゃだめェェェ！」

先生は、先生なりに頑張っていた・・・けどこのカオスは、止められなかった

全力で一般人を巻き込む（前書き）

黒祐「遅い」
黄昏「すまん」
黒祐「いいたいことは？」
黄昏「一般人を巻き込んでスペクタクルを起こすのが俺の信条だ」
（キリッ
黒祐・カズキ「ブッ飛べェェェェ！」

全力で一般人を巻き込む

ある日の学校終了後、カズキと色々あって合流した。そして、これは、その時の翠屋での話である

そして、今俺は、高町家の道場にいる

「恭也ァァァァァァ！こんなもんですむと思ってんのかぁぁぁ！」
俺は、ありったけのエネルギーを目の前の男性にぶつけてる
「・・・」目の前にいる奴からは声が聞こえない

こうなったのは数時間前に遡る

歩いてるなのはを発見した。なのはの後ろから暴走自転車が迫る
「なのは、危ない！」俺は、なのはをかかえる
「キャッ！」イキナリのことで驚くなのは
俺に覆いかぶさるようにして倒れるなのは、そして、唇とほっぺがくつっく

「大丈夫か？」
「・・・」なのはは、顔面が赤い
（はぅ、倒れた拍子にキスしちゃったよ）ｂｙなのは

「黒祐君この後、うちによってかない？」なのはは、すごい機嫌がいい
「別にいいけど、そんなに機嫌がいいんだ？」俺のほっぺには、キスマーク

「なんでだろうね～？」なのはがにっこり笑った

そして、翠屋

「いらっしゃい～」男性の声がした
「どうも～」俺は、返事をする
「あっ、黒祐君」なのはの声が聞こえた
「あっ、カズキさん」
「なのはちゃん～こんにちわ～」
カズキが座っていた

ヒュッ！俺に向かってフォークが飛んできた
「キャッ！」カズキに当たりそうになった
「ちょっと！なにすんのよ！」
「あぁすまない。そこにいる奴に向けて投げたのだが」
「あぶないじゃないの！」
「しらん！」完全に男性は、聞く気がないらしい

「おい貴様！そのほっぺにキスマークは、なのはのだな」
「それがどうしたか？」
「勝負だ！その腐った根性叩きなおしてやる！」
「いいだろう！ここじゃなんだし道場でどうだ！？」
「なら、ついてこい！」

そして、ここは、道場

「黒祐頑張って～」
「そんな奴やっつけちゃって～」
なのは達絶賛応援中！

「御神流剣士高町恭也！いざ参る！」
「かかってこいや！」俺は、メサイヤを取り出す
「神速！」初っ端から面どい技を使ってきた
「チッ！」
「なかなかやるな！」
「そりゃどうも」
素人相手で魔術が使えない分、かなり手ごわい
（相手は、魔術知らない素人だしな。流石にな～）

「貴様、なのはをきづものにしおってさっきの女も貴様の身内のような気がしたからないずれこの手でやっていただろうな」恭也は、そういった
「カズキのことか」
「その様な名前らしいな」

プツッ！何かが切れた音がした

ゴォォォォォォン！道場全体に轟音が響く。その音でなのはたちが気づいた

「もういい、ヤメダ、本気でやらせてもらう」

「キャッ！エッ、バインド！」なのはがバインドで縛られる
「すまん、なのは少しそこでおとなしくしててくれ」俺は完全切れた。カズキを傷つけようとしたとわかった瞬間

「グハッ！」恭也が地面に叩きつけられた
「恭也さんなのはから魔法の事知ってますよね」
「まさか、卑怯な！」

「卑怯ねぇ～それが死に際に放つ言葉か高町恭也よぉ！」完全に言葉が変わってる
なのはは、俺の状態に恐怖心を抱いてる
「この俺を殺せるとでも思ってるのか、なのはが黙っちゃいないぞ！」
「ふ～ん。誰が殺すって言ったよ。死ぬ直前で回復させてやるよ！ブラック！」
「マスターそれは、マスターに負担が「やろうか」」
デバイスの反対を押し切る俺
「了解マスター」
「開放！」
黒祐の周りに一般人でもわかるような禍々しいオーラが纏う
「まァ、いまの貴様の体にかかってる技は、グラビティレイだそんな技は、まだ生ぬるいナァ～」
俺の体から赤いオーラが放たれる
「まず一発～！」
ドスッ！
「グハッ！」恭也の体がへこむ
「回復～」笑顔で俺が言う

「さぁ、こっからが魔法タイムだよ～」なのはたちは、抜けようと精一杯だがなかなか抜けれない
「場所的には、アソコガいいな～戦闘空間展開！」まわりが黒い空間になる
「ここは、どこだ！」恭也は、かなり驚いてる
「あんたの処刑場だよ高町恭也ぁぁぁぁ！」
俺の右手に刀が握られる
「星速疾風！」
キュィィィィン！シュウゥンッ！シュッン！
ガス！ガス！バス！バス！ドガ！バキ！ベキ！ザシュッ！ザシュッ！

星の速さでの攻撃が次々と恭也にヒットする

そして、物語は冒頭に戻る

「恭也ァァァァァァ！こんなもんですむと思ってんのかぁぁぁ！」

俺は、ありったけのエネルギーを目の前の男性にぶつけてる

「・・・」目の前にいる奴からは声が聞こえない

それを繰り返すこと×１００回

しばらくたって、そろそろころあいかと思ったとき

「詠昌破棄　殲滅魔法・闇の雷帝（デストロイマジック・ギガエンペレ）！」

俺の周りから黒いエネルギー体から極太のレーザーが恭也にむかって発射される！

「ウワァァァァ！」すごさのあまり恭也が悲鳴をあげる

「んなもんで、死なせてたまるかよ回復！」

緑色の光が恭也を包む

「ハァッハァッハァッ・・・」

「こんなもんかよ・・・、まだまだ終わらないぜ。一気にいかせて貰うぜ！」

恭也は、既に死にそうな顔をしている

「今度は、焔だ！闇の煌神（デストロイマジック・ウーヌサライフリート）！」

恭也の周りに数十万℃の炎が刃と共に周りを包み込む

「まだまだぁ！闇の凍滅（デストロイマジック・スパイラルコフィン）！」

恭也が一瞬で凍りつく。本人自身は、じわじわと動けず凍らされる恐怖を味わってる

精神へのダメージは、大きい

「グハァァァ！」
「させるかよ回復！」

「・・・！」恭也は、絶望した顔でただたたずんでいる

「これは、俺からだ！　暗黒無双・天魔の幻想第1階級（クアトロザダークネス・ノーレライスファンタジアバージョン1）！」

恭也視点から見ると黒祐の周りに無数の目が現れそこから手がたくさん生えてきてる
それが俺に絡み付いて離れないそのうち、抵抗を忘れて・・・

「ウワァァァァ！」完全に気絶したがしかし！
「まだまだ終わらねェよ回復！」恭也の周りに緑色の光がともる

周りは、黒い空間
俺の右手に色が反転したエクセリオンモードのレイジングハートが出てきた
「なのはちゃん！なのはちゃん！」
「わかってるよ！かずきさん！」2人ともかなり慌ててる。それもその筈黒祐が構える体勢に問題があるからである
「けどこのバインドはずれないで」
「どうすればいいのよ・・・」
「たぶん、黒祐君のことだからなにかしらの策があるんだよ・・・」

「最後になのはの技を食らわしてやるよ！」黒祐の足元には、なのはの魔方陣の3倍の大きさのある魔方陣が展開してる

レイジングハートが向けられてる先には、恭也がいる
ガシュッ！キュィィィン！恭也の周りに数個の月の大きさくらいのエネルギーの塊が集まる

「スターライトォォォォ！」俺の持ってるレイジングハートに月の大きさほど魔力が集束される。魔力が大きく光っていく。
「ブレイカァァァァ！」キュィィィン！ゴォォォッォン！
砲撃が止み
「大丈夫だよ、威力は、最小限に抑えているから」それもその筈、威力入れると確実に吹っ飛ぶからな。それでも精神的にぶっ飛ばされるのは確実だ
「だがなぁぁぁ！これが、カズキの分だぁぁぁぁぁ！」、
俺は、そう叫んだ

「ふぅ～う」落ち着く俺
「・・・黒祐君」なのはが喜ぶはずだが喜んでない
「ほんとすいません」
「今度から気をつけようね」なのはの目が笑ってない
その筈である妹離れのいい薬になるはずが劇薬の過剰投与状態までやってしまったのである
「はい・・・」
そして、翠屋にもどり

「ただいま、かえりました～」
「あら、おかえり～」
「ちょっとやりすぎました」
俺が恭也と目をあわせると
「すみませんほんとにすいません今すぐ死にますからほんとにすいません」

・・・精神がぼろぼろになってました
「ほんとにすいません」
「いいのよ、これくらいやらないと妹離れできないから」
おや、厨房でなのはの父親らしき人が木刀を持ってたみたいだが恭也の発狂振りにおどろいて、木刀を放したみたいだ
「すまないわね～」
「べつにいいですよ」
「なんか食べていく？」
「んじゃ、そうさせてもらいます」
俺は、桃子さんにお茶と飲み物をもらった
そのあと、なのはたちとなかよく談話し始めた

ｖｓ烈火の将シグナム・・・と連行（前書き）

黄昏「夏休みに突入したんだよ」
黒祐「そんなおまえは、受験生」
黄昏「ノォォォ！」
さぁ現実を見ながら幻想を幻想で楽しもうか・・・ｏｒｚ

ｖｓ烈火の将シグナム・・・と連行

とあるアースラの一角の談話室
「ども、シグナム」
「あぁ、神纏か、どうだ？主はやてとの学校は楽しいか？」
「（なのはとフェイトに聞かれたら折檻ものだな）」
まぁ、折檻じゃないと思いながら話を進める
「あぁ、今日は簡単なお願いがあってきた」
「なんだ？」
俺は、頭の中でシグナムが思いつきそうな願い事を浮かべる
・・・考えてから数秒後、結果：碌なことがなかった
「で、なんだい？」
「私と戦え」
あまりのことに、呆然とする。というより既に考えてたことだったんだがまさかと思った
「なんで？」
「いや、お前と戦ったことがないからな」
「あぁ～」
そういわれるとそうなるシグナムとは、戦ったことがないからだ
「というわけで勝負だ」
「えっ？」
いきなりだった
「なんでいきなり」
「私は、今戦いたいからだ」
無理やり自分の感情押しつけてきやがった

「というわけで行くぞ」
そういうと背中にどこぞの刑事のごとく手錠をはめる、しかも慣れ

た手つきで
「ちょっ！シグナム、なんで手錠なんだよ？」
「いや、手っ取り早いし、テスタロッサも効果的だと言ってたし」
フェイトの人格が激しく疑われる疑いありがとうございます、とおもいながら自分では、どうすることもできない手錠につかまりシグナムに引きずられながら訓練室に向かいのだった。道中の管理局員の目線が非常に痛かった

「さて、勝負と行こうか神谷？」
「・・・それが言う言葉っすか？」
「反省はしていない、そして二重の意味でこうかいもしてない」
「どっちか反省か後悔しろよ、それと公開するな！」
「いや、もう手遅れだ」
「ならいうなぁぁぁ！」
壮大にシグナムにツッコミを入れる
シグナムからは、いつでも戦闘態勢に入れるような状態だ
「じゃぁ、こっちもいきますか」
そういうとブラックをたたき起す
「ブラック、いくぞ」
「了解マスター」
ＡＩ特有の音が聞こえ、周囲に黒い魔力が満ち始め
ギュォォォン！その黒い魔力が黒祐に吸いつくように赤原礼装（黒）のバリアジャケットを作り出した

「ほぉ、黒か・・・本気でこい」
「わかってますよ」
お言葉に甘えて全力全（快）ｏｒ（壊）？
決戦の時見ているだろ、とツッコミたくなった

「現れろ、エクシードエア！」
魔方陣が俺の真ん前に現れる。その中からエクスカリバーと乖離剣エアを二つ合わせたような剣が一本出てきた
「その剣、始めてみるな」
「あぁ、俺もだ」
この剣は、本当に初めてでたまに無意識によくわからない武器を呼び出してしまうこともあるのだ。だからこそ王の財産（ゲートオブバビロン）が使えるのかもしれない

「構えろ、神纏」
「あぁ」
そういうとシグナム相手に剣を構える
・
・
・
「「ハァァァァッ！」」
二人の気迫が一気に頂点に達したところで、いっきに走り出す二人。だが、二人にとってこの距離は、一瞬で間合いを詰められる距離だった

ガキィィィン！シグナムのレーヴァティンと、エクシードエアがぶつかり合う
「魔術師らしく魔術で攻めましょうかね」
そういうと詰めていた間合いを一気に離し
「射殺する神槍（フェンリル・ボルグ）！」
背後に現れた魔方陣から大量の矢がシグナムに降り注ぐ、それと同時にシグナムは
「レヴァンティン！」
『Ｊａ』

シグナムのレーヴァティンが形状が変化し、蛇腹剣になった
ズガガガガガ！それで、いくらかボルグが撃ち落とされる
「まだまだぁ！」俺がそう言うと、その撃ち落とされなかった矢全てに追尾性能が加わった
「お見通しだ！」そうシグナムがいうと矢が全て撃ち落とされた

「どうだい、こんなものなのか？」
こうなるとたぶん長期戦になるだろう、そうなるとめんどくさいことになる
そうそうに決着をつけようと思ってきて

「手加減はしませんよ！」
そういうとエクシードエアの魔力回転率が格段に上がるというよりあげる
ギュォォォォォン、うなりを上げるエクシードエア
「天地乖離する希望の星（エヌマ・ザ・カリバー）！」
そのためた魔力を一気に解き放つと同時に

「カードリッジフルロード！飛龍・一閃！」
ほぼ同時にシグナムも技をかけてきた
「「ハァァァァァ！」」

「クッ！」若干表情がきつくなるシグナム　それもそうだ、技で相殺すること自体がむちゃなのである
俺の魔力値は、かなり高いからなのである

「これで、終わりです！」
ズガガガガガ！キュォォォォン！
さっきより輝きを増した光線の奔流がシグナムを押しつぶすようにシグナムに当たった

シグナムとの戦闘が終わり
「ふぅ・・・」
ほっと溜息をつく俺
そこに突拍子もなく現れるはやて
「おぉ～シグナムやっとるなぁ～って！うわぁ！」
はやてが見たもの、それは自分の家族がひとりの少年のまえに戦闘
服がボロボロにされ、壁に寄り掛かっている完全的な敗北状態だった
「黒祐君？これ、どういうことや？」
「うん？あぁ模擬戦やらないか？っていわれて」
「手加減は？」
はやてが恐る恐る俺に向かって聞いてきた
「もちろん、」普通ここでならしてたけどっていうのがいいと思うんだが
少しの沈黙、そして
「してないぜ」親指をサムズアップしてそうはやてに告げると
「シグナムぅぅぅ！」はやてが発狂し始めたと同時に
「少しは、手加減せぃやぁぁ！」はやての右ボディーブローが鮮やかに決まる
「グフッ！」効果音も鮮やかに決まった

「なんで？手加減しなかったんや？」
「シグナムがしなくていいって言ったから」
ありのままを話す俺

ピシッィィィ！はやての顔に亀裂が入る
「（あれ？なんかおれ悪いことしたか？）」

「・・・黒祐君、連行や」
どういうわけだか知らないが、本日二度目の連行となった。その後

「ヌァァァァァァ！嫌だぁぁぁ！」はやての家から想像を絶する声が聞こえたことは、いうまでもないことだ

アマテラスさん参上！？　前編！（前書き）

どうも作者です、最近妙なゲームにはまってしまい、テンションがが
がん上がりですが、というよりか読者の皆様すいません。なんだか
んだありまして更新遅れてしまいました。本当にすいません心より
お詫び申し上げます。

ｐｓ、先日待ち歩いてたら何もいないところで斜め上向きながらぶ
つぶつと話している人見かけた

アマテラスさん参上!?　前編!

壮大な執務室に男女二人～
ちなみにK＝神様だよ
K「なぁ～これどういうことだ?」
「お察しください」と秘書が言う
今、Kと呼ばれてる人が見てるのは、たった一枚の紙
K「さっせれねぇよ!」
「だから～査察ですよ～査察」
K「なんであのジジイは、こうもいきなり査察はじめるの?」
「一応あの方も最高神で天空神なんですけどね」
K「で、誰が来るのさ?」
「いえ、ここにはきません」
K「はぁ?じゃあ、どこに?」
「地球です」
K「詰んだ?」
「場合によっては」
K「どうすっかな～」

・
・
・

K「よし、その査察官を殺そう」

「・・・」
「エッ?Σ（ ゜д ゜）」

K「だから、殺してしまえば問題ない」
「捕まりますよ」
K「だよね～」

「で、査察官誰なのよ？」
K「あぁ～極東の第３８エリア周辺だから～」
「アマテラスですね」
K「だな」

K・秘書「「ならどうでもいいや～」」

こんな感じで丸く収まったのであった

査察当日

ここは～無駄にでかい黒祐の家
「・・・今日も一日～楽しい朝が～あぁぁっぁぁ！」
と朝っぱらから悲鳴を上げる黒祐
「うっさいわね～少しくらい布団で潜ったっていいじゃない～」
と駄々をこねながらかわいらしい顔で俺の布団に自然に毎日寝た後にもぐりこんでくるカズキ
ユニゾンデバイスとしてみていいのか？人として見ていいのかが問われるのである

「つか、格好！格好！なんでそんな肌露出してるんだよ！」
まるで襲ってくださいといわんばかりの格好である
「寒いしいいじゃない～！」
そういう問題じゃない！むしろ道徳倫理的問題だ

「とりあえず服きろや」
「既成事実？」
「あからさまに犯罪行為を口にするな」
と朝っぱらからお決まりのボケとツッコミ

「・・・それにしてもさ～」
「なんだい～」
「暇だね～」
「そだね～」
上からカズキと黒祐の順番である
そんな風に窓を眺めていると

シュタタッタタタタ！
目の前の塀をを何かが通り過ぎた

「・・・？なんだありゃ？」
まぁ、ぼっーとしてたから気づかなかったんだけど
次の瞬間
「っ！ちょっ！えっ！？」
ボンッ！
黒祐の目の前に現れた青い火の玉が突然爆発した。そして、煙が舞う

「ゲホッ、ゲホッ」
その後、煙がやみ

「・・・なんで？」
煙がやみ、その中から現れたのは

「狐っ娘？」
→のとおりの結果だった
「なんで黒祐ってそういうフラグ立てるのかな～？」
「誤解だコラァ！」
そりゃ突っ込みたくなるわ

「・・・カズキこそ何か知ってるだろ」

「知りませ～ん」
そんな風に話してると
当の本人が動きだし
ペタペタと黒祐の方に詰め寄り
ドサッ！黒祐を押し倒した
「エッ？Σ（ﾟдﾟ；）」

「どうも神じゃ」
外見が１２歳くらいの巫女服姿のその狐の女の子は開口一番でそういった

「「・・・」」
「「エッ？Σ（ﾟдﾟ；）」」
二人とも驚くしかなかった

「・・・で神様？」
「そうじゃ」
古い言い方からして神だろう
「で、お名前は？」
「なんか子供の名前を聞く聞き方じゃな」
「だって子供ｚｙ「いうなぁぁぁ！」」
神様に対してとんでもないことを言おうとしていたカズキ
「別に気にせんでもいい、本当のことじゃからな」
割かし自分のことをよく自覚してくれてた神様だった
「それにこれも結構需要かなの天界は」
かなり頭が痛くなる
「で、名前は？」

「天照大神じゃ」

「・・・（ハァ～）」心の中でため息をつくのであった
「で、なんで日本神話の最高神さまがここに？」
「あぁ～最近な童の管轄地域っつかここいら辺で未承認の魔力が発見されたまではいいもののどうやら派手にそれが使われたらしいのじゃからな、それの調査じゃ、まったくヨーロッパのジジイは、頭が固いからむかつくだけじゃ」
（ヨーロッパのジジイって・・・ゼウスやん、最高神ジジイ呼ばわりしやがった）
「で、なんでここに？」
「いや、発信源がここじゃったから」
思い当たる節々、そしてやることは唯一つ

「すいませんでしたぁぁぁ！」
ものすごいスピードで土下座！

「ちょお主Σ（ Д｜；）、慌てるでない、まだ主と決まったわけでなかろう」
「すいませんでした、僕がやりました！」
「エッ？主がやったのか？」
「はい」
「・・・そそられるのぉ～」
変態がそこにいた

それから数分後
「・・・まさか主じゃッたとはなぁ～」
「はい」
「じゃが、リミッターというものをつけておるのじゃろ」
「はい」
「それでも漏れ出している魔力はオーバーＳＳＳ、化け物じゃな貴

様」
「はぁ・・・」
確かにいってることは事実だ。カズキが作った特製のリミッターでもオーバーSSSそうなるとリミッターをはずしたときに出る魔力がとてつもないことになる
一回、リミッターはずしたら周りの一般人が半覚醒状態になりかけた
・
・　・　・
「でというよりか、なぜ姿を消しておる天魔よ」
・　・　・
「へぇ～惜しげもなくそういうのね、九尾さん」
「階級はうんぬんとして、どういうことじゃこやつに・・・そういうことか」
「そういうことよ」
あまり首を突っ込むとめんどくさいことになりそうだ
「しょうがないの、ほれ」そういうとアマテラスは、カズキになにやら仕向けさせる
それと同時に、意識が吹き飛ばされた

アマテラスさん参上！後編！＋シリアス（前書き）

何気ない複線があります（↑もろだしもあり）

アマテラスさん参上！後編！＋シリアス

黒祐の意識が飛ばされた後

カズキ・アマテラスｓｉｄｅ

「で、報告があるんでしょ」
「あぁ、クエリアスからな、ある事例を調査するよう頼まれてな」
アマテラスの口調が変わる
「けど、エリア的にそれって干渉にならないの？」
「その点なら問題ない、権限を使った、童も一端の最高神じゃ」
「さすが最高神さまね」
「皮肉るでない」

「で、本題はどうなの？」
「あぁ、世界状況の地図は、おぬしでもわかるだろ？念のため確認じゃいうてみ」
「はいはい、オリンポス・エジプト・ギリシャ・インド・グリーンランド・高天原、そして本局の聖域でしょ」

「いいや、それに龍山（ロンシャン）も加わった」
「あそこって、加わっていいの？」
「あぁ、元始天王が最高審議会の常任理事になってからな」
「そう・・・で、議長は相変わらずあの３人ってわけね」

「あぁ、そのとおりじゃ」
「それにしても、この時期に査察って言うと？」

「そのとおりじゃ、つい先日、エジプトで門が開いた」
「なんですって!?」

「あまり大声をあげるでない」
「わかってるけど」
「それにソロモンが動き出しそうな気配だと特機密文書で知らされたのじゃ、それとクエリアスから経過観察じゃ、思ったよりも順調でよかったものじゃ」
「へぇ〜よかった、それだけで」

「それと、いつでもというときのためにというよりか、ゼウスが個人というより時期として早いんじゃが、議会が手続きを完了ししだい、彼を召喚するつもりじゃ」
「・・・はやすぎじゃないの?こっちに転生して時間まだたってないわよ」
「そのために与えた能力じゃろ」
「まぁね、時間と空間を操る能力ー創生(テンポール・ゼネ)されし時間(ラル・ディヴォルサ)か・・・」
「そういうことじゃ」

「それと忠告じゃ」
そういうとアマテラスの雰囲気が一変する
「あまり、開放させてはならぬぞ、修正が大変じゃからな、そもそも”部屋”にはいるからないくら童でも手続きが面倒なのじゃ」
「わかってるわよ、なんとかしてるつもりだけど、イレギュラーが現れちゃ意味ないでしょ」

「その件なんじゃが、なにやらあやつらわしらと同じ機器を作り出したみたいじゃぞ」
「・・・・!?どういうことよ」
「それは、こちらの台詞じゃ」

「あまり、状況は、よろしくないということじゃ」

「・・・わかったわ」
「たのむぞ」
そういうとアマテラスがセンスを閉じるのと同時に俺の目が覚める

「・・・！？」
とっさに目が覚める俺

「慌てるでない」
そう俺を制止するアマテラス

「で、何があったんだ？」
「あまり聞かれたくない話があってのしばらく意識を切らしてもらったぞ」
「ふぅ～ん、まぁおれに関係ない話ならいいや～」
「そうじゃ、それでいい」
なにやらアマテラスは、俺のことを気遣ってくれてるようだ

カズキたちと雑談が続いている中

「すまんが、童は帰る」
唐突にアマテラスがそういった

「あらまぁ～ずいぶん早いわね～」
「まぁ、仕事があるからの」
そういうと俺は冷蔵庫にしまっていたものを取り出し

「あぁ～アマテラスさん？」
「呼び捨てでよい」

「あぁ～アマテラス、せっかく来たんだ帰る前にこれ食っていけ」
そういうと俺はさらに一枚の油揚げとうどんを出す

「油揚げじゃと・・・」
アマテラスはよだれをたらしてながら箸を持っている

「何枚あるのじゃ？」
「９枚ぐらい」
今後のことを考えてそういっておく

「おぬし、わかってるではないか」
「？？？」
そういいながらもきつねうどんをがつがつと食べ終わるアマテラス

「ふぃ～食べた食べた・・・なんだか、周りの環境もあってか眠いの～」
「仕事は？」
「眠いわすれたとりあえず寝る、そうだおぬしちこうよれ」
そういうと言われたとおりアマテラスに近寄る

「そこに寝転げよ」
「？？？」
言われたとおり寝る体制になる

「さて、童も一寝するか」
そういうとアマテラスも横になる

「しばし借りるぞ天魔よ」
「？？？別に・・・？」
そういうとアマテラスはなにやら安定したフィールドを張った

その中で俺の頭を尻尾に乗せてくれた

「ほれ、褒美じゃ尻尾枕というよりかこの体制がいいじゃろう、それと意識あるものの目覚めぬようには、させてもらうぞ」
そういうと俺の背中に抱きついてきた

「やはり、背中というものは、あったかいのぉ～」
そういうと後ろからしっかりと抱きついてくるアマテラス
それから3時間後

「ふぁ～よぅ寝た」
そういうと俺を抱きつきから離してくれるアマテラス

「あぁ～俺もよく寝たぜ」
そういうと外の隅っこでなぜか物足りない顔をしているカズキ

「じゃあ、童はこれにて、油揚げうまかったぞ主」
「そりゃよかった」
「それと、相方をはよう直してやれ」
「あぁ、心得た」
「いい返事じゃ」
「それでは、」
「では」
そういうと煙と共に消えていった

「黒～祐～」
なにやら涙がおのカズキ
「なんだよ？」
「純潔奪われてない？」
「下ネタやめい！」

こんな感じが続いているのであった

アマテラスさん参上！後編！＋シリアス（後書き）

感想とかどしどし書いていただけると幸いです。
箇条書きでも結構です。
ほんの些細なことでもいいのでよろしくお願いします。ｂｙ作者

連行・・・された

ある日の学校の帰り

「ねぇねぇ、黒祐君、土曜日”お話”があるから黒祐君の家に行っていい？」

「うん？あぁ、いいぜ」

場面によっては、物騒な単語を堂々と笑顔でいいながらもそういうふうになのはと土曜日の約束を取り付けると

「ちょいとまちや、なのはちゃん、さすがに二人きりは、あかんで！」

はやてが面白い速さでつっこんできた

「そうだよ！なのは、抜け駆けよくない」

フェイトがたぶん壮大に勘違いしていた

「で、フェイトとはやてもくるの？」

「もちろん（だよ）（や）」

で、当日

「ねぇ～黒祐～この服どう～？」

現在、どこから取り出したのかがわからない正体不明なメイド服をきているカズキ

おしげもなくそれをアピールしてくる

「ねぇ～」

俺に馬乗りになるようにアピールしてくる、結構破壊力がある
「え～まぁ、結構にあってるよ」
とりあえず離れてほしい一心でそういうと
「なら、こんなのは、どうなのかな～」
そういうと上のふたつのボタンをはずす

「これならどうかな～」
ただでさえ破壊力が抜群にもかかわらずこの体制に視線の先が谷間に行ってしまい
「どう～？」
けっこうＬＰ（ライフポイント）が削られる
「や、やけに、過激じゃないか・・・」
「黒祐のエッチ」
そう愉しむように笑うカズキ、俺もこの笑顔には勝てない
それから数分後

ピンポーン！玄関のチャイムが鳴り響く

「こんにちわ～」
玄関になのはが入ってきた、その後ろには
「こんにちわ～」
はやてと
「こんにちわ～」
フェイトがいた

「やぁ・・どうも」
最悪のタイミングであの3人が現れた
それもそのはず、だって今のカズキの恰好が、メイド姿で馬乗りなのだ。
何が問題かって？そりゃ

「あっ、どうもお邪魔します、カズキさん」
「こんにちわ～」
なのはとフェイトは、大丈夫なのだが↑それでもデバイス構えてる
「似合いすぎや！馬乗りなんて反則やで！それとこんにちわや～」
はやてにいたっては、順序が逆だったと同時に、絶対なのはとフェイトが心の中でどこかしら持ってた感情を惜しげもなくぶちまけてくれてありがとうといいたい、
それもそうだ
「（グッ）！」×2
だってあのふたり、荷物の裏で親指をはやてに向けてサムズアップしてたんだもん

で、そんなこともありながら

「あぁ～カズキ、この3人部屋に連れていくけどどうする来る？」
「うん？あぁ、お菓子持って行くよ」
そういうと台所に戻るカズキと同時進行でなのはたちを俺の部屋に連れていく

「ほれ、ここが俺の部屋だ、いっとくがなにもないぞ」
そういうと、いつもの俺の部屋に入る

「「「おぉ～・・・？」」」
最初の方は驚いていたのもかかわらず後からなにやら疑問的な感じになる

入って見渡す3人、後からはやてが何かに違和感を感じ聞いてきた
「それにしても、なにもないところやな～なんかフィギュアの一つや二つないのか？」

まぁ、なのはたちがくるから片付けているんだけどね
「そうだよ、なにかぬいぐるみとかないの？」
「なのは、男の子の部屋にぬいぐるみなんて」
なのはの発言に対してフェイトが突っ込みを入れる

「まぁ、フィギュアの一つや二つあるけど、あれは、手作りだからな～」
そうつぶやくと
「「「手作り～！？！」」」
そういうと、３人が驚くから
「見るか？」
試しに聞いてみると
「「「うん」」」
そういうと
パチッ！指ならしをして机の上にフィギュアを出現させる
机の上に現れたのは、某どこかのハイスピードアニメの鈍感王子こと織斑〇夏のＩＳ、白式第２形態雪羅のフルカラーフィギュアが現れた
それにしても、結構な時間をかけたから無駄にレベルが高い

「「「・・・レベルが高い」」」
唖然とする３人
「まぁ、そんな面白いもんもないし、そこいらへんに座ってくれや」
そういうとなのは、フェイト、はやて全員俺のベットすわる。だから、俺は床に座布団しいてそこに座った
「で、用件ってなんなの？」
「あぁ～それなんだけど、リンディさんが管理局に入らないかって言ってきたの」
直接呼び出して言えよ、と思いながら
「なんでいまさら」

そう疑問に思うと、フェイトが一枚の紙を出してくる

「えぇ～と、無理そうならこれを渡してくれっていわれた」
そういうと、その白い紙に目を通す
俺あてのその紙に書かれていることを要約するとこうなる

・極大魔術無許可不正使用および魔力異常保持に関する規定違反
・希少技能審議委員会より、特一級重要人物として保護するという規定
・逆らったら死刑
・断っても死刑
・ちなみに逃げられないよ

たぶんリミッターかけてますっていっても信じてくれないだろう
最後の3つだけ、面白いくらいに脅迫じみていた
「ったくめんどくさいな～」
そういうと頭をなやませる
「で、なのはとフェイトはもう嘱託なんだよな？」
「そうだけど？」
なのはが答えてくれた
「どうするの？」
ある程度管理局の仕組みは理解してた
「ちなみに、試験もあるんだよ」
フェイトがにこやかな顔で言ってた
「あぁ、あとすぐにこないと色々困るんだ」
そういうとなのはたちの顔が引きつる

「・・・ごめんね、逝こうか」
フェイトの悪魔のささやき、確実に決定することは、嫌な気配しか

ない
「というわけで、一名様ご招待や～」
悪ふざけながらも全力で拘束するフェイトとはやて、その後ろでは、
「ｍａｓｔｅｒ，Ｉ　ｓｕｇｇｅｓｔ　ｔｈａｔ　ｙｏｕ　ｔａｋｅ　ｓｏｍｅｏｎｅ　ｗｉｔｈ　ａ　ｓｏｍｅｗｈａｔ　ｒｏｕｇｈ　ｗａｙ（多少荒い手段を使って連行することを提案します）」
となのはの愛機（レイジングハート）がいった。そしてなのはは
「ということだよ、黒祐君」
かわいらしい笑顔と声と共に俺の後頭部にエクセリオンモードのレイジングハートを突き付けるなのは
「（ヤベェ、詰んだ）」
自分の世界に終わりを感じながら
「あのさ、どこに連れていくのさ？」
「「「人目のないところ（（だよ））（や）」」」
「イヤダァァァ！」
と壮大に悲鳴をあげる

で、それから数十分後
「わかった？」
女神の笑顔でささやくのは、フェイト、そして
「試験は、一週間後、勉強すればなんとかなるんだよ」
勝手に予定を決められた

「お菓子持ってきたよ～」
遅いと言わんばかりのタイミングでカズキが現れた
「で、うまくいったのかな？」
まるで全てを知ってたかのようにいうカズキ
それからお菓子を５人で仲良く食べてその日の夕方

「じゃあ、今日は、ありがとうございました」

なのはたちを玄関まで見送る、代表でなのはがお礼を言っていた
そしてドアを開けて3人が帰ろうとした時

「じゃあ、逝こうか」
字が違ういいかたでこっちをにこやかな顔で見てくるフェイト
そして、バインドでぐるぐる巻きにされる

「カズキさん、一週間お借りします」
「あぁ、試験対策ね、どうぞ～」
そういうとフェイトも満面の笑みで
「ありがとうございま～す」
なのはがおじぎをする、そして
「逝こうか？」
「嫌ァッァァァ！」
当たり一帯に悲鳴がこだました
「駄目だよ黒祐君、悲鳴を上げちゃ」
なのはがレイジングハートを躊躇いもなく俺の口に突っ込む
もちろん、こんな光景周りの人から見えない
「（人生詰んだ）」

その日の夜のこと
「あのさ、別に一週間休みなのは、わかってるけどさ」
「どうかしたんか黒祐君？」
はやてが聞き返してくる
「なんで、誰もいないの？」
「あぁ～リンディさん一週間帰ってこないよ、しかも、このマンションいい忘れたけど、好きな部屋使えるし」
なにやらこのマンション管理局が買い取ったらしい、そして、このマンションの一室はフェイト専用部屋なわけで誰も立ち入ることができない。

一室丸々だから、キッチンやトイレ、お風呂、すべて完備してある。
そのうえ、料理が得意なはやてもいる（↑食事は、万全）し、俺も料理得意だし、しかも、家事万能のなのはもいる（↑洗濯・掃除の問題がない）。つまり、現在俺は、フェイトとなのはとはやてに監禁されてるといってもいい状態
ちなみにフェイトは、先生だ
「なんで監禁されてるの？俺逃げないよ？」
「せっかくやしね～」
なにやらはやてが企んでるらしい
「けど、一つ屋根の下に男女が一緒に住むのって・・・傍から見たら犯罪だよね、俺だって男だし、襲っちゃうかもよ？」
「大丈夫だよ黒祐君、黒祐君が私たちを襲うわけないじゃん」
となのはがいう、それと同時にむなしさが心にたまる
「それよりも、私たちが「「なのは（ちゃん）ストーップ！」」ふぇ？」
はやてとフェイトに思いっきり止められる、
「（何いおうとしたのかな、なのは？）」
なんにも考えてない主人公↑さりげない色々な危機
そんな中
「なのはちゃ～ん、あんまりいっちゃいけないこともあるんやで～」
「そうだよなのは、落ち着こうか」

その夜
「そういうことかぁぁぁぁぁ！」
危機にようやく気づいた主人公
「少しおちつけぇぇぇ！」
その夜、彼女達はバインドでぐるぐる巻きにされたとさ

管理局筆記試験と昼飯！（前書き）

黒祐「おい作者！」
黄昏「なんだ？」
黒祐「いうことがあるだろ？」
黄昏「そうだね～」

カズキ「さぁ、記念すべき第５０話！さぁ、景気よくいってみよー！」

黄昏・黒祐「してやられたー！！！」
壮大にセリフをとられたのであった

管理局筆記試験と昼飯！

そして、試験当日
「・・・じゃあ行ってくる」
「「いってらっしゃい」」
そしてここは、試験会場である。
そして、筆記試験が始まる直前・・・
「黒祐君！」念話でフェイトが話しかけてきた。
「満点じゃなかったら・・・あの世にＧＯだからね・・・」
念話越しでもフェイトの怖さが伝わってくる

「・・・善処する。」
としか言えなかった
そして、試験官がやってきた
「あっ！シャマルさん、こんにちわ！」
「こんにちわ」
「これから筆記試験始めますのでデバイスさん達は、控え室で待っててね」
「「わかりました」」
「がんばってね！黒祐」最初にカズキがそう言って
「ファイトですマスター！」ブラックが言った。

「不正は、しないで下さいよ」シャマルが言った
「わかってますよ」
「試験開始！」シャマルが試験を開始した
問題を見ると何処もフェイトとやったところばかりだった
なので
スラスラスラ～！
自分でもびっくりするくらい早く解けた

そして、４０分後・・・

「はい、終了～」
ふぅ～
ちょうど時間がたち、試験が終わった

俺は、試験が終わって少しほっとし、昼飯を食べようとした時

「昼飯・・・アレ？」
回りを探してみると用意したはずの昼飯がなかった

「・・・ない」
この後、実技試験だというのに、これはかなりキツイ
そう思いながら、アースラの屋上から出ようとした時

ボフッン！
突然視界が真っ暗になったと思ったら顔になにやら、やわらかいものが当たり

ギュ～！
なにかに抱きつかれた

この感触と落ち着くにおい、もうさんざんあったので慣れてしまったのだが
こんなことをするのは、世界が１８０。ひっくり返らない限りあいつだけだ

「おつかれ～黒祐～！」

俺のユニゾンデバイスでありながら、俺本人もその姿に驚いた、超スーパーウルトラナイスバディなねーちゃんことカズキだった

「おい、抱きつくのやめい」
「ご褒美だよ～」
「なんの？」
「筆記試験満点おめでと～」
どうやら、待ちきれなくなって結果を盗み取りしたらしい

「おぉ～満点だったんだ～」
当然？の結果にそんな驚かない俺
スリスリ～

猫のように抱きついてくるカズキ
「で、昼飯は？」
当然のごとくカズキのほっぺにはご飯粒がついていた
そしていえることは確信犯だ

「ご飯～作ってきたよ～」
というとカズキの背中から重箱が出てきた
「・・・作ったの？」
俺は世界が終わったような顔をするが
「その世界終わりました的な顔って何なのよ？」
カズキがムスッとした
「いや、カズキ料理できたの？」
「・・・まぁね」
その3秒くらいの間が気になるところだが

・　・　・

グルルル！おなかが減った
「とりあえず食べよっか」
というと重箱のふたを開ける

仰天びっくり、色々なおいしそうな弁当が出てきた
「さすが～」
あまりのすごさに驚く俺
「どうやってやったの？」
「あぁ～調べて作った」
「へぇ～」
さすがやれば出来るカズキさんというか、もう全てにおいて完璧になったよね、もう、完成（ジ・エンド）並だよねとも思った

そう思いながら、カズキの手作り弁当を食べ終わり

「それにしても、上手かった」
俺は食べ終わり、アースラの屋上もとい一番見晴らしの良いところで寝てる
＊今、アースラは鳴海市上空で待機中なのだ

「スピ～スピ～」
隣には普通の人とは変わらない姿のカズキが寝ている
この姿を見てるとユニゾンデバイスじゃなく自分より少し年の高いお姉さん的な普通の女の子だ
「（こんな平和がいつまで続くんだろうな・・・）」
と思ってると
「黒祐～」
寝ぼけているカズキが
ガシッ！

俺の脚に絡み付いてきた
「（ちょ、カズキ！）」
寝ているので声が上げられない
「スピ～スピ～」
相変わらず、故意か故意じゃないかの判断が難しいところだ
それから数分後

「あれっ？黒祐～」
ドサッ
寝ぼけながら起きてるカズキが抱きついてくる、もはや日常茶飯事なことだ
「な～」
猫のような声を上げるカズキ

「おはよう」
「おはよ～」
相変わらず寝ぼけていた

「あぁ～そういや、そろそろ時間だな」
「あっ、実技試験だったよね？」
「あぁ」
「相手は？」
「わからない」
「調べる？」
カズキお得意のハッキングで情報を知るというばれたら犯罪級の行為

「いいや、つまらなくなるからな、大丈夫だ」
そういうと俺はカズキから離れようとすると

チュッ！

ほっぺにキスされた

「いってらっしゃい」

カズキの太陽のような笑顔に見送られ、若干顔を赤くしながら、俺は実技試験の会場に向かった

管理局筆記試験と昼飯！（後書き）

ここまで読んでいただけた人もそうでない人も、作者のｔａｓｏｇａｒｅｍｏｎｏです。いや～なんやかんやあってもう５０まで来ました。全ての人にこの上ない感謝を申し上げます。本当にありがとうございま。これからも、ほのぼのと書いてゆきます。これからもこのシリーズをよろしくお願いいたしします。

実技試験！やりすぎ注意警報発令！

「あぁ～聞こえているか？」
「あぁ、クロノか」
観測室の上の方に取り付けてあるスピーカーから声が聞こえた
「そうだ、今回は、実技試験だ」
「へぇ～ってことは、」
「まぁ、そういうことだ」
そういってると
ズガガガガガン！音を立てて天井の壁が崩れた
そこから、白い魔王と赤い特徴的なバリアジャケットの魔術師が現れた

「っ！聞いてないぞ！試験中止ｄジャキィィン！「ごめんね、クロノ」」
刹那の瞬間、クロノの喉元にバルディッシュを突きつけているフェイトが観測室にいた

「第二試験、実技試験だよね、相手は私と」
「俺だ」
第２試験の相手はなのはとヴィータだった
俺は、クロノにこう告げる

「実技試験だったよな、なら別に彼女たち（アレ）を倒してしまって、構わないだろ？」
とアーチャーの決め台詞を言った。
「壮大な死亡フラグだな、まぁいい、実技試験　はじめ！」

かっこいい台詞を言ったのかどうかわからんが、クロノの鼻辺りにうっすらと血筋が見えたので台無しだった

「そうか、なら全力で相手をすることにしよう」
『ＯＫ、ｍａｓｔｅｒ　Ｓｅｔ　ｕｐ！』
ギュッォッォン！魔力が回りに渦巻き
そういうといつもどおりバリアジャケットが赤原礼装になる

「黒祐君、全力全開で行くよ」
「俺も、手加減すると思うなよ」
既に臨戦態勢のなのはとヴィータ
「こいよ」
そういうと

「うなれ！グラーフアウゼン！」
そういうとヴィータが鉄槌（グラーフアイゼン）を振り回してくる

「ウラァァァァ！」
ブンッ！俺の横をそれが掠めるが

「全て、切り伏せるのみだ！」
静かに、しかし圧倒的な威圧感を持って言う
そういうとヴィータめがけて

「風車（かざぐるま）！」
現れた火車切り広光でヴィータに斬り上げを放つ

「っ！アイゼン！シールド！」
ガキィィィン！瞬時にシールドを展開する
「お疲れ！広光！」

そういうと広光がしまわれ、メサイヤが現れた

バシュッ！

瞬時に直感的にヴィータとの距離を開けた

「ディバインバスター！」

そういうとなのはのシンプルながら高威力の攻撃魔法が俺に向けて放たれるが

「来なさい、その総てを打ち砕く！ハァァァァ！」

そういうと魔力が召還したメサイヤに流れていく

ギュォォォォン！ある程度溜め込んだ魔力がついにもれはじめる

・　・　・

「竜王の殺息（ドラゴンブレス）！」

ギュゴッォォォォォン！なのはのディバインバスターに対して大きさがやく5倍はある砲撃が放たれた

「ふえっ！？」

まさかの大きさにとまどうなのは

ズドォォォォン！なのはに直撃するものの

「その程度じゃねえだろう？」俺はなのはにいうと直後後ろから

「ただで済むと思うなよぉぉぉ！ラケーテンハンマー！」

ヴィータがアイゼンをぶん回してくる

「シールド」

なにも感情をこめずに言うと攻撃がとまる

「グッ・・・！」

悔しがるヴィータ、次の瞬間

「さぁ開幕といこうか！」

俺はなのはとヴィータに向けてそういうと

「天の鎖（エルキドゥ）よ！」

ジャラジャラジャラ！

そういうとなのはとヴィータの四肢に鎖が巻かれ

ズガッ！ボガッ！空間が裂け赤い空間が現れ、その中から大量の魔力弾と武器の構成編隊が現れ

「神の財宝（ゲート　オブ　バビロン）！」

ズガガガガガ！第一波が二人に発射される

だが、二人ともプロテクションで防いだ

「さぁ、舞うがいい！」

そういうと全てなくなった空間から一本の剣が現れる

「約束された勝利の乖離剣（エクスカリバー）！」

その剣は豪華な黄金の装飾が施された極光の剣だ

それが魔力を溜めるにつれ光りだしていく

「力とはこう言う物だ！天地、乖離する勝利の剣（エクスカリバー）！」

ズゴォォォォォォォン！天地を飲み込むほど巨大な光が二人をを襲う

ギュォォォォォン！

当たりいったいを焦土と化すほど馬鹿でかい魔力がなのはを襲う、

それとともに舞い上がる砂煙

「この剣は幾多の世界を破った神の息吹。俺の手に負えるモノではないかな」

そういうと後ろには魔力ダメージでぶっとんだなのはとヴィータがいた。

それから休憩＋なのはとヴィータの回復の後

ピコーン！

クロノがつうしんを入れてきた

「あぁ、クロノどうかしたのか？」

「どうもこうもないだろ、試験結果の通知だ。まぁ結果はわかってると思うがな」

そういうと手元にあった書類を読み上げる

「神纏黒祐、通常保有魔力ランクS、あぁ、君の場合はこれがリミッターつけてのランクだ」

とクロノが言うと

「なんやて！？どういうことやクロノ君？」

「どうもこうもないさ、彼自身もはや管理局史上最高ランクの魔導師（ギ）（マ）だ」

「なん・・・やと・・・」

驚愕するはやてに

「クロノ？その結果本当なの？」
疑問に思うフェイト
「あぁ、本当だ、いや、これはフェイトすまんが後でデータの解析を頼む」
「えっ？クロノどういうこと？」
「あまりの数値に計器が壊れたんだ」
「それってもしかして測定不能？」
「あぁ、そうなるな」
その事実に戦慄するなのはとフェイト

「で、話は戻すが結果はどうなんだ？」
「あぁ、筆記試験、実技試験ともに、今までの最高ランクだ」
「ってことは、合格ってことだな？」
「あぁそうなるな」
「うっしゃー！」
俺は天高く拳を突き上げる

「で、問題の階級なんだが…」
クロノがなにやら納得いかない顔をする
「あぁ、君には正式入局の際、一等佐官の地位が与えられた」
「・・・どうして？」
本来ありえないことだ、管理局でもせいぜい三等尉官だ、だがここにきて一等佐官だ
「まさにイレギュラーだよ、なんで君に佐官なんて与えられたのか僕も不思議だよ」
クロノがそういうのも無理ないだろう、クロノもせいぜい尉官なのだ
「まぁ、こんなことを気にしてるひまもないだろう、それに僕も仕事なのでな」

そういうと
「まぁ、せいぜい頑張ってくれよな、現嘱託魔導師さん」
皮肉ったらしいセリフを残して通信を切るクロノであった

その後

「そやな～まぁ、いいたいことは、山ほどあるんやけど？」
「そうだね～私もだよはやて」
何かを共謀するはやてとフェイト
そして、背筋に悪寒が走る
「ごめんな～せっかく楽しいところやけど、まぁ、これも償いやと思って」
「そうだよ黒祐」

「・・・あの～なんでしょうか？はやて様とフェイト様～」
事情が分からない俺
「あら～目下に敬語やなんてそんな緊張しなくてもいいで～ただ、ちょっぴりチクッとするで」
「そうだよちょっぴりチクッとするだけだよ黒祐」
そして、俺が二人に目をやると

「（キイィィィヤァァァァァァ！）」
チート魔導師でも心なしか絶叫してしまう。なぜかというと二人とも怒りを通り越してニコニコ顔で怒っている。あの二人の背後には魔力が怒りとなって無尽蔵に噴出していた。

・　・　・

「逃げるっ！」

「させ（ない）（へんで）！」
俺が逃げようとしたときには、はやてのブラディダガーが周りにあり
「逃げられないよ黒祐」
フェイトが自慢のはやさを使って俺に抱きついてた

「カズキの姉さんから聞いてるで、どうやら、色仕掛けに弱いらしいな～黒祐は」
まるでおもちゃで遊ぶかの如く俺を見てくるはやて

「それにしても、こんなんで止まるなんてね～」
状況は最悪であり

「んじゃあ、模擬戦（リンチ・お仕置き）やろか？」
「そうだね、黒祐つよいんだし、２対１でやろうか模擬戦（ＯＨＡＮＡＳＩ）」
模擬戦どころかはやてにいたってはかなり読み方が間違っていた

チラッ
はやての方に視線をやると
ズォォォォォォン！↑実際にはこんな効果音はないがはやての背後には、魔力が突然変異し龍になっていた
一方フェイトは
ゴォォォォン！↑前述のとおりだが、龍ではなくトラになってた

「「さぁ、覚悟はええな（いいね）！？思う存分模擬戦（ＯＨＡＮＡＳＩ）しよか（しようか）？」」

それから数分後

「イッヤァァァァァァ！」

管理局全体に黒祐の悲鳴がこだました

某天界に存在したとある特務機関（神様の本拠地）にてｐａｒｔ１

俺の嘱託生活が始まって２ヶ月がたった頃である

「・・・あぁ～暇だ」

管理局に入ったら書類の仕事がたくさん増えた。が、カズキのチート能力使うとすぐ終わってしまう。故にこのような暇な時間ができる

「だね～黒祐～」

当然のことながら、見ているというかどこのだれが見ようと若干イラつくレベルでいちゃついてる黒祐とカズキ

「なぁんか、面白いこと起こらないかな～？」

どこぞの部長みたいな言葉をいう俺、そんなこと言おうものなら某下っ端が全力で阻止しにくるだろう

そんな風にカズキと二人寄り添って寝ているとｐｒｒｒ！ｐｒｒｒ！

携帯が鳴った

「誰だ？」

そう言いながらも携帯に出ると

「もしもし～」

「あぁ、俺だ兄貴だ」

あの面倒な神様もとい兄貴から電話

「あのさ～ちょいと面倒なことになったんだよ」

「どういうことっすか？」

「来ればわかる」

そういうと電話を切る神様

「誰から？」

「神様から」
「へぇ～用件は？」
「それが分かれば苦労しない」
そういいながら不思議がりながら定番の中庭に向かってゲートを探
そうとしていると

「・・・」
ゴォォォォン
俺の玄関になにやら超絶怪しい黒い渦が出来ていた
その中から薄っぺらい紙切れが飛ばされてきた

”とりあえずその中に入れば来れる”

思いっきり信用に足りなかった
そう思いながらも行動する俺

「まぁいいか、とりあえず行ってくる」
「いってらっしゃい～」
そういうと俺はその渦の中を進んでいく

「まさにカオス」
そう思いながら進んでいくと

「やぁ」
ものすごい暗い顔をした神様だった

「で、兄貴どうして俺が呼ばれたんだ？」
「私もわからない」
「神だよね？」
「そうだ」

「なんで？」
「色々あるんだよ・・・」
これぱっかりはという顔だった

「で、どうしてなんだ？」
「まぁいろいろ合わせたいというか合わせなければならない人がいるからな」
そういうと兄貴はなにやらコートを纏って歩き出した

「なんか、某使徒と戦うところみたいだな～」
「まぁな」
某特務機関並みの施設だった
「誰の趣味だよ」
「最高神ゼウスだ」
ギリシャ神話の最高神がオタだった
「ちなみに、赤い海はないよな？」
「聞くな」

（・ω・、）・・・

「そんな顔をするな」
「やってみただけだ」
そういいながらもその施設を進んでいくと大きな広い部屋に出た

「あんた何やってんの？」
神様がつっこむのも無理ないだろう
そこには、碇ゲンドウもとい最高神ゼウスがあのポーズでこっちをじーっと見て座っていた

「（天界・・・オワタ）」

そういうと最高神様が口をあける
「やぁ、神纏黒祐君」
「どうも」
頭を下げる俺
「あぁ、君は下がってくれ、クエリアス神議官」
「了解しました、ゼウス最高司令」
そういうと兄貴が部屋の外に出ていく
・
・
・
「今、天界は大変なことになってる」
「どういうことですか？」
「あるものが地下より見つかった、我々最高神でも悔しいながら把握できなかったものだ、そして、つい先日それが暴走というよりなにかを求め始めた」
「なんでですか？」
・
・
・
少しの沈黙
「君だよ」
俺はなにもさっぱり理解できなかった
「当事者として君に見せないといけないから」
そういうとゼウスはなにやら机からカードを持ちだした。
「ゼウス様、それを持ち出して構わないのですか？」側近の天使がそう言った
「かまわない」

そういうと近くにあったなにやら電話のようなもので指示をだすゼウス

「ドグマTを解放しろ、彼を接触させる、全課にR計画を発動させる必要な機器と宝具の準備を始めろ」
そういうと俺の前に立ちゼウス

「ゆくぞ」
俺はゼウスの後について行き始めた

「あの、一つ聞いていいですか？」
「なんだ？」
「ここどこですか？」
「オリンポス山とでもいいかな」
架空の存在の山だ
「この施設は最高神や神たちが様々な職務を行うところだ」
「はぁ」
規模の大きさにかなり驚く

「メインシステムは、システムG６６６というコンピューターを使っている」
「へぇ～」
「ちなみに、これでも元々は人間を管理していた」
「それ言っていいんですか？」
「ここまできたら言わないわけにもいかないだろう」
「はぁ、さっき元々はっていいましたよね」
「あぁそれが？」
「今はどうなんですか？」
「手作業だ」
「何があったんですか？」

「戦争を起こした」
「それっすか」
「あぁ」
なにやら神妙な顔持ちになるゼウス
「施設拡張のため掘っていたら、先日地下開発部が不明な空洞を見つけてなその入り口がな」

パチッ！

ピカッ！電気が灯される

「ここだ」
地下を進んでいき光が見え見渡すとそこには、ジオフロント並みの大きな空洞があった。

「（デカイ・・・なんちゅう馬鹿でかい規模だよ」

その真ん中には柱が並べてあり、まごう事なきアケロンがあった
遠くからでわからないがアケロンの真ん中になにか構造物が建っていた
「これ作ったんすか？」
「いや、作ってない」
「ってことは」
「正真正銘、本物だ」
ゼウスでさえつかめていない真実に驚愕する俺

「旧神が基礎を作ったのかわからないがそれにしても、ここまでの規模は大きすぎるし、我々でも作れないレベルだ」
なにもわかっていないという顔をするゼウス

「さて、いくぞ」
そう言いながら歩いて行くと
・
・　・
・

近づくにつれアケロンの大きさが伝わってくる。まわりには、まるで聖域みたいな雰囲気だった
しかし、アケロンの柱だけは血で染められたのかごとく赤かった
アケロンの真ん中近づくにつれ大きな巨大な紅い十字架があらわれる

「人・・・？」
今見ているのに衝撃を受けた

「いや、E天使ナンバー2、最古の天使ともいわれ、名前はリリスだ、そして神獄を司ったもと悪魔でもある」
その十字架に目をやるとそこにいたのは、仮面をかぶった黒い長い髪と両手に槍が突き立てられぐったりとしている女性がいた

「これがリリス」

「あぁ、古代というか旧神がそれを隠したといわれている物だ
確かにこれほどのものを使ってるとなると相当なものだろう。十字架のいたるところになにやら紋章や魔方陣が書かれていた
違和感があるのはなぜ仮面をかぶっているのかということだ
「あの仮面はなんですか？」

「あぁ、あれは書物によると拘束具のようなものだ。どうせ旧神たちがつけたものだろう、我々新神にとってははずすのくらいたやすいさ」

ゼウスがなにやら天使に告げたようだ
ビィィィン！ビィィィン！けたたましい警戒音が鳴り響く

「第1から第2までの術式を展開！」
「エネルギー数値、観測開始、以上ありません」
「Gフィールド固定問題なし」
「全柱、ともに正常起動」
「接触者の精神安定を確認」

そうけたたましく、天使が作業を始めている
それから数分後、ようやく仮面がはずされた

仮面をはずすとまごうことなくそれはかわいらしい普通の女の子だった
なぜか彼女に親近感を覚える

「驚いたな」
ゼウスがそういうと
「本来、今までの事象から仮面を外すと暴走するんだがな」
そういいながらもなにやら合図をだす

「さて、こっからは君の仕事だ」
そういうとゼウスは俺の隣から消え、周りの天使たちも同様に消えた

「えっ！ちょっと！？」
もはや理由を聞く余地もなかった

リア充の階段と姉妹とアケロン！

「・・・なんでなんだよ」
何が起こったのか検討もつかず

「取り残されたのか」
出方も入り方もわからないところでただ一人というよりか、まるで
滅菌室に閉じ込められたような感じだ、
背後には赤い十字架に磔けられた女の人だけ

ずっと立っていたがやることもないので俺は紅い十字架に寄り添い
ながら座っていると

・・・

『聞こえてるかしら？』

・・・

唐突に声が聞こえた
「えっ、どこ？」
立ち上がり周りを見上げるが、周りには熱源一つない
『聞こえてるみたいわね、よかったぁ～話せる人がいて』
「どこなんだよ！？」
驚きつつも聞き返す
『いまからそっちに向かうわね』

声がそう聞こえ

ゴォォォ

落ち着いてくる

バタッ！やさしく押し倒され俺の胸元に顔をうずめながら笑顔で現在も抱きついているリリス

「ウフフ、久しぶりねこの感触」

やさしい落ち着く声で言ってくるリリス

その間もしきりに体の感触を確かめるかのように触れてきている

「しばらくね・・・」

そういいながら俺の胸で寝始めるリリス

・　・　・

ドキッドキッドキッ

美女が俺の胸で寝ているということに対して心拍数が上がる

それから数分後

「う～ん、ふぁ～よく寝た～」

目を覚ますリリス

「ドキドキしてたでしょ」

「っ！」

正直に言おうとしたが矢継ぎ早に彼女が次の言葉をいった

「気にしなくていいのよ、普通のことだから」

そういいながら俺の顔にリリスのかわいらしい顔が近づいてくる

「あなたは何も言わなくていいのよ」

そういいながら、俺の首周りに両腕を絡めてくる。近づいてくる顔

は妙に熱っぽい
なにやら怪しい雰囲気になる
・
・
・
チュッ！
リリスと顔が近づいていると思ったら、俺の顔を撫で回すように見て、次の瞬間、お互いの唇が重なった
「ンッ！」
少し息が苦しい
そういいながらも、まるで夢を見てるのかという笑顔で俺の口内に舌を進入させ、徹底的に絡み合わせているリリス
突然のことすぎて、自分でも今の状況が理解できなくなる。そして、だんだん気持ちよくなってきてしまっている
自然と焦点が合わなくなってきた
「・・・ン（ダメだ、切れる・・・）」
スゥ～
眠るように意識が切れた
・
・
・
「・・・ンッ」
気づいたときにはお互いに口の中をを犯しあっていた

そんな感じで数分後

「ぷはぁ・・・」
「はぁはぁ・・・」
おたがい抱き合っている。そして、顔が熱っぽい二人

「名前は？」
俺は気になったことを聞いた
「私は、フェリスよ」
「フェリスか」
「よろしくね、黒祐」
「あぁ」
抱きついてくるフェリスであった

ゼウスｓｉｄｅ

「観測はどうだ？」
現在、ゼウスはアケロンを見渡せるなにやらいろいろなモニターが並べられている指令室なところで座っていた

「エネルギー数値共に正常です」
「結界の展開を確認」
正常な状態のまま事が進んでいるみたいだ

「接触者、十字架によっかかって座りました」
「反応なしか」
そう思いながら座っているゼウス

ビィィィィン！ビィィイン！けたたましくアラームを告げる機器

「アケロンに高エネルギー反応、神力です」

「なに！？ここに来てだと！？」

使いの側近が言う

「どうするんだ、ゼウス？」

クエリアスが聞いてくる、状況は芳しくないようだ

「問題ないと思いたいところだ」

そう思いながら冷静にそのいすに座っているクエリアス

「対象が接触・・・おかしいです！？原型を保ってます」

明らかな数値の変動で動揺するオペレーターたち

「接触者が対象とのフィールドを・・・エッ！？対象が接触者の胸で寝てます」

「・・・シナリオ通りじゃない、何が起こるんだ？そして、何者だ、彼は」

若干焦りが見えるゼウス

それから数分後

「対象が再び行動を開始しました」

若干冷静になるオペレーターたち

「きました！数値に変動！エネルギーが周りからあふれてきています！」

「対象が接触者を侵食をを始めています」

画面すべてがエラーや異常事態で赤く染まる

「いかん！接触者に干渉、接触者の意識を切れ」

そう指示するゼウスだが

「ダメです！意識深度１２０％です！干渉を受け付けてくれません！」
「なんだと！それじゃあ、彼が人間として保てなくなる！なんとしてでも意識を切るんだ」
「内部より超高圧エネルギー反応！パターンＧ！神力の仕業です！」
「なに！生成されただと！」
もはやてんやわんやの状態だ
「対象者！意識が切れます！」
ブツゥゥゥン！何かが切れる音がする
「対象、意識反応・・・停止しました」
「なん・・・だと・・・」
不足の事態にもはや絶望しかけているゼウス
うなだれるオペレーターや研究者達
そんななか
「深度マイナス！逆侵食も始まりました！」
オペレーターが計器をみながら伝える
「そんな！一体何が起こり始めたんだ！？」
目の前の光の聖域からは光が放たれてて、モニター越しでないと見ていられない状況だ
「接触者の精神安定を確認・・・！レベルが上がってます！」
「レベルは！」
「計測不能です」

「なにがおこってるんだ？」
クエリアスがついに口を開いた
「わかりません！」
そういいながら計器を見ていると
「周囲のエネルギー反応、低下してます！今なら突入できます！」
「俺が行く！クエリアス！後は任せた！」
そういうと雷の速さで部屋をでるゼウスだった

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「（なんか、背中と頭あたりに違和感があるな）」
あれからそう思っていると
「大丈夫か？」
ゼウスがやってきた
「どうしたんですか？」
「いや、君が生きているか確認しにきただけだ」
「はぁ・・・」
「まぁ、生きてるみたいだな、よかった」
「どうかしたんですか？」
「いいや、なんでもない」
「リリスは？」
「エッ？あぁ、そこいら辺にいると思いますよ」
そう思いながら見渡していると

「エイッ！」
「のわぁっ！」
相変わらず甘えてくるのだった

「ここにいました」
「・・・バカな」
なにやら神妙な面持ちのゼウス
「事がすんでよかった、クエリアスに案内を頼んでいるから帰るといい、それと世話よろしくな」
そういいながら先に歩いていくゼウス

・
・
・

「ハッ？」
「不思議な顔をしてどうかしたか？」
「俺がなんで世話するんすか？」
「みたところべっとりじゃないか」
俺の首周りに手をまわしてひたすら俺の首筋を舐めたり噛んだりしているフェリス
「まぁ、そうみたいっすけど、カズキがいるじゃないっすか」
「いや、そこんところは大丈夫なんだ、まかせろ」
しっかりゲンドウ風が板についているゼウスであった

よくわからないので俺らも帰ることにした

それから家に帰ると
「く～ろ～！」
修羅並みのカズキが怒り立っていた

「隣にいる女の人誰？」
「紹介するというか、説明したほうが良いかな？」

～説明中～

「またしでかしたか」
なにやらゼウスに対して呆れたような顔で言ってくるカズキ
「そのこって、アケロンの封印エリアにいたんでしょ」
「あぁ」
「それで襲われたと」
「あぁ」
「・・・ってことは私の双子ね」

「・・・どゆこと？」
「彼女は、私の双子の姉よ」

・　・　・

「ハッ？」
「ハッ？じゃないわよ！顔を見た時思ったけどまさかね、ご本人様登場だなんてね」
驚天動地レベルの話じゃなかった

「もう、黒祐って危ないんだから～」
そういうと馬乗りになってくるカズキ

「お仕置きです！」
顔が修羅なのか、それともいじめたがっているのかよくわからないが
「エッ！おしおきっすか！？」

「そうだよ」
「嫌だぁぁぁ！」
俺は必死に抵抗したものの、カズキの前になすすべがなかった
そして黒祐のリア充さがまた増えたとさ

その日の夕方

「カズキ～フェリス～ごはんだぞ～」
今日の夕飯当番は、俺、ちなみに今日はフランス料理のフルコースだ
「「は～い」」
カズキとフェリスが相変わらずのラフ姿でやってくる

「・・・なんで」
あいかわらず、反則的な格好の二人、カズキは黒のタンクトップにTシャツというラフ姿、胸元のＫＡというイニシャルが思いっきり横に伸びていた、そして、フェリスも同じようにＦＥが横に伸びていた

「いいじゃない～らくなんだし～家だし～」
「そうだよ、黒祐～」
二人とも胸元やくびれが強調されている姿だった

そして俺は思う
「（・・・もういいや）」
内心、今日の理性メーターのことを考えながら夕食を食べるのであった

短編　その夜のこと（前書き）

夜のテンションっておかしいよね・・・　ｂｙ作者

短編　その夜のこと

そして、その日の夜
「ふぃ～疲れた」管理局からの大量の書類も片付け終わった頃には
既に夜の１０時を回っていた

「（んじゃあ、風呂でも入るか）」
そう思いながら脱衣所に向かう

「（さてと、カズキ達にばれないようにというか、襲われないうちに入ってしまおうかな）」
そういうと服を脱ぎ

ガララララッラ～脱衣所の扉を開けても悲鳴は上がらない
「（よし、問題ないな）」
シャワワワワワ～
そう言いながらシャワーを浴びる

「（ふぃ～）」ちょうどいい暖かさの湯
ちなみに、この家のお風呂は結構な大きさであり、温泉一つ分の大きさがある
どんぐらいかと言うと、１０人入ってもまだゆったりとできるスペースがある
これもカズキのおかげである

「やっぱり、きもちいいやぁ～」
風呂は露天風呂な感じで満月や星明りが風呂を照らしている

風呂に入ってると

・・・

ガラガラガラ・・・！

「（まさか！）」

そうこの家には現在3人、俺とカズキとフェリスだけだ、そうなると入ってきたのは必然的にあの二人

「「おっ邪魔しま～す！」」

最悪な展開だった

「（なんで俺が気持よく入ってるのに！）」

そう、カズキ姉妹？が俺の風呂タイムに乱入してきたのだ

「なんでなんだよ」

「別にいいじゃない～黒祐なんだし」

そういうカズキ

「それとも、いやらしいことでも考えてたのかな～？」

「黒祐なんだし～じゃない！」

「まぁまぁ～」

そういうとカズキとフェリスが俺の近くまでやってきて俺の両手をふさぎ

「一緒に入ろうね～」

「ね～」

いたずらしてきた

「（ヤバイヤバイ、マジヤバイ、煩悩退散煩悩退散南妙法蓮華経悪霊退散、ヤバイヤバイ、マジヤバイ）」

とりあえず理性の鎖メーターがヤバイ、ほんとうにマジでヤバイなぜかって?そんなの簡単だ、まず第1にカズキとフェリスは二人とも誰でもたぶんこの世界のトップモデルでもうらやむようなナイスボディの姉ちゃんたちなのである、そして、二つ目にお風呂である＝バスタオル一枚である　＝思春期の男の子にとっては耐え難いのである

「黒祐～」

「黒ちゃん～」

あいかわらず俺にすり寄ってきてる、そして豊満な胸とかその他もろもろがあたってる、そして

「あっ」

ハラリ…二人の最後の砦がもろくも崩れ去り

俺は自分の最後を感じた

・・・

それから数分後

「・・・うぅ」

それから、二人に散々いじめられ床に仰向け状態で横たわる黒祐であった

何が起こったかはお察し下さい・・・

後日談を彼はこう語った

「俺は今ちょっぴり危ない風呂を体験した、

い…いや…体験したというよりはまったく俺の理解を超えていたのだが……

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

おれは一人で風呂に入ってた、思ったらいつのまにか倒れていた

な…何を言ってるのかわからねーと思うがおれも何がおこったのかわからなかった

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか生理だとか体が熱くなるとか　そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

異生物との戦い・・・

俺ｓｉｄｅ

俺がいつもの訓練が終わりゆっくりしようとしていた頃・・・

ｐｒｒｒ！俺に通信が入る
「黒祐いるか？」
クロノの声がした
「なんだ？」あぁ～まためんどいことだろうなと思い怒りながら出る俺
「それより、何で怒ってる？」
「今からくつろごうとしていたときキサマが通信してきたからだろ」
「それは、すまない」
「それより用件は、何だ」
「あぁ、第３８管理世界で謎の生物がかなり暴れてるらしい。」
「何体くらいいる？」
「数が多すぎてわからない」
「オイオイ、いすぎだろ」
「あぁ、」
「まぁいいや、暇だしすぐ向かう」
「すまない」
そういって、俺は通信を切った

「カズキ、いけるか？」
「いけるわよ！」
「「座標軸固定！転送開始！」」
シュゥン！

第３８世界　アフターファーム
ここは、草原や牧場などがある豊かな世界である

「ここだな」
「みたいわね」
見渡す限り人型の黒い生物が地面を覆ってる

「なんつぅレベルなんだよ」
「だよね～」
目の前の光景にうんざりしながら二人でそんな風に言ってる
『マスターどうしますか？』
「まぁ、やるしかないだろう」
『了解、Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ！』
そういうと二人の周りに黒い魔力が満ち始め、カズキは刺激的な黒いドレス姿、俺はいつも通り赤原礼装（黒）を纏った姿になった

「とりあえず手始めに、メサイヤ！」
そういうと魔方陣の中からメサイヤが現れ、一気に敵めがけて急降下し

「忌剣一炎月！」
そういうとメサイヤから炎が燃え上がり
ズシャァァァン！

一気に黒い生物が燃え上がり消えるが

ヌォォォォォォン！不気味な音とともにまたあらわれる

「対象外か・・・なら！」

そういうと右足元に一本の剣が現れる

「これならどうかな・・・」

あらわれたのは定番の約束（エクス）された勝利（カリ）の剣（バー）

「ハァァァァァ！」

魔力が一気に黄金の光へ変換され

「約束（エクス…）された勝利（カリ）の剣（バー）！」

ギュォォォォン！黄金の光が黒い生物たちを切り裂くが

「・・・きりがねぇ」

またも増える生物

「どうしましょうかね」

そう考えながら、そろそろ頃合いかと思い

「ブラック」

『えぇ解析完了しました』

「結果は？」

『無尽蔵に増えるタイプですね、エネルギー源がどこかにあります』

「わかった、カズキ」

「えぇ、こっちも同じ結果よ、けどラインの逆探知は・・グランドクロス！」

『ブラックに転送しておきました』

「ブラック」

『わかってます、データ参照完了、一斉に破壊しないと増殖するタイプですね』

「まさに、ＳＥＥＤですね」

『ですね』

「そうなると、めんどくさいな」

「カズキどうする？」
「言われなくてもわかってるわよ」
「「ユニゾン・イン！」」
そういうとカズキとユニゾンする

「とりあえず、魔力変換だな」
そういうと魔力が放出され、それが徐々に緑色の粒子となる
「さーてと、データ照合完了、可能時空軸一斉射撃システム、起動」
ブラックからあらゆる環境データや地形情報、エネルギー源の経度緯度が現れ、それと同時に四方八方に魔方陣があらわれる

『エネルギーの充填、及び時間軸制御、空間把握制御開始』
魔方陣がものすごい速さで展開され

『全行程完了、空間及び時間±5』
そういうと魔方陣から巨大なビーム砲が何万発も充填される

「さぁ、一気に滅べぇェェ！」そういうと、一気に砲撃が放たれるズガガガガガガガガ！辺り一体に緑色の砲撃が蹂躙し、白煙が立ち込める

「おぉ～、跡形も無く消えたな～」
「確かに～」
そんなこともつかの間
「マスター！魔力反応増大中！」
「なんだって！」
「黒祐！あそこ！」
カズキが指した方向を見ると悪魔のような生物（ファンタシースタ

ーポータブル2のダークファルス最終形態）がいた

「・・・なぁ、カズキ」
「なに？」
「この世界、心配だな」
「えぇ」
二人ともうなだれている

「相手はＳＥＥＤ集合体か」
「みたいね、けどさ今の状況じゃ勝てないわね」
「そうだな・・・さっき魔力を削られたからな」
策を考える二人、この間、なぜか微動だにしないダークファルス

・　・　・

「しゃあない、つっこむか」
考えた結果がこれだった
「エッ！？正気？」
「やるっきゃないっしょ！？」
軽いノリで突っ込んでいく

「ハァァァァァ！」
ザシュィン！ザシュィン！
俺はメサイヤを取り出しとりあえず切りつけていく

「グォォォォォン！」
相手のダークファルスも傷を受けひるんでいくが

「ガッォオォン！」
さっきより短い咆哮をあげたと思ったら
ズガガガガガガガ！空より大量の隕石が降り注いできた
「なんちゅう規模だよ！」
そういいながらも隕石をよけていく
「でぃやぁぁぁぁぁ！」
カズキの両手からエネルギー刃が光だしそれが一本の剣みたいに合わさり
「グランドクラッシャー！フルコンボ９９！」
ズガガガガガガ！
原作なら原作で対抗するカズキだが
ガキキィィン！
「ウソッ！これだけ高威力なのに防がれた！？」
バシッ！シュィィン！
瞬時に、ダークファルスとの間合いを開けるカズキ
「っ・・・カズキが太刀打ちできない」
まさかの事態というよりか、予想外の自体だ
「イレギュラーってレベルじゃなさそうね」
「だな」
カズキのあの一発で祐に空間は砕けていいと思う程度の能力
「そうなると無限熱量・・・」

「しかないわね」
そう思いながら覚悟を決めていると

フラッ・・・
「黒祐！」
大事な決戦の時にもかかわらず、少しふらつく

「大丈夫？黒祐？」
支えてくれるカズキ

「・・・どうすりゃいいんだよ」
たぶんこのまま紅蓮鳳凰斬を放てば暴走確実だ。そんなことになれば確実に世界が吹っ飛ぶ

そんな中
「大丈夫くろちゃん？」
どこからかフェリスの声が聞こえた。ちなみに、フェリスはよく家にいるものの天界でほとんどクエリアスの手伝いをしている

「・・・フェリス？」
「そうだよ、大丈夫？」
「あぁ」
こうわいうものの体はボロボロだった
「うそつき」
「バレてた？」
「えぇ」
筒抜けだったみたいだった
「ご覧の通りの有様だ」
「わかってるわよ、少し目を瞑っててね」
そういうと俺は目を瞑る

「黒祐どうしたの？」
カズキが声をかけた。その時

ギュィィィィン！
黒祐の胸に綺麗な紅玉が現れたと同時に
「トリプルユニゾン！？」
カズキが驚いてる、それもそうだ、驚くほど3人の波長が合っているのだ

ギュィィィィン！ゴォォォォォン！
大気が振動するほど魔力が満ち溢れている
その魔力がやがて黒祐に吸収されるかの如く黒祐を中心にして渦巻いていってる

『フルドライブセーフティモード　Ｓｔａｒｔ　ＵＰ！』
そうデバイスが告げるとバリアジャケットが変化していく
攻撃的な形状をした防護服と左手に盾と刃物が一体化したような武装が発生し戦闘防護服第２形態　黒騎士になった
右手にはディバイダー９９６が握られているのだが
”Ｒｅａｃｔ　ＳＴＲＯＳＥＫ”↓”Ｒｅａｃｔ　Ｆｅｉｒｕｓ＆Ｋａｚｕｋｉ”になってた

シュィィィン！ディバイダーが駆動音が大きくなるにつれ、現在の敵の状態や周囲の環境なども様々なディスプレイが現れた。

「環境情報から何まで・・・すげぇ」
普通に喋ってるのがまだましな方だ、精神汚染がひどい状態もある

し肉体汚染もひどいほうだ。故に諸刃の剣だ
『ＥＣモード反転・・・』ナビゲーションがそう伝えると

「さぁ、ショータイムかな！」
そういうとディスプレイに”敵攻撃反応”とあかく表示される

「あぁ、わかってる！」
シュィィン！
そういうと戦闘機並みに速い速さでよける

『Ａｔｔａｃｋ　ｃｏｄｅ　Ｓｉｌｖｅｒ　Ｓｔａｒｓ“Ｈｕｎｄｒｅｄ　ｍｉｌｌｉｏｎ”！』
そういうと粒子化していたはずの本が瞬時にあらわれ、俺をとりまく環状にページが並べられ

ズガッガガガガ！
万単位のエネルギー弾がいっせいにダークファルスに向けて発射された

「グォォォォン！」
ファルスがうなりをあげている、ということは効いているらしい

ゴォォォォン！
たまってきたエネルギーを解き放つかの如くファルスも超巨大な光線を瞬時に俺に向けて放ってきた

「オート解除！極限七天環（セラフィムアブゾーバ）！」
ゴォォォォォォン！直撃はする光線
「グッ！持ちこたえてくれよ」
イレギュラーだけあって一撃一撃が高威力高火力でかなりつらい

「しゃあない、無理も承知だが・・・」
自分の限界を少し感じてきた
静かに目を閉じる

『攻撃用平行異相空間展開、展開範囲を対象に設定　・・・クリア！』
そういうと黒祐を中心としたもうひとつの世界が展開される

キュォォォン
ディバイダーに高圧縮されていく魔力、その形が少しすつ龍の形状になっていき

「合成魔術発動！」
そういうとミッド式の魔方陣と禁書式聖ジョージの魔方陣の両方が展開される
それがたがいに合わさり

「龍の吐息（ドラゴンブレス）＋銀の鉄槌（Ｓｉｌｖｅｒ　Ｈａｍｍｅｒ）＝」
キュォォォン！巨大な魔力のエネルギー体が球や龍の形になりディバイダーの刃先たまっていき、

「龍の鉄槌（ドラゴニックハンマー）ぁぁぁ！」
ギュォォォォン！まるで空間を貫かんばかりの超巨大で高圧力の光線がダークファルスに向けて放たれた

ゴォォォォォォン！それと同時に空間が振動していく
ブォォォッォォォォ！舞い上がる煙、光学ディスプレイで見ていく

とファルスが高圧力で粉々にされていた

『反応ロスト』
「やったか」
やっとこさで、めんどくさい敵を倒せた

しかし

ドグン！ドグン！ドグン！ドグン！
なにやら右腕に違和感がおきる

「っ！なんだよ！この違和感！？」
右腕のあまりの痛さに悲鳴が上がる
ボロボロボロ！右腕の皮膚が剥がれ落ち、中から真っ黒い腕が現れる
「グァァァッ！」まったく状況がわからない俺

「ユニゾン・アウト！」
カズキとフェリスが外に出てジャケットが戻るが以前腕の状況はわからない
「黒祐！大丈夫！？」
あわてふためるカズキ
「黒ちゃん！？」
フェリスもあわてている

「うわぁぁぁ！」激痛が走ると同時に、赤い文様が黒い腕に浮かび上がる
そして、うっすらと自分の今の状態がわかる

「離れろぉぉぉ！」

俺は、最後の力を振り絞って周りの二人を吹っ飛ばした、直後視界と意識が消えた

それと同時に、世界が彼を中心にして揺れた

開戦直前！

時空管理局本局ｓｉｄｅ

ＡＬＥＲＴ！ＡＬＥＲＴ！
管理局に警報が鳴り響く
「大規模次元振動接近中！局員は、衝撃に耐えてください！繰り返します大規模次元震度接近中！」機械音声が事を伝えてる
ゴォォォォン！
管理局本局がかなり揺れた。

本局中央司令室
「場所は！」管理局員が慌てふためいてきながらコンソールを叩いている
「第５５世界です」
「けど変化ありません」
現状況を伝える局員
「なんでだ！どこからなんだ！」
「映像解析終了しました！」
「はやくみせろ！」
「映像出力します」
一人の魔導師の姿映しだされる
「これのどこにあの威力があるんだ！」
「次元振動の逆探知できました」
「場所は！」
慌てて聞く管理局のエリート
「彼からです！」
「なんだと・・・」

「司令！第５５世界、なにか未知のエネルギー体によって封鎖されています」
「パターンは！」
「・・・ＥＫです！」
「なんだと・・」
恐るべき事象に驚いている司令官
「管理局全権代行で発令を・・・いや、もはやこれは緊急事態だ！なんとしてでも彼を止めろ！」
「「「「了解！」」」」
そういうとものすごい速さで色々のな情報を処理していっている
「前例のない、魔力・・・一体なんなんだ」
データベースにない状況にとまどっている
「彼の顔とか捉えられたか？」
「はい、数分前に捉えることが出来ました、いま、解析してます」
「いそぐんだ！」
「はい！」
そういいながらも必死にキーボードを叩いているオペレーター

それから数秒後
「解析でました！」
「表示しろ！」

ピコーンッ！
「神纏黒祐　年齢１４歳、ランクＳＳの魔導師（マギ）です」

「・・・我々が相手するのは得体の知れない少年だと・・・」
管理局員は絶望するしかなかった

アースラｓｉｄｅ

ｐｒｒｒ！ｐｒｒ！

「ったくなんなのよぉ！こんなときに！？」
半ば怒り気味のリンディ提督、それもその筈だ、さっきの次元振動でアースラの内部はめちゃくちゃなのだからだ
しかし、無視することもできないのでそれに出る

「はい、機動戦艦アースラ艦長、リンディハラウオンです」
どうやら本局のお偉いさんからの連絡らしい
「つながったみたいだ、そちらは大丈夫か？」
相変わらずの上から目線だ
「えぇ、少し被害がでたものの順調に進んでおります」
「そうかそれは、よかった、ご存知のとおりさっきの次元振動で第３級緊急事態が発令された」
「第３級ですか？」
ただの次元振動にしては規模がでかすぎるとかんじるリンディ
「あぁ、第３級だ、そこで君の率いる震源から一番近い君の艦隊で震源発生地である第５５世界にむかってもらう」
「了解しました、では本局からそのデータをいただきたいのですが」
「わかったすぐ送ろう、健闘を祈る」

そういうと回線を切る本局のお偉いさん
そしてデータを見る、その中には見知った顔というよりか、闇の書事件で解決に関わった少年の顔があった

「黒祐君・・・？」
驚きを隠せないリンディ提督

「提督どうしますか？」
「えぇ、あの３人を招集するわ」
「わかりました」
そういうと連絡を取り始めるエイミィだった

「あ、なのはちゃ～ん」
なのはは、リンディさんによばれアースラのミーティングルームに向かっていた。
向かっている途中の廊下で歩いていたはやてに遭遇した

「ほな、おひさしぶりやな～」
「そうだねはやてちゃん」
「そういやフェイトちゃんは？」
「先に行ってたみたいだよ」
「はやいな～フェイトちゃんは、ほんならうちらもいこか」
そういうと歩き出すはやて
「そういや、リインが教えてくれたみたいやけど、ここに来る前結構大きな次元振動があった見たいやな～うち、すっかりきづかんかったわ～」
「あぁ、レイジングハートも教えてくれたよ」
「せやけど、大きかったなぁ～」
「うん、ゴゴゴゴって振動が来たよ」
「そやな～」
そう談話しながら歩いていると無事、ミーティングルームに着いた

「リンディさん」

ミーティングルームの一角からなのはとはやてが入ってきた

「「こんにちわ～」」

「あぁ、なのは、はやて」

フェイトが気づいたらしく挨拶してくる

「フェイトちゃん～」

なのはがフェイトの近くに駆け寄る

「どうかしたんですかリンディ提督」

3人から見ても、リンディ提督の顔色が悪い

「えぇ、今回第3級緊急事態が発令されたの」

「第3級ですか？」

特捜関連の道に進もうとしているはやては十分このこと自体の大きさを理解している

「えぇ、第3級よ」

「それにしても、さっきの次元振動でですよね」

なのはがそのことをいうと

「鋭いわね、なのはちゃん、そのとおりさっきの次元振動が原因よ」

どうやらなのはの予感は当たったみたいだ

「けど、リンディさん、そんなら第3級は発令されないとちゃうんか？」はやてが疑問を口にする

「まぁね、ただの次元振動だったらよかったんだけどね」

顔が一段と青くなる

「実は、その震源地は、こうなっているの」

ピコォォォン

大型のディスプレイが表示される

「え、うそやろ・・・どうして黒祐君が」
「黒祐君・・・」
「・・・黒祐」

無常にもリンディは言い放つ
「今回の次元振動の震源は彼よ」

ディスプレイに映ったのはもはや人間でない黒い悪魔のような黒い肌でその腕に赤い紋章や天使のように光を放つラインが入っている右腕をもっている人、そして顔には赤いあざでなにか書かれていた。それが人間なのか、それとも悪魔なのか、それとも天使なのかという境目にある神纏黒祐だった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

カズキｓｉｄｅ

一方、そのころカズキたちはというと

「ちょっと、なによこれ！？」
目の前の光景に驚いてる
大切なマスターというよりか恋人というかなんというか、黒祐が完全になにかに侵食されているからだ

「ねぇ、フェリスどういうことよ！？」
若干あせってるカズキ
「落ち着いてカズキちゃん、わかることがひとつあるわ」

フェリスが何かを知ったかのように告げる
「彼の体内で私たちの魔力属性、つまり天使と悪魔が共存し始めているわ」
「それって・・・拒否反応が起るんじゃ」
「そのはずなんだよね」
黙り込む二人
「あと、あの紋章、今まで見たことがないわ」
「それほんとフェリス？」
「えぇ」
神に近い存在、いや神とほぼ同格に近い天使が見たことのない紋章・・・つまりそれは意図的に隠されたか、世界が終わりを告げ始めたかのどちらかになる

黒祐がゆっくりとその右腕を上げる
それと同時に、黒祐の上空に赤い円環が現れる

「カズキ！防いで！」
フェリスがなにかを感じ大声を上げてそういうと

「・・・グラウンド・ゼロ」
赤い円環から膨れ上がった魔力が突如エネルギーに変わり
ゴォォォォォォン！世界規模の爆発を起こした

「「極限七天環！」」二人ともそれを瞬時に展開し、その衝撃を防ぐ
ゴォォォン！まだ大気が揺れているものの爆発は収まったが、砂煙で何も見えない

そして、ゆっくりと煙が晴れていき、カズキが見た光景は

「うそ・・・でしょ」

最初は自分の目を疑いたくなった、なぜなら直径数千?地下数１０?にわたり、大地が一瞬にして吹き飛んだからだ

まるで、得体の知れない何かに寄り添うようにその場に横たわっている黒祐

「一体なんなのよ」

少し黒祐に変化が見えた、その変化とは

「ねぇ、カズキ少し黒祐の髪が長くなってない?」

「・・・いわれてみるとそうね」

そういうとなにか、感じているフェリス

「あのさぁ、黒祐と初めてユニゾンしたとき妙に心地よくなかった?」

「えぇ、なんでそのことを知ってるの?」

そういうとなにもいわず神々しく光る剣を取りだす、フェリス

「エッ!?フェリスどういうことよ?」

カズキがフェリスの行動にあわてている

「簡単な話よ、今黒祐の中には化け物がいるわ、それがなんらかの力で黒祐を掌握したみたいね」

「それって、まさか」

「倒すしかないわね」

カズキは覚悟を決め剣を抜く

「けど、黒祐って男よ」
「そこが問題なのよね・・・」
完全に性別が逆転している黒祐
「けど、そこそこ、というよりか、なんでかしらね、ほんの少し私たちに似ていないかしら？」
「まぁ、そこは否定もしない肯定もしないわ」

「けどさ、たぶん私の予想だけど私たちじゃ勝てないわね」フェリスが今の状況を見ていう
「へぇ、ずいぶんというじゃない、なら策はあるの？」
「まぁね、二人でダメなら1人でってわかるわよね？」
「へぇ、まぁ現状それしかないでしょうね」
そういうと二人の魔力が互いに合わさっていく
「わかってるじゃない」
「そちらこそね」
ピカァァン！カズキとフェリスがユニゾンする

「さぁ、黒祐！もうお目覚めの時間だよ！」
カズキとフェリスがユニゾンし、あたりに魔力が満ち溢れだす

バリアジャケットも黒の三角帽子とマントに、純白のフリルの衣装になり、エンシェントスターロードをもった、魔法少女的な姿になった

「過激ね・・・」
「お互い様ですね」
若干二人とも困っていたが気にしなかった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｖｓ暴走体　開戦！（前書き）

フラグしかねぇ！ｂｙ作者

Ｖｓ暴走体　開戦！

アースラミィーティングルームｓｉｄｅ

「ということなのよ」
相変わらずのリンディ茶を飲みながらの会議
「大体は、わかりました」
「私も」
「うちもや」
大体の状況や作戦などの説明を受け納得する３人
「ほんと私も気が引けるんだけどね」
なにやら気が重いリンディさん
「作戦開始は、第５５世界到着後すぐに開始するわ、到着まで各自休んでいてね」
「「「はい」」」
そういって３人が廊下に出ようとしたとき

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「きゃあっ！」
「な、なんなんや」
アースラを振動が襲う
「な、なんなの！？エイミィ聞こえる？」
そういうとディスプレイが立ち上がる
「聞こえてますよ、今のも次元震動です」
「なんですって、第５５世界の映像急いで出して！」
「はい」
そういうとさっきの大型ディスプレイに第５５世界の映像映る

映っていたのは、焦土と化した第５５世界だった

「ほんま、なにがあったんや黒祐君」

「どうしたの黒祐君」

「黒祐・・・」

到着まで3人とも共に戦ったその親友の姿に固唾をのんでいるしかなかった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

黒祐の精神世界ｓｉｄｅ

「ここは、どこだ?」

まわりには見知らぬ光景というよりか、どこかの病院みたいな光景で、俺はベットに横たわっている

「どうなっているんだろうな」

穏やかな風が部屋に吹いてきてに、心地よいベットで、ゆっくりと休んでいるみたいだ、自然とゆったりした感覚に襲われる

そんな風に休んでいると

「どうだい?」

突然馬乗りの状態で現れたのは、忘れもしない彼女だった

「鈴!?」

「久しぶりだね黒祐」
笑顔で笑う鈴だった

俺はどうしたらいいかわからなくなっている

「なんで鈴がここに？」
「さぁ、なんででしょうね」
「まぁ、それを聞きたいところだ」

「あんまり、長いこと私もいられないのよ、だから言わせて」
急に真剣な顔になる鈴

「あなたは、私を受け入れるの？それとも拒絶するの？どっちなの？」
俺は運命の選択を迫られることになった

「受け入れるってどういうことだよ」
「さぁね？そこは自分で考えなよ」
そういわれても反応に困る俺

「困ってるんでしょ？」
「あぁ」

「なら、死んでちょうだい」鈴がメサイヤを出してきた。そのとたん病院の風景がこわれ戦闘空間みたいなところになる

「やなこった！」
ガキィィィン！
俺と鈴は互いにメサイヤを交える

「へぇ、私に反抗するんだ？死んじゃうよ？」
鈴は残忍な笑みを浮かべる
「死なねぇように反抗するまでだ」

「「ハァッァァ！」」
二人の決戦が始まった
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

現実世界ｓｉｄｅ

目の前に広がるのは焦土、その中に佇む化け物と呼べる少年、それ

を相手に果敢に戦っている魔女

「ライトニングランサー！」
チュィィィン！ズガガガガガ！杖を一振りしたところに魔方陣が現れそこから大量の雷でできた槍が黒祐に向かって降り注ぐ

「雷神の槍（ミルニヨル）！」
ゴォン！ザシュィィン！
カズキの手から現れた雷が一本の槍となって黒祐に狙いを定め飛んでいく

『魔王の槍（サタナス）』
シュガァァン！
黒祐もカズキと同様、黒い何かでできた槍を投げはなち

ズガガガガァァン！相殺されて爆発する

シュパンッ！カズキが思いっきり空に上がり

「アトランティス・ストライク！フルコンボ！」
ゴォォォォン！ズガガガガガ！カズキの足に溜められた魔力が黒祐めがけて思いっきり解き放たれるが

『防御（ディフェンド）』
ゴオォォッォン！それをシールドを張り防ぐ

「防がれた！」
時空をゆがませてしまうレベルの技を軽々ととめる黒祐

驚くのも無理はないだろう、あれだけの数を防がれているユニゾン状態のカズキ
その驚いている状態の中
「っ！」
『ｃｏｄｅ　ｎａｍｅ　ｓｔａｒ　ｅｌｉｍｉｎａｔｉｏｎ』
ゴォォォォン！
とてつもないエネルギー量の魔力攻撃を瞬時に何も躊躇いもなく打ち込んでくる黒祐、回避行動をとりたいもののあいにく黒祐は戦闘マシーンとかしたみたいだ

「埒が明かない、それどころか火力で少し押されてるわ、しょうがないあまり黒祐相手には見せたくなかったんだけど、おきなさいグランドクロス」
『Ｊａ』
そういうと首元に下げられていたペンダントが光りだす
「緊急事態なの、サポート頼むわね」
『ｙｅｓ　ｓｉｒ』
そういうとペンダントが光だし、エンシェントスターロードに吸い込まれるように入っていった

「さぁ、姿をあらわしなさい、グランドクロス！」
『ＯＫ　ｍａｓｔｅｒ』
そういうと胸元のペンダントを介してカズキの持ってるスターロードに魔方陣が現れる

「もう後には戻れないわよ黒祐、ここからは手加減なしよ！」
そういうとスターロードの先端部分から大きい白い翼が現れる

「真名開放！エンシェントグランドロード！」

名前を呼びはなつと同時に大きな白い翼が空に舞い上がり

「グランドロード！」
『ＯＫｍａｓｔｅｒ』
覚悟の視線で黒祐を見るカズキ

「スターライトォォォォ！」
グランドロードの杖先を黒祐に向けありったけの魔力を黒祐に向かってためこむカズキ
キュィィィィン！

なのはの数百倍もある大きさのスターライトブレイカーのカスタムバージョンを撃とうとしている

「イレイザァァァァ！」
ギュォォォォォン！いくつもの魔力球から世界を治める龍のような形をした金色の光線が黒祐に向かって放たれる

『超高圧砲撃接近、防御体制に移行』
そういうと防ぎに入る黒祐

『想定外威力、防御不能、対象者は被弾に備えてください』
ズガガガガガガ！
『グァァァァァ！』黒祐から悲鳴が上がる

「・・・やったか？」
そう思っていると

『自動システム終了・・・オートシステムを全部解除します』
そして無情にも言い放つ黒祐のシステム、いや、今回は違った

そういうと黒祐の体が黒い光に包まれる

「はぁ～い、この子の体と、世界は掌握されました～」発せられたのはいつもと違った声

そういうとあらわれたのは黒く長い髪、黒祐のバリアジャケットを纏った血ぬられた刀を持った女の人だった

本戦開始！三つの翼堕ちる、されどよみがえり復讐する

なのはｓｉｄｅ

「提督！今なら行けます」
計器を見て告げるエイミィと
「了解」
そういうと3人の方をみて

「じゃあ、気を付けてね」ディスプレイ越しにリンディさんが言ってきた。ここはアースラ出発ゲート
「「「はい」」」元気に返事をするセットアップした姿の3人

「高町なのはとレイジングハート」
「フェイト・テスタロッサとバルディッシュ」
「八神はやてとシュベルトクロイツェフ」

「「「いきます！」」」
そういうと空に駆け上がる3人
バシュィィン！
3人が親友を救うために走り出した

バシュィィン！バシュィィン！

『ｍａｓｔｅｒ！』
「どうしたのレイジングハート？」
『Ｍａｓｔｅｒ　ｔｈｅ　ｍａｇｉｃ　ｄｉｓａｐｐｅａｒｅｄ

黒祐（　マスター黒祐の魔力が消滅しました）』
シュタッ！
「黒祐君が・・・」
「うそやろ」
レイジングハートが告げた事実に驚愕し、立ち止まってしまう3人

『Ｂｕｔ　ａｔ　ｅｘａｃｔｌｙ　ｔｈｅ　ｐｌａｃｅ　ｌｉｋｅ　ｍａｇｉｃ　ｂｕｔ　ｉｔ　ｉｓ（ですが、その場所にまったくではありませんが似た魔力はあります）』
「ってことはまだ生きてるの？」
『黒祐'ｓ　ｌｉｆｅ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　ｒｅａｃｔｉｏｎ，　ｓｏ，　Ｉ　ｓｕｇｇｅｓｔ　ｔｈａｔ　ｇｏｉｎｇ　ａ　ｌｉｔｔｌｅ　ｆａｓｔｅｒ（えぇ、マスター黒祐の生命反応はあります、ですので、もう少し早い速度で向かうことを提案します）』
「わかったよ、レイジングハート、全力全開で行くよ」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！』
そういうとさっきより少し速い速度で向かう3人

そして、黒祐に似た魔力反応のところにつくと

「はぁ～い、この子の体と、世界は掌握されました～」

すでに、そこには、セットアップながらもボロボロのカズキさんと黒祐君に似た女の人がいて肝心の黒祐はいなかった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「はぁ～い、この子の体と、世界は掌握されました～」
ズガァァァン！その途端、その女の人から魔力が膨大に膨れ上がる
「カズキさん！」
「なのはちゃん！フェイトちゃん！はやてちゃん！」
カズキが声の方を見るとあの3人がいた
「で、なにしにきたのかな～そこの４人さんは？」
「簡単よ、黒祐を返してちょうだい！？」
「へぇ、この子を取りに来たんだぁ～」
そういうとその女の人の隣に現れる黒祐、瞳には生気がない
「「「「っ！黒祐（君）！」」」」
「あげないわよ～」
そういうと黒祐を抱しめると、すぅ～っと消えていく黒祐
「・・・黒祐を」静かに怒気をためるカズキ
「えっ？なに？」
「黒祐を・・・」
「よく聞こえないよ～」
沈黙の辺りに響き渡るカズキの声
「私の大切な人を！かえせぇぇぇぇぇ！」
カズキの魔力が突然膨大になり、気迫が目に見えるレベルまで増長する

「カズキさん、私も手伝いします！」
「うちもや」
「わたしも」
カズキを筆頭に４人で一斉に襲い掛かる

「ハァァッ！」
ガキッッン！カズキが黒祐でも反応できない速さで武器を取り出し切りかかるが

「唯閃！」相手も七本の魔力ワイヤーがカズキを切り裂こうとしたが

「っ！」
ガキッッン！二人の武器が同時に弾かる

「結構やるわねぇ～」
「あなたもね」
「名前はわかってるの？」
「いいや、」
「へぇ～じゃあ、冥土の土産に教えてあげる、私の名前は、神纏鈴よ」
「鈴ねぇ～まぁ、あなたを倒してその体の持ち主返していただくわよ！」
そういうと４対１での勝負が始まった

「いくわよ！３人とも！」
「「「はい」」」
そういうと
「ディバインバスター！」
ゴォォォン！鈴めがけてなのはの光線が放たれ

「ハーケンスラッシュ　！」
なのはと同時にフェイトの技も炸裂し

「デアボリック・エミッション！」
締めにはやての技が鈴を包み込む

ズガガガガァン！鈴に直撃するが

「う～ん、まぁまぁかなぁ～」
鈴はそこに涼しげな顔をしてたたずんでいた

「まぁ、これは、名前がね～いまいちだからね～まぁ、こんな感じでいいのかな～」
そういうと鈴の背中辺りにに白いエネルギー状の翼が現れ

「天使の波（アンダス・エンジェルーノ）！」
ズガガガガ！
鈴の広げた翼が大きくなり、その中から現れた光の奔流がなのはたちを攻撃をした

「バリア！」
「シールド！」
「プロテクション！」
ズガガガガ！なおも続く波状攻撃

「キャッ！」
「キャッ！」
「ワッ！」
なのはとフェイトとはやてのシールドが切れ

「「「キャァァァ！」」」
なのは達3人に直撃した

「っ！なのはちゃん！フェイトちゃん！はやてちゃん！」
直撃をうけ心配するカズキ
「っ！鈴！」
そういうとカズキがメサイヤで斬りかかろうとした

「な～んてね、私がそんな単純思考だと思った？」

キュィィィン！ズガガガガガガ！
突如現れた魔方陣の中から現れた光線で吹っ飛ばされる鈴

「ってェ～結構、やるなぁ～」
それでもかすり傷程度？しかない鈴

「まだでしょ？抗ってみなさいよ～」
挑発してくる鈴

「ハイハイ」
黒祐にした魔力が当たり一面に満ちる

「んじゃあ、こういうことでね」
そういうと瞬時にカズキの背後に回りこみ

「即興拳舞（トッカータ）！」
ズガガガ！3方向から同時に鈴の剣戟が迫る

「っ！」
ガキガキガキ！防ぐ一方のカズキだが
「そこよ！Ｚセイバー！」
メサイヤでＺの字に鈴を切りつける
「ッ！調子に乗るなぁぁ！」
激昂した鈴がものすごい速さで
「龍の殺息（ドラゴンブレス）！」
ゴォォォォォン！ほぼ０距離でそれを放ってくる
「極限七天環（セラフィムアブゾーバ）！」
間一髪でそれを防ぐが
ギリギリギリ！ピシッ！
盾にひびが入る
シュタッ！一気にそこから離れると
ゴォォォォォン！ズガァァァン！
光線が地面を貫いた
「小賢しい！出でよ友！出番だエア！」
そういうと鈴の手に乖離剣エアが現れる
「そっちがそれなら、こっちはこうよ！」
カズキも約束（エクス）された勝利（カリ）の剣（バー）を取り出し

ググググ！瓦礫から音が聞こえる

「ええんやな、もうええわ、踏ん切りついたわ」
そういうはやて
「うん、はやてちゃんの言うとおりだね」
「目の前にいるのは敵」
ボロボロになったなのはたちが起き上がり

シャキッ！シュィィィン！各自必殺の構えになる、それと同時に
先頭モードになる3人

「へぇ～収束魔法ねぇ～それってラグがあるんじゃなかったかしら？」
そういいながらなのはたちにとどめをさそうとする鈴だが

シュパッ！バシッ！
「さっきもいったでしょ単純志向じゃないって」
カズキが鈴にアトラック＝ナチャを仕掛けていた

「ナイスや、カズキさん！ほな遠慮なく行くで！響け、終焉の笛！」
「うん、全力全開！」
「今の力を出し尽くすだけ！疾風迅雷！」
そういうと鈴めがけて魔力を溜め込む3人

「スターライトー！」
「ラグナロクー！」
「プラズマザンバー！」
キュォォォォン！エネルギーが一気に溜まる同時に共鳴しあう3つの砲撃、その量は惑星一つ分。
ただでさえ、不安定な空間に彼女達の膨大な魔力が影響し、空間が

揺れ始め、そして

「「「ブレイカァァァァー！」」」

ゴォォォォォォォン！彼女達から放たれた膨大な3つの集束魔法が1つの虹色の光の奔流となって鈴を襲う

「うわぁぁぁぁ！」

さすがの鈴も直撃を受けて声を荒げる

そして、カズキの足元に極大の魔方陣が現れる

「さっきまで、なめたこと言ってくれたじゃない！覚悟はできてるんでしょうね！？」

完全に血が上っているカズキ、と同時に一本の短剣にためられていく魔力

「呼応せよ、我は光と闇の間をつかさどるもの、魔神（ローレムゲニア）よ、大天使（アルカゲロス）よ、今ひとつになりて、すべてを飲み込む力（アブソーヴォヌルスディニグト）となれ！」

そういうとその短剣が青白い光と同時に赤黒い光を放つと同時にその剣が姿を現す

その剣は、黒き翼の魔天剣（サスペンデリウスデーモンタージャン）と呼ばれている、今は限定された威力しかないがその威力は、その世界やその時間などあらゆるものを止め、初期化する能力を持っており、もちろん神でさえも殺せてしまう使い方を間違えれば術者はおろか世界自体の存在が初期化される武器である

「さぁ、二重螺旋にとらわれる覚悟はできたかしらぁぁ！？」
カズキの二つの光が増し
「絶望を約束された終焉の光！（デヴィルサ　フィーネプロミター　ルーメン　デスペラティオ）」
ゴォォォォォォォン！トリプルブレイカーの直後にそれを放つカズキ
そして、光があたりを包み込み爆風が当たりに蹂躙し
「キヤァァァァァ！」
鈴が声を上げ、堕ちた

激突と邂逅

黒祐の精神世界ｓｉｄｅ

もう４時間以上剣で争っている二人
ガキッン！ガキッン！ガキッ！ガキッ！
ものすごい速さで互いの剣がぶつかり合い、火花を散らす
「なめるんじゃねぇよぉぉぉ！」
一気になぎ払う鈴
「こっちこそ！」
ガキッン！たがいに魔力を乗せた剣でぶつかり合う
グホォォォォ！
乱風が舞い上がる

「蒼竜！」唸りを上げる鈴のメサイヤと
「業火！」同様にうなりを上げる俺のメサイヤ

「「一閃！」」

ズガガァァン！龍と不死鳥が交わる

ガキッン！ガキッン！互いの剣技がさらに精度が増す

「やるわね黒祐！」
「こちとら、無駄に鍛えているものでね！」
一瞬でも隙を見せれば死にかねないレベルの戦いで戦ってる二人

ガキッン！ガキッン！
ザシュンッ！切り上げを放つ鈴切り下げを放つ俺と

シュィィン！ゴォォォォン！ぶつかった衝撃で爆風が舞い上がる

「即興拳舞（トッカータ）！」

ズガガガ！３方向から同時に鈴の剣戟が迫る

「四連斬！」

すかさず俺も剣を四本あらわれそれで応戦する

ガキッッン！

俺は魔方陣を瞬時に出現させ

「十字天雷（ヴァニッシュクロス）！」

鈴の頭上へ飛び上がると同時にその身を縦回転させ、加速度をつけた剣で斬りつける。

その瞬間、　極大化させる魔力エネルギーで『斬り砕く』のではなく『焼き払う』方向に極大化させて縦一文字に鈴を両断しようとするが

「甘い！十字断罪（スラッシュ・クロス）！」

鈴も対抗するべく剣から発生させた魔力のエネルギーでインパクトの瞬間に極大化させ相殺させてきた

ドガァァァァン！

ぶつかった爆風により煙が舞い上がるが、そんな余裕がない二人

「完全武装（フルブースト）！」

そういうと、鈴の背後からたくさんの重火器が現れ

ズガガガガガガガガ！一斉に発射された

「十字浄火（クロス・ファイア）！」

魔方陣が俺の全身に現れ魔力で構成されている全身の装甲のあちこちから大小さまざまなビームカノンやガトリングガンや機銃などに

変換され、全方位へ一斉射撃で周囲の弾丸をなぎ払った

「相殺するばかりじゃつまらないわよ！真・聖歌隊（グレ　ゴリオアイア）」

鈴の腕に何千何百にも束ねられた赤き火花が融合した強大な紅蓮の神槍が現れた

「（おいおい、それって神具・・・）」そう思っているとザシュィィィン！真・聖歌隊（グレ　ゴリオアイア）が俺の頬をかすめた

「これで対抗だ！全次元切断術式！」

キュォォォォン！魔方陣が現れカーテナオリジナルが現れたくさんの残骸物質があらわれる

ズガガガガガ！それを思いっきり鈴にぶつけるが

「甘いわよ！」

ズシャ！ズシャ！ズシャ！それを貫かれる

ガキッン！ガキッン！

たがいに剣戟で争う

「ハァハァ」

「ハァ・・・ハァ・・」

互いに息が切れてくる

「終わらせてあげる！」

「こっとちもだ」

互いにこの一撃で決める決心する

「「うらぁぁぁぁあ！」」

二人の魔力が極限まで増大する

「なんだお前もか」
「それは、こっちの台詞だわ」
お互い持っているのは、一本の剣ーメサイヤだ

そして、二人とも魔力変換で炎を作り出す
ギュォォォォン！あたりを焔と黒炎があたりを包み込む
「いくぞ！」
「こっちもね！」
そういうとお互いの背中から不死鳥が現れる、それと同時にメサイヤが一気に溜め込んだ力を解き放つ

「「はぁぁぁぁ！」」
お互いが一気に空に飛び出しお互いめがけて

「「紅蓮鳳凰斬！」」
キュォォォン！ゴォォォォォン！

技の発動と同時に一気にお互いの不死鳥がぶつかり合い、爆風が舞い上がる

「「そこだ！」」
そういうと、世界がゆっくりと動き始める

シュィィィン！まるでスローモーションの感覚がする

ザシュッ！互いの刀が交わり

「そう、君の決断はこうなんだね」
「あぁ、そうだ」
鈴のメサイヤが黒祐の心臓を貫いていた、一方黒祐の刀は、鈴の心臓を貫いていなかった、というよりか寸止めしていた
黒祐の体の中に自然とはいってくる鈴の感情、それはとても暖かいものだった

「正解よ・・・よくやったわね」
少しなきかけている鈴
「おめでとう、そしてありがとう、もう迷わずにすむわ」
「そうか、よかった」
心臓に刺さった刀が粒子となって消えていく
ゆっくりとまるで毛布を抱くように、鈴が俺に抱きついてくる。

「大好きだよ・・・黒祐」
「エッ・・・」
予想外な言葉に驚く
その途端、粒子となった鈴が俺を包み込む

「・・・さて、帰るか」
踏ん切りがついた俺は光に向かって歩き出した

俺が目覚めたときには、そこにはぼろぼろのなのはたちが倒れてた
「まさか、黒祐君？」なのはがいった。
「あぁ、そうだ。大丈夫じゃなさそうだな」
「エッ、これくらい大丈夫だよ」
「おとなしく寝てろ」
「わかった」
「イシュトリルトンの杖！」
なのはやフェイトの体を光が包み込む
「すまない。ほんとすまない」
俺は、自分の弱さに、腹が立った
「別にいいよ、まだ生きているんだし」
「今回は、俺のせいだ」
「そんな気にしなくても・・・」
「しかし、今回は、「あなたは、あなたでしょ！しっかりしなさい！」」
フリルや帽子がボロボロなカズキが俺に向かって言った
俺は、それに温もりという物を感じた。
そして、踏ん切りがついた。
これから、こいつらを傷つけないように守るということを
「あぁ、すまなかったな」
「それでいいのよ」カズキが言った。
「わかった」
「運びなさいよ、私たちを」
「わかった」

こうして、俺は、試練を乗り越えハッピーエンドのはずだった

Ｖｓ夢を狩る剣士（前書き）

黄昏「あの人の登場だぁぁぁ！」
観客「ワァァァァ！」
→若干おかしい

Ｖｓ夢を狩る剣士

「・・・なにかがおかしい」
さっきからあたりに満ちた瘴気が一向に晴れる気配がしない

「おい、なのは、フェイト、はやて、俺の近くに寄れ」
「「「うん」」」なのはたちが俺の周りに集まる
「なんか囲まれてるよ黒祐」
「あぁ、しかもめんどくさいのにな」
そうフェイトに告げる
異常にいち早く察知した俺は、なのはたちにそう告げる
「なのは、全ての通信が行けるかどうか確認を、フェイトとはやて、カズキは、広域警戒だ」
俺は、４人に指示を飛ばす、こういう時に限って嫌な気配は的中するものである
「まさか、イレギュラーが出てきたりしないだろうな・・・」
そうつぶやくとあたりの瘴気が晴れる
「黒祐、本戦の始まりみたいだよ」カズキがその光景を目にして静かに告げる
「みたいだな・・・」
最悪な予感とはつくづくあたるものだ

グォォォォン！目の前にいるのは、一体のダークファルスディオス、それもめんどくさいことに通常ではありえない覚醒形態だ。

「あれ・・・なに？」
若干すくんでいるなのは

「ほんとなんなの・・・」
「恐ろしい相手や・・・」
それは、ほかの二人も変わらないことだった

「3人とも、俺から離れるなよ」
そうやさしく諭すと攻撃が当たらないように結界をその3人の周りにはる
そして張った直後
グォォォォン！ダークファルス・ディオスの形状が変わる、元ダークファルスだったものは人型の形になっていった

「・・・何者だキサマ」黒のロングヘアーで白の軍服を着ている少女が現れ
蒼き刀身しなやかに伸びたそのフォルム力強い輝きを放つ覚悟の長剣をもった原作そっくりのナギサさんが現れた

「なんでなんだよ」
若干世界に驚きとため息を漏らす。相手からはとてつもない魔力、そして思う、イレギュラーもたいがいにしてくれとな

「これもさだめだ！」
カチッ！ギュォォォォン！原作とは、ことなり縦横無尽に空間を支配しておれに襲い掛かってくるナギサ
「っ・・・！」あまりの速さで防ぐのが精いっぱいの俺
それにたいして、こっちでもありになってるカードリッジシステムを使って果敢に攻めてくるナギサ
「ハァァァァ！」
ガキィンガキィンガキィン！連続で切り付けてくるナギサ

「負けてられないんだよぉッォ！」

そういうと足元に魔方陣が展開されるそこから一本の剣が現れる

「メサイヤ！」

真っ黒い粒子の中から俺の相棒が現れた

ガキッンガキッン！ひとまずメサイヤで応戦する

ナギサの剣戟は、おもったより重撃だ。反撃するのがきつくなる

「射殺する神槍（フェンリル・ボルグ）！」ナギサにめがけて一斉に放つ

「こざかしい、ナ・グランツ！」発射直後、ナギサも矢を放ってきた

そして、見事に相殺される

「ハァァァッ！」ナギサが剣を振り下ろすと俺に向かって衝撃波が向かってくる

「極限七天環（セラフィム・ブゾーバ）！」

シールドで防ぐ、そして

「その名は炎、その役は剣（ＩＮＦＩＩＭＳ）顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（ＩＣＲＭＭＢＧＰ）、イノケンティウス！」

どこかの神父もびっくりするほど魔女狩りの王（イノケンティウス）が６体同時に現れ、

それが一斉にナギサに襲い掛かる

「こんな、炎の偶像・・・斬り伏せるのみ！」

そういうとナギサはカードリッジをロードしそれをすぐに斬り伏せた

だが、俺にとってそれは、囮でしかなく

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）！」いつもより数倍高密度の黄金の斬撃がナギサに直撃するもののの

ゴォォォォン！

・

・・・

「なんだ、生ぬるいぞ」
正真正銘、化け物だった、そして、直感的に自分の置かれている状況を理解する

「カズキ！ユニゾンだ！」
「えぇ！ユニゾン・イン！」
そういうとカズキと波長を限りなく合わせる
波長が合うにつれてバリアジャケットが黒騎士に変化する、そして、完全に変わってナギサにこう告げる

「これが幻想なら、その幻想をブチ殺す！」
そういうと、前使ったことがあるエクシードカリバーが現れ、それから真紅色に光りだす

「赤対青、黒対白、たがいに相反する者同士の戦いか・・・面白くなってきた！」
そういうとナギサは、額にあった眼帯を外すと同時に体が青白く光りだす。それに対して俺も背中から黒い翼が生え赤黒く光りだす
それは、増大していく二つがぶつかった境界では、摩擦で雷が起きている、たがいの魔力が極限まで高まったところで
「ハァァァア！」
たがいに駆け出す、たがいの目には相手を殺すという感情しかない
「ディオス・デスカリバー！」青白い邪悪な斬撃波が俺に一直線で向かうが
「負けるわけには、いかないんだよぉぉ！『天地乖離する聖なる神の星（エリ・エヌマ・サバクタニシュ）』！」同時に俺も光線を一直線でナギサに向けて放つ

ブチブチブチ！詠唱破棄して発動したせいで、そのアドバンテージとして、あちらこちらから激痛が走る。だが、そんなこと言って気が緩んでたら一気に殺される。しかも、さっきの戦いでなのはたちから受けたダメージが完全に癒えていなかったみたいだ

ゴォォォォン！そして予想外の同じ威力に相殺される二つ
「「そこだっ！」」
たがいに相手のすきをほぼ同時に見切り、そこに切り込む
ザシュゥゥゥン！

・　・　・　・

「・・・っ！」バタッ！
ナギサが地面に倒れた。それと同時に俺も
バタッ！
地面に倒れこんだ
「楽しかったぞ・・・少年」
ナギサは、その言葉とともに粒子となって消えた

「黒祐君！黒祐君！」
「黒祐！しっかりして！」
「しんかりするんや、黒祐君」
なのはたちが俺を心配している、そして、涙を流している
むちゃをしすぎたせいか、それともリミットを外しすぎたせいか、
体のあちらこちらの内出血がひどい。そして、魔力もほぼ空、
「イシュ・・トリルトン・・・の杖、発動」
そういうと動作をオートにして杖を使う、緑の光が俺をやさしく包

み込む
「ふぅ・・・」若干は、何とかなったものの、全部ではなさそうだ
カズキとユニゾンしていたおかげで、大事には至らないだろう
「ははっ、俺って男失格だな・・・」
あからさまな死亡フラグだ
「黒祐君、もうしゃべらないで！」
なのはが気遣ってくれる
「そうだな・・・」
そういうと、俺の意識は、闇に落ちた

「（あぁ、ここはなんだろうな）」
周りには、古城などがたくさん建っている世界

「（これは夢か）」
妙にリアルな夢だ

「（俺は一体誰だ）」
そう思いながらも体が勝手に動く、俺はどこかの大広間に出たはず
なのだが気づいたら城の月明りが照らす部屋にいた

「（なんだ、ここは？）」
その部屋は割とこじんまりしていた

「（どうなってるんだ）」
目の前には二人の女性
「（この黒いドレスの人と紺色のドレス綺麗だなぁ～）」
その人の顔が見たいと思い、顔をあげてみると

「（カズキ・・・フェリス）」
驚きながらも、その二人の言葉が耳に入る
「悲しいわ・・・どうして私たちわかれなきゃ・・・なんとかしてよぉ」
泣いているカズキ
「いっつも一緒だよっていったじゃない・・・黒」
同じく泣いているフェリス
「ここにも戦火が迫ってくる、二人を危険な目にあわすわけにはいかない」
なにやら物騒な言葉が聞こえる
「黒ちゃん・・・」
「大丈夫だ、戻る、二人のような美しい女性をこの世において行くわけにはいかないからね・・・絶対戻るさ」
そういうと何やら剣の形のペンダントが渡される
「絶対、戻ってきてよね」
「あぁ」
その言葉を最後に俺の夢は終わった

その後

カタカタカタカタ！キーボードをたたく音がしきりに聞こえる
「書類整理めんどい～！」
「わかってるわよ！それより、この高存在比戦闘空間のついての書類どうする？」
「どうせあいつらのことだから碌なものに使わないだろ。説明でき

ないって書いといてくれ」
「了解～。終わったら翠屋につれってってよ」
「終わったらな」はかない希望のように俺は、いった。
「はぁ～い」

「書類整理、全然終わらねー！」

俺は、目の前の紙の山をうんざりしながら相手にしていた

始動　属性４騎士

ある日

俺は、買い物してなのは達と出会って喫茶店で話をしてなのはたちを途中まで送って今、アースラにいる。
なぜかって?それは、リンディさんがあわてて俺を呼び出したからである。
「ちょっと!はやくきて!待たせてるんだから!」
「わかってますよ!」
俺が見たモニターには、かなり歳をくったおばさん一人とおじさんが二人いた。
「ありがとう。リンディ提督。下がってくれ!」
「ハッ!」リンディさんが足早に去っていった。
「さて、本題に入ろうかね。」右端のおばさんがそう言った。
「今回の君の働きに大いに感謝している。お礼を言わせてくれ。ありがとう神纏黒祐君」真ん中のおじさんがそう言った。
「あ、ありがとうございます」俺は、緊張してしまった。
「そう緊張せんでよい。」左端のおじさんが言った。
「それでなのだが君に部隊と三等空佐の地位を与えようと思う」左端のおじさんが言った
「えっ?本当ですか?」管理局でこの年齢で三等空佐の地位を持っているのは、そう稀にいるものでない。
「本当じゃ。」右端のおばさんがいった。
「今後、色々あると思うから君に各次元世界の自由通行許可証を与える。常時携帯するように。」
「ありがとうございます」

そういうと俺のバリアジャケットのベルトに杖と剣二本がクロスしたアクセサリーがついた。
「それで部隊はいつまでに作れば、いいですか?人数制限とかはあるんですか?」
「もちろん人数制限はある。」真ん中のおじさんが言った。
「ユニゾンデバイス抜きでの7人じゃ」右端のおばさんが言った
「期限は・・・とにかく作ったら一声かけてくれ。」左端のおじさんがいった。
「わかりました。」
「以上だ!今回は、ありがとう。今後の君の活躍に期待する」
「ハッ!」俺は、敬礼した。
モニターが閉じたあと俺は、家に向かった。
そして、床についた。

「あの子は、Kの子供といったな」真ん中のおじさんがいった
「えぇ、そうですね」右端のおばさんが言う
「しかも、あ奴の隣にいたのは、紛れもなく彼女だったな」
「そうだな」
「これは、期待できそうじゃ、フォフォフォ」

「楽しみにしてるぞ神の使いよ・・・」

その日の夕方

「(ここは、どこだ?)」
たぶん見方からして夢を見てるのだろう、けど、何かが違うまるでお告げみたいだ

「(地球だよな・・・)」
目の前に広がる光景はまるで地球ではないどこかの光景、見えるの

は大きいオーロラと、その後ろにある洞窟だ
「（っ！体が勝手に！）」
何かに導かれるかの如く体がその洞窟の中に入っていく
・
・
・
「（人？それも女の子？）」
俺はそれを見た。次の瞬間まるで映画みたいにその景色がフェードアウトした

「（火山か・・・）」
次に見た光景は、まわりには燃えたぎる溶岩が流れている火山だった
「（・・・まぁ、気のままに）」
そう頭の中で思うと、体が火口の方に向かって歩いて行った

「（またか・・・）」
見た先にあったのは、綺麗なルビーの宝石の中に入ってる俺と同年代の男の子だった
そして、瞬時に意識が途切れた

「（こんどは、いたって普通だな）」
と思ってたのだが

「（あぁ～そういうことね）」
周りを見渡してみると雷がひっきりなしになっていた
思うがままに体を任せているとそれは頂上にあった

「（また、女の子か）」
それを見た瞬間意識がフェードアウトした

「（これで４つ目か・・・いつまで続くんだろうな）」
そう思いながら見ていると
「（研究室・・・今までとは全然違う）」
違和感が大ありな夢だ。周りを見渡すと一枚の書類が目に入った
「（風のエレメント）」
焦燥感に駆られる
「（どういうことだ？）」
周りに落ちているのは、注射器や薬の残骸、意図不明な魔力機器ばかりだ

「（ちょいとこりゃ、やべぇかもしれないな）」
そう思いながら走っていると

「（そういうことか）」
一人の少女が、カプセルの中に横たわっていた

俺の意識はそこで完全に途切れた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5989o/

魔法少女リリカルなのは　～神の子孫の騎士の物語～

2011年11月10日09時25分発行